

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)

原 島 陽 一
松 尾 正 人

〔解題追記〕 本誌前号の(一)に続き、本号には(二)を掲載する。前号の解題に記したように、本号には前号を受けて、卷子本の十三―二十四卷分、半紙本の五―八冊分を収録し、これで「岡谷文書」は全文の翻刻が完結したことになる。翻刻の方針や体裁などは前号と変らないので、前号の凡例を参照されたい。発信人や宛名および成立年次の推定については、確実と考え得るものに(一)を付して記したが、本文内容への注記を含めて不十分な点が多く、編者としては心残りである。今後、維新期の史料として、少しでも多くの方がご利用下さる過程で、説明が進むなら何よりの幸いである。なお、内容を精査した結果、全体の数量は四九八通となったので、前号で書翰類四六〇通余と記した概数を訂正させていただきたい。

また、末尾に「参考三」として付載した「発信人別書翰類番号一覧」は、前号分を合せた発信人の検索用であるが、本表の作成には史料館の山田哲好氏のご協力を得た。記して謝意を表する。

「岡谷文書」目録（統）

（頁）

岡谷文書卷十三、卷十五目次……………（三〇）

岡谷文書 十三……………（三〇）

二五九 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治七年）三月

二十一日

二六〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治七年）三月

二十六日

二六一 浪士と脱走につき御沙汰書写「高松實村宛」

（慶応四年）三月

二六二 長谷信篤書翰「武者小路公香宛」（慶応四年）

二月十四日

二六三 被仰出書写（秋元禮朝△但馬守▽・酒井忠強

△下野守▽謹慎差免状）（慶応四年）四月十四

日

二六四 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治二年）三月

九日

二六五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月四日

二六六 高松實村書翰「岡谷繁實宛」五月十一日

二六七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治二年）四月

二十七日

二六八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治二年）四月

二十七日

二六九 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治二年）五月

二日

二七〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」七月十日

二七一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（明治八年）五月

五日

二七二 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（慶応四年）三月

二日

二七三 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（慶応四年）四月

十八日

二七四 東山道総督府執事回状写（高木大藏・高坂源太

封つき）（慶応四年）二月十五日

二七五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（慶応四年）九月

十五日

二七六 高松保實書翰「武者小路公香宛」(慶応四年)

二月十四日

二七七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 四月

十六日

岡谷文書 十四 (三六)

二七八 戸田忠至書翰「中川久昭宛」(文久三年) 九月

六日

二七九 某章藏書翰「(宛先不明)」(文久三年)

二八〇 松本擬書翰「(宛先不明)」(慶応元年) 九月二

十八日

二八一 山陵御普請についての伺案「(宛先不明)」

二八二 (差出し人不明書翰)「(宛先不明)」三月十一日

二八三 禁門の変の報告書案「(宛先不明)」(元治元年)

二八四 中川久昭書翰「戸田忠至宛」正月十七日

二八五 供連人数につき御沙汰書(断片)「(宛先不明)」

二八六 戸田忠至書翰「(宛先不明)」(安政四年) 十一

月四日

二八七 畝火山東北陵修補和歌詞書案

二八八 允恭天皇御陵地引渡しについての伺案「(宛先

不明)」(元治元年)

二八九 川村正平書翰「岡谷繁實宛」一月十一日

二九〇 平松時厚書翰「岡谷繁實宛」

二九一 中川久昭書翰「(宛先不明)」(元治元年) 七月

十二日

二九二 善福寺警衛歎願下書「(宛先不明)」(文久元年)

八月二十五日

二九三 大羽循之進意見書案(慶応元年) 閏五月二十二

日

二九四 参与書翰「戸田忠至宛」十二月二十六日

二九五 分地御渡しについての意見書案

岡谷文書 十五 (三七)

二九六 大原重徳書翰「嵯峨實愛宛」(慶応元年) 七月

十三日

二九七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至ほか五人宛」二月十七日

二九八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」

二九九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(文久二年) 閏八月二十二日

月二十二日

三〇〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月十七日

三〇一 善福寺誓衛歎願下書「(宛先不明)」(文久元年)

三〇二 朝廷幕府間の不穩についての意見書案(文久元年)

年)

三〇三 戸田忠至書翰「齊田明善宛」五月二十三日

三〇四 親征その他意見書案(慶応四年)

三〇五 武具大破・城郭普請の意見書案(断片)(慶応元年)

元年)

三〇六 戸田家へ忠勤の覚(文久二年)

三〇七 外国人への対応覚書(慶応四年)

三〇八 戸田忠至書翰「齊田明善宛」九月二十九日

三〇九 戸田忠至書翰「齊田明善宛」十月一日

三一〇 戸田忠至履歷下書

三一 戸田忠至忠勤についての覚書(安政五年)

岡谷文書卷十六、卷十八目次……………(四三)

岡谷文書 十六……………(四三)

三一二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏月八日

八日

三二三 嵯峨實愛書翰「(宛先不明)」(慶応元年)

三二四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 六月十五日

十五日

三二五 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 六月十七日

十七日

三二六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月六日

三二七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」閏月十六日

三二八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月二十二日

三二九 高松保實書翰「高松實村宛」(慶応四年) 正月二十六日

二十六日

三三〇 高松保實書翰「岡谷繁實外二人宛」(明治二年)

十月四日

三三一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十一月十八日

十七日

三三二 高松保實書翰「高松實村外五人宛」(慶応四年)

三三二 高松保實書翰「(宛先不明)」(慶応四年) 三月

正月二十八日

二十九日

三三三 高松保實書翰「岡谷繁實・菅谷淡路守宛」(明治二年) 四月十四日

三三三 高松保實書翰「(宛先不明)」(慶応四年) 三月

治二年) 四月十四日

二日

三三四 高松家執事書翰「秋元中屋敷詰合中宛」(明治二年) 四月十四日

三三四 高松家納戸書翰「高松實村參謀宛」(慶応四年)

二年) 四月十四日

三月二日

三三五 高松家東江州館入覚(慶応四年) 七月二日

三三五 戸田忠至申置覚「(宛先不明)」(文久元年)

三三六 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 七月二日

三三六 戸田忠至伺書案「(宛先不明)」

二日

三三七 戸田忠至書翰案「秋元興朝宛」

三三七 (差出し人不明書翰)「高松保實宛」(慶応四年)

三三八 戸田忠至遺言下書(明治六年)

四月十四日

三三九 戸田忠至願書案「(宛先不明)」(慶応元年)

三三八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 八月二十二日

三四〇 嵯峨御所についての意見書下書「(宛先不明)」

二十二日

三四一 戸田忠至上案「(宛先不明)」

三三九 供・警衛人数覚書

三四二 戸田忠至上案「(宛先不明)」

三三〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 閏四月二十二日

三四三 戸田忠至上案「(宛先不明)」

月二十二日

三四三 戸田忠至上案「(宛先不明)」

三三一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 三月

三四三 戸田忠至上案「(宛先不明)」

三四四 戸田忠至書翰案「勅負宛」(慶応元年) 六月十

二日

月一日

三四五 戸田忠至書翰案「勅負宛」

三五五 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十五日

三四六 戸田忠至口上案「勅負宛」五月二十日

三五六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月二十一日

三四七 山陵維持の意見案「(宛先不明)」

三五七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(元治元年) 十二

三四八 山陵探索の伺書案「(宛先不明)」

月六日

三四九 肥後守へ御演舌書写「(宛先不明)」(慶応元年)

三五八 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月四日

三五〇 覚(山陵修補の覚書)「(宛先不明)」九月二十

三五九 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

一日

三六〇 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏五

三五一 松平慶永書翰「(宛先不明)」(慶応四年) 三月

月十九日

晦日

月五日

三五一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 三月

三六一 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(元治元年) 十二

十五日

月五日

三三三 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 三月

三六二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十六日

二十九日

三六三 大原重徳書翰「戸田忠至宛」三月五日

三六四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

岡谷文書 十八 (三三)

三六五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十一月二十七日

三五四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏五

三六六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」二月二十五日

三六七 池田慶徳書翰「戸田忠至宛」三月七日

三六八 大原重徳口上「戸田忠至宛」

三六九 左金吾書翰「戸田忠至宛」三月二十九日

岡谷文書 十九 (三卷)

三七〇 大原重德書翰「戸田忠至宛」七月二十一日

三八二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)六月

三七一 大原重德書翰「戸田忠至宛」

二十七日

三七二 大原重德書翰「戸田忠至宛」正月二十九日

三八三 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月二十一日

三七三 大原重德口上「戸田忠至宛」三月一日

三八四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)四月

三七四 池田茂政書翰「戸田忠至宛」三月二十九日

二十八日

三七五 大原重德書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)二月

三八五 一橋慶喜内願書写「戸田忠至宛嵯峨實愛の封つ

三日

き」(元治元年)十一月

三七六 大原重德書翰「戸田忠至宛」三月盡日

三八六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(元治元年)十一

三七七 大原重德書翰「戸田忠至宛」

月晦日

三七八 大原重德書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)十月

三八七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月二十四日

晦日

三八八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)七月

三七九 軍裝行進の覚書(慶応四年)

十五日

三八〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応三年)十一

三八九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月九日

月二十八日

三九〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」二月三日

三八一 坊城俊政書翰「戸田忠至宛」二月二十四日

三九一 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月十一日

岡谷文書卷十九ゝ卷二十一目次 (六卷)

三九二 大原重德書翰「戸田忠至宛」三月十二日

三九三 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」五月十九日

三九四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」九月十三日

三九五 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」三月八日

三九六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」三月二十四日

三九七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」閏月九日

三九八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月六日

三九九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(明治四年)七月十四日

四〇〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月一日

四〇一 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月九日

四〇二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月十一日

岡谷文書 二十 (100)

四〇三 秋月種樹書翰「岡谷繁實宛」五月四日

四〇四 秋月種樹書翰「岡谷繁實宛」七月十四日

四〇五 議定總裁内命書「信甲有志宛」慶応四年二月

四〇六 高松保實書翰「(宛先不明)」(慶応四年)二月八日

四〇七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(文久三年)

四〇八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月十六日

四〇九 久我通久書翰「弁事宛」(明治二年)二月二十八日

四一〇 池田章政書翰「戸田忠至宛」五月九日

四一一 高階丹後守書翰「戸田忠至宛」四月二十一日

四一二 亀井茲監書翰「戸田忠至宛」五月十二日

四一三 東久世通禧書翰「岡谷繁實宛」(明治三十五年)二月十四日

四一四 島田龍章書翰「戸田忠至宛」十二月二十七日

四一五 渋沢栄一書翰「戸田忠至宛」(明治三年)三月九日

四一六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月十六日

四一七 開墾入費借用願案

四一八 成務陵盜品についての掛合書「(宛先不明)」

四一九 移転願書についての書翰案(慶応元年)

四二〇 兵隊差出し猶予願案(慶応四年)

四二一 守戸人員の覚書

四二二 諸陵頭代拝についての覚書(神祇官の附紙つき)

- 四二三 大樹公参内についての御沙汰書案（慶応元年）
 四二四 山陵地所についての案文
 四二五 戸田忠恕（越前守）寛典についての案文（慶応元年）

岡谷文書 二十一……………（三）

- 四二六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月二十日
 四二七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」（元治元年）十二月六日

- 四二八 （差出し人不明書翰）「宛先不明」（慶応四年）九月十九日

- 四二九 東久世通禧書翰「岡谷繁實宛」一月二十五日
 四三〇 香川敬三書翰「弁事宛」四月二日

- 四三一 （差出し人不明書翰）「宛先不明」
 四三二 釋玄猷書翰「岡谷繁實宛」明治二十五年五月十日

- 四三三 杉孫七郎書翰「岡谷繁實宛」明治二十五年五月三十日

- 四三四 福羽美静書翰「岡谷繁實宛」九月十日
 四三五 福羽美静書翰「岡谷繁實宛」五月二十六日
 四三六 瀧川元以（讃岐守）書翰「戸田忠至宛」二十三日

- 四三七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」（慶応四年）二月十七日

- 四三八 高松保實書翰「宛先不明」（慶応四年）
 四三九 竹屋光有覚書「高松保實外宛」（慶応四年）二月十四日

- 四四〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月二十四日
 四四一 大原重朝書翰「岡谷繁實宛」八月三十一日

- 四四二 小笠原長育書翰「岡谷繁實宛」三月十五日
 四四三 戸田忠恕書翰「戸田忠至宛」（慶応元年）閏五月十日

- 四四四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月八日

- 四四五 戸田忠行書翰「岡谷繁實宛」明治十五年八月二十八日
 四四六 鈴木良三書翰「宛先不明」

- 四四七 前田書翰「岡谷繁實宛」十一月十八日
- 四四八 賞典高書上
- 四四九 秋元興朝書翰「岡谷繁實宛」十月四日
- 四五〇 瀧川元以（讃岐守）書翰「（宛先不明）」
- 四五一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」四月十日
- 四五二 （差出し人不明書翰）「（宛先不明）」五月九日
- 四五三 池田書翰「戸田忠至宛」五月十二日
- 岡谷文書卷二十二～卷二十四目次……………（三七）
- 岡谷文書 二十二……………（三八）
- 四五四 戸田忠至本姓取立願（安政五年）十二月
- 四五五 棚倉への移転猶予願案（慶応元年）
- 四五六 家政改革箇条書案
- 四五七 秋元禮朝（但馬守）書翰「戸田忠至宛」（慶応四年）
- 四五八 戸田忠至書翰「宮内卿宛」十二月二十一日
- 四五九 松平慶永書翰「（宛先不明）」（慶応四年）三月十五日
- 四六〇 廢藩置県詔書写 明治四年七月十四日
- 四六一 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月二十四日
- 四六二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」
- 四六三 大原重徳書翰「（宛先不明）」三月四日
- 四六四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」六月七日
- 四六五 日野資宗書翰「戸田忠至宛」十月十八日
- 四六六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十二日
- 四六七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十二月四日
- 四六八 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十月十四日
- 四六九 柳原前光書翰「戸田忠綱宛」九月三日
- 四七〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月二十八日
- 岡谷文書 二十三……………（三九）
- 四七一 三条實美書翰「戸田忠至宛」九月十一日
- 四七二 免職に際しての勅語及び御沙汰書「戸田忠至宛」
- 四七三 前田利邨書翰「岡谷繁實宛」九月二十二日
- 四七四 秋元興朝書翰「岡谷繁實宛」十一月十日
- 四七五 福羽美靜書翰「岡谷繁實宛」五月十五日

四七六 福羽美靜口上「岡谷繁實苑」九日

岡谷文書 二十四……………(五)

四七七 福羽美靜書翰「岡谷繁實苑」三月十三日

四九〇 大原重德書翰「戸田忠至苑」八月二十五日

四七八 杉孫七郎書翰「岡谷繁實苑」十月二十三日

四九一 松平慶永書翰「戸田忠至苑」七月十一日

四七九 杉孫七郎書翰「岡谷繁實苑」明治二十五年六月

四九二 松平慶永書翰「戸田忠至苑」

六日

四九三 松平慶永書翰「議定苑」(明治二年)三月二十

四八〇 戸田忠至建言書(明治二年)正月

九日

四八一 戸田忠友書翰「戸田忠至苑」(慶応二年)六月

四九四 高松保實書翰「岡谷繁實苑」十二月三十一日

十二日

四九五 戸田忠友書翰「戸田忠至苑」十月九日

四八二 池田慶德書翰「戸田忠至苑」三月五日

四九六 実歴抜粹

四八三 坊城俊政書翰「(宛先不明)」

四九七 土方久元書翰「岡谷繁實外苑」六月二十四日

四八四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至苑」五月十五日

四九八 土方久元書翰「岡谷繁實苑」七月六日

四八五 戸田忠友書翰「戸田忠至苑」(慶応二年)九月

二十八日

四八六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至苑」六月十二日

四八七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至苑」四月十九日

四八八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至苑」(慶応四年)九月

二十四日

四八九 戸田忠友書翰「戸田忠至苑」正月二十五日

【史料】

(表紙)
〔岡谷文書 五〕

岡谷文書 卷十三 目次

高松保實 _{ヨリ}	岡谷繁實 ^へ	三月廿一日
全	全	三月廿六日
高松實村 _{ヨリ}	全	
長谷信篤 _{ヨリ}	武者小路少將 ^へ	二月十四日
高松保實 _{ヨリ}	岡谷繁實 ^へ	四月十四日
高松保實 _{ヨリ}	斯波彈正 ^へ	三月九日
全	岡谷繁實 ^へ	十二月四日
高松實村 _{ヨリ}	全	五月十一日
高松保實 _{ヨリ}	全	四月廿七日
高松保實 _{ヨリ}	岡谷繁實 ^へ	四月廿七日
全	全	五月二日
全	斯波彈正 ^へ	七月十日

高松家
(高木大藏)
(高坂源太_{ヨリ})
全
二月十五日東山道総督_{ヨリ}老職^へ(封入)
九月十五日

高松保實 _{ヨリ}	全	九月十五日
全	武者小路少將 ^へ	二月十四日
全	斯波彈正 ^へ	四月十六日
岡谷文書 卷十四 目次		

戸田忠至 _{ヨリ}	中川修理太夫 ^へ	九月六日
松本凝 _{ヨリ}		九月廿八日
中川修理太夫 _{ヨリ}	戸田和三郎 ^へ	三月十一日
間瀬和三郎 _{ヨリ}		正月十七日
川村正平 _{ヨリ}	岡谷繁實 ^へ	霜月四日
平松時厚 _{ヨリ}	全	一月十一日
		七月十二日
		八月廿五日

参与ヨリ

戸田忠至

十二月廿六日

岡谷文書 卷十五 目次

大原重徳ヨリ

正翁へ

七月十三日

嵯峨實愛ヨリ

間瀬和三郎^{外五人へ}

二月十七日

全

全

全

全

全

戸田忠至へ

壬午廿二日
十一月十七日

戸田忠至ヨリ

齊田明善へ

五月廿三日

戸田忠至ヨリ

齊田明善へ

九月廿九日

全

全

十月一日

(以上の目次は半紙本に収載)

(題簽)

岡谷文書 十三

二五九 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治七年) 三

月二十一日

(封)

無別条至急用入

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(一)(原島・松尾)

(ウ)

東京

内務省七等出仕

岡谷繁実殿

西京

高松保実

明治七年三月廿一日出

軍記廿一冊副

其後御疎遠無申訳候先以余寒冴還候折柄御勇健御奉職奉
珍重候随テ当方儀モ無異ニ罷在候乍憚貴慮易願上候誠先
般^者軍記ヲ歴史課ヨリ被召候ニ付以急翰其段御心得迄ニ
相達シ候所程能御承諾^{(朱書)「遠路御返翰存候」}安堵候何分ニモ宜奉願度候其比^者
水沢県ノ七等出仕御奉職ノ趣キ誠ニ御同慶奉祝着候然ル
所猶又此比承候所内務省七等出仕ニ御転職ニ相成候由重
疊恐慶至極ニ御座候段々御昇職ノ事実ニ御同慶不少候右
御歎モ申述度候且又此別帳廿一冊第号6廿号迄御座候則
軍記ノ写しニ御座候本紙御入用ノ節ハ何時成共可差上候
何卒御勘考ノ御種ニ被成下候様仕度候御留置ニテ不苦候
当方ニハ本紙ハ御座候ケ様ニ軍記ト仕立上ケ候分ハ此方
而已ニシテ残り居不申候^{(朱書)「木戸公迄御内覧願度候事」}
一誠以願兼候訳ニ候得共出格之先年御出陣ノ御由縁ノ廉
ヲ以願上候^{実村}儀何卒不敏ニハ御座候へ共一際御引立

被下今 (朱書)二百里ヲ隔テ等出仕位故西京ノ侍從金ヲ不絶差下候もはや 少々職昇二も相成候様ハ相叶間敷候哉兼テ木
 一昨年々三百金カラ借財ヲ増シ立行兼居中候御察し被下度候事家族七人暮し二御
 戸參議公ニハ御信友ニ被為在候歟二拝承罷在候右ノ公
 座候也

江御歎込被下置一際御引立ヲ奉願度候何分若松表ハ寒

国ニシテ家族幼童等モ取育シ候儀も難叶程ノ所ニ御座
 候儀ノ所九歳八歳五歳二歳迄ノ孫共ヲモ為引越居別

近年ノ嚴寒ニハ保命モ無覺束位二而昼夜ニ西京ヨリ相

案シ堪兼居候事ニ御座候御憐察ニ預リ申度候若々東京

表ニ而相応ノ御役ニ被仰付候ハ、誠ニ難有仕合ニ御座

候木戸公江御歎キ奉願度候其外府県ノ内何卒々々御繰

替御仕替ニ奉願度候尤右若松県ニ実村儀も一昨年々

在職罷在三年ノ年数ニ相成居候自然此比二 (欠損) 東京江

実村出張可仕哉モ難量全クハ 貴官ヲ見当ニ出張仕

候事ニ御座候深ク御取立被下度候御恩ハ永世迄忘

却不仕候ニ付御助ケヲ奉願度候実は昨冬ハ十二月

四日西京ヲ發途保実儀も東京江出張罷在当年二月十六

日ニ西京江一先ツ引取居候得共何分君臣ノ隔絶ハ可恐

縮詁ニ付西京ヲ方附次第東京ヘ引越候永住ノ手積リニ

專ヲ取掛リ居候此儀も御察し願上候保実儀も先年ノ軍

記ノ中ニハ名前顯シ加列罷在候事故何卒々々昨晚歲勤

王ノ志願積年故奉職ノ道ヲ御取開キ被下度候此段モ

歎願候父子共ニ勤 王ノ志願御察し奉願度候至急ニ先

ハ実村若松表々東京ヘ転職ノ御工風奉願度候引続キ保

実儀も自東京 御用召ニ相成候様ニ奉願度候御恩ハ忘

不申御引立奉願候 (朱書)保実儀ハ京都府大坂府又ハ滋賀県奈良県ノ辺ニテ宜

願上申度候事

一外ニ西京醍醐山ニ僧ニ遣し置候実村ノ兄耆人有之候所

御時勢ヲ感シ一昨年々復籍罷在実演卜申候卅七歳ニ相

成候此者儀も御引立被下何卒雜掌ニ而も何二而も不苦

候拜命ヲ奉願度候此者ハ四月上旬ニハ東京江出張可仕

候宜奉願度候

一孫新正五位公村十七歳ニ御座候此孫ハ昨冬十一月廿八

日々東京西四辻家江同居為致塾学ヲ專ラニ罷在候是又

宜奉願度候

(朱書)一昨冬已來越年ニ東京ニ滞在余程ノ人費而已ニシテ不成就擬々残念ノ事ニ

一貴公ヨリ外ニ保実実村等ヲ御引立被成下候良傑ハ無御

座候深ク木戸公江御申込被下度候右歎願旁軍記ノ写し

差上置度如此御座候已上

(朱書)
「保実儀ハ京都府ノ植村参事ヘニ而も木戸公ノ御
聲掛ケ被成下候ヘハ忽ニ成就可仕候事」

西京

三月廿一日出

高松保実

東京
内務省七等出仕

高松

岡谷繁実公閣下

御親披

二六〇 高松保実書翰「岡谷繁実宛」(明治七年)三

月二十六日

春寒難去時候閣下益御勇健御奉職被為在候御儀恐悦千万
之至不斜候隨テ小生義も依御蔭先々不異ニ消光罷在候奈
乍恐縮御降意被成下度陳者去ル十一日発翰ヲ以御面働且
失敬之至伏願之一条御多忙中何角御配意之御儀ト万々奉
恐縮候其自来日々御返答西ヲ奉待居候何卒善惡とも一
寸御聞シ被成下度迎も当今御六ヶ敷御儀ニ御座候ヘハ無
詮方義一旦免職ノ上何卒御助断之義伏テ奉願上度候可相
成義ナレハ何国ニても御運被下候迄辛抱仕度候へとも是
も其期会御都合も被為在不得止候次第当今実ニ御六ヶ敷

岡谷文書一幕末・明治書翰類一(二)(原島・松尾)

御儀ニ御座候ヘハ最早放念仕断然免職ノ決志ニ御座候実
ハ寒国ハ兎も角も無撓次第も有之旁今度ハ是非とも一先
辞職之意底ニ御座候否御答信ヲ限り速ニ辞表差出度志願
ニ御座候間今般之書状相達候ハ、何角御繁多ニハ御座候
ヘ共何卒無御捨置御一筆御返投被成下度真実ハ来月十一
日十二日比ニ是非とも退キ度キ願念ニ御座候委細之情々
ハ猶上京拜面ヲ得候ハ、万々可申上度幾重ニも前段御推
察被成下出格之御助断之程偏ニ奉再願度先者早々右之条
相願度如是ニ御座候謹言

三月廿六日

再言具々本文之通ニ御座候間善惡遲速何れとも此書状
相達候ハ、何卒至急御返書御投下之程伏テ奉願候返々
随意失敬千万多罪之段御寛免伏テ奉願上候ケ様之義不
開化之願望迎も〳〵他人ヘハ難申述尊体之義打明テ奉
言上候必々無御立腹御聞取被下度此義過日一寸三条家
丹羽ヘハ申置候御心得置被下度何も失礼之段真平御用
捨西奉願上候

高松百拝

繁実公

閣下

追而御返信之砌御家御住所何れニ御座候哉一寸承知仕度此段奉願
上候

二六一 浪士と脱走につき御沙汰書写「高松實村宛」

(慶応四年) 三月

左兵衛権佐

方今之御時勢を不并猥ニ脱走致候段不埒之至ニ候得共於
其志^著神妙ニ被思召候依之不被及御沙汰ニ候事

辰三月

左兵衛権佐

今般帰京之際浪士数多附属候趣相聞^江候万一粗暴之振舞
於有之^著実ニ不相濟儀ニ付浪士之面々速ニ帰国可申付此
旨相達候事

辰三月

二六二 長谷信篤書翰「武者小路公香宛」(慶応四年)

二月十四日

春寒難去候弥御安全珍重存候然^著過日来高松殿一条ニ付
毎々御苦勞存候且又昨日^著御書且高松殿之書中等拝見委
細拝承候昨日も御便り無之旨段々延日ニ相成候^而者如何
ニ存候将高松殿御便り待居候^而も延日^而ニ候間昨日東山
道鎮撫使^江幸便モ有之候間御帰京之事御本人^江申入護送
シテ高松殿御帰着有之候様鎮撫使^江申遣候不日御帰着ニ
可相成と存候此段乍御面勵高松殿^江御申入置願入候尚委
細^著拝面万々可申入候得共先略右申入度仍早々如此候也

二月十四日

追^而段々御延日ニ付無是非右ノ御沙汰ニ相成候委細ハ
拝面可申述候也

刑法事務総督

長谷三位書中ノ写シ

武者小路少將殿

信篤

二六三 被仰出書写(秋元禮朝(但馬守)・酒井忠強

〈下野守〉謹慎差免状)(慶応四年) 四月十

四日

秋元但馬守

酒井下野守

右自今被 免謹慎候旨被 仰出候事

四月十四日

二六四 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 三

月九日

以急狀得御意候追々春暖相催候得共兎角不順ニ御座候先
以其表弥御安泰珍重存候然^著先般御懇書被下候所別段御
答も不行届御用捨可被下候加藤金三郎事大進と改名同人
へ相頼遣し候へ共如何候哉案し候將亦此度再応其東京江
御發聲何共恐入候次第二相成行申候然ル所実村儀今九
日午半刻 禁中江被召出俄ニ東京へ御用之御議評被為在
候ニ付罷下り候様被仰付候ニ付火急ニ京地發馬及下向申

岡谷文書一幕末・明治書翰類一(二)(原島・松尾)

候ニ付此段早々及御吹聴置申候間其表へ着ノ上ハ何卒
〳御取扱被下度万事ニ宜御頼申入度候昨年信甲両国鎮
撫三千余騎之兵集毛水之淡^(泡)ニ相成居候実以心外ニ不堪候
間着之上ハ一際御取持被下正親町三条殿へニ^而も其外ニ
^而も急度御周旋被下於其御表何ソ役付候欤又ハ甲府^{並印}県欤
信州伊那^{北小印}県欤右両県ノ内ヲ実村へ御仕替ニ申願ものニ候
尤判事權判事サへ正義成器ニ御座候へハ決^而全ク勤仕も
可相叶候此段御周旋深被下度候信甲両国之内へ難相叶候
ハ、於東京何ソ役付欤亦他ノ県ニ^而も御周旋願入申度候
為其態々出狀御頼申遣候尤いつれ当三月廿二日ニハ 八
幡臨時祭ニ実村舞人ニ參役被仰出有之候ニ付此役ヲ為濟
候上ノ発足ニ可相成候間凡当三月廿四五日ノ内発足ニ可
相成候左様御承知置可被下候東海道欤東山道欤ノ内と存
居候へ共万一蒸氣船欤も難計御座候後便儘成所ハ可申遣
候間具々も宜頼上候尤供方ハ皆々昨年ノ信甲鎮撫之節ノ
有志斗ヲ召連サセ申候也

巳三月九日

保實

申刻發

東京ニテ

斯波彈正殿

急要談

尚々過日戸田忠綱候ニも一寸咄し合ノ事も御座候此候
ハ六月頃已来佐州ノ事ニ付少々御心入ニ付咄しも御座
候委細ハ面上と存候くれ／＼も実村実演和平ニ而大悦
安心々々

二六五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月四日

口章

岡谷繁実公閣下

保實

再謝章

為貴謝不取敢令啓上候然ハ兼テ御配勞被成下候実村実演
不和熱之一条既ニ一昨日解合ノ道ヲ得則昨日已来実演事
懇々面話平和ノ事ニ相運ヒ申候仍自然ラ佐州一条ノ為方
ニも品能ク相熟シ可申候全ク貴官御取合せ被成下候故ノ
事厚奉謝候乍此未右佐州ノ一条□ニ相整候事ニ願申度候
保実御礼旁今日參上ノ筈ノ所少々外出難叶先実演差上申
候万々父ノ身安堵無限何卒佐州ノ一條御助ケ願度候

一外ニ深川表ニ貸藏廿八戸前ノ分借受有之近国東国筋物

産積込半貸ノ咄し(添書)代呂物ノ酒井。憾成事ニ御座候利益も尤不惡委細ハ

実演方申上候ハ、御聞取願度候也

十二月四日早朝

二六六 高松實村書翰「岡谷繁實宛」五月十一日

〔封〕 岡谷鈕吾殿

實村

追々暑氣相催候御安全珍重存候抑過日者久々參拝深畏
入候種々拝味千万忝存候且又此書狀西京より当着候間入
見參候御覽後何卒小子へ申下度候於御承知者万々畏入候
仍先早々如是候也

五月十一日

岡谷鈕吾殿

實村

御答承度

二六七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 四

月二十七日

再発 必急歎願

今般民部官ヲ被置候右之内ニ開墾も相籠リ居候何卒開田御用掛リト相成候も御六ヶ敷候ハ、民部官中ニ御召加ヘ願上開墾ノ職中へ御差加ヘ願上申度此段願上度候御周旋願存候也

四月廿七日

保實

岡谷鈕吾殿

二六八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 四

月二十七日

御礼迄以愚翰啓上候追々薄暑相促候弥御安泰御勤役珍重候誠ニ実村儀も全依高庇去十三日 其御表_江無異ニ着仕

岡谷文書一幕末・明治書翰類一(二) (原島・松尾)

候旨昨日着狀披見承之実々無限安堵仕候殊ニ兼而願置候御主藩御持馬拝借之事願置候通り御取扱美々敷相用候旨全御憐配故ノ事ニ而如何程欽深忝存候何卒々々 御主藩其筋々_江も宜々御挨拶願度候跡_方追而詠歌ニ而モ進覽申入度と存候未タ其辺ニ_者手も行届かね居候御察し可被下候且又裏武番町初鹿野之旧館_江旅館ヲ被乞賜候旨誠以手広ノ由ニ承畏入候御非番ニハ毎々御見舞被下候由尤品川着之節も菅谷氏諸共御尋被下候段誠以 御用繁御中実々御旧懇不被失程ハ甚歎喜ニ候乍此末万々宜御引立被下度候附_{而者}於其 御表何と欽々々々一際實村蒙仰候事ニ御取扱正三殿へ願上申度候保實父之辺ヲ以厚歎罷在候旨御願被下度候昨年之鎮撫ノ軍功も何卒相顕候ハ、深々畏入候此度ハ是非何役成共御引立願上候間用氏も御深切被下候由菅谷氏ハ勿論其外加藤氏_并木村も定しと察入候夫々有志達_江も深宜頼上候齊藤兎_并也も被居合候ハ、深宜御伝被下度候竹内三郎と申有志此度ハ召連サセ置候事ニ御座候是又宜願存候右三郎儀も深キ望有之身ニ付御引立被下可相成ハ何卒實村ニ引続キ竹内儀も宜願上候大嶋伴助儀ハ

罷越し被呉候哉如何宜願上候

一和歌所御再興ノ事建白ハ先達上置候

一開田御用掛リ之事保實蒙仰度候此儀ハ既ニ摂河在ヲ始

江州湖水開田ノ建白ハ昨年々御採用ニ相成御聞濟ニ付

則用達共町人百姓等ヲ表立願人ニ仕立會計官^江願立昨

年辰八月廿三日御聞濟ニ相成居候此口斗ニ而も三十万

石ハ可有之候外ニも彼是有之五百万石程ハ惣日本國中

不毛ノ地ヲ以開キ之 天朝御為ニ尽力仕候心組ニ付

既ニ江湖開田ハ昨年願濟ニ有之位是非開田御用掛リニ

被仰付候様東京ニテ御周旋願上候中御門家少々治河ノ

掛リニ付皇都ニ而も彼是被申妨候辺有之尤岩倉大納言

其殿へハ願込相濟居至極岩殿ハ聞込ニ候へ共中御門印

不承伏ニ而因入居候弁事ハ滋野井へ開田御用掛リ事願

立候事ニ候何分東京ニテ

一和歌所御再興ノ事

一開田御用掛リノ事

右御取持願上候事

四月廿七日

保實

東京行政官弁事御当役

岡谷鈕吾殿

尚々攘夷ニ相成候由ニ承居申候此辺も実村へ可然御心添願上候也

二六九 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年)五

月二日

不順時候弥御安泰恭賀候誠実村儀其 御表^江罷出候ニ付

段々御厚配深忝殊ニ御馬之所蒙御取計何共深忝多謝此事

二候跡方染筆物差下し及御恩謝候覚悟ニ候一寸去廿八日

出御用便リヲ以不取敢御札申入置候事ニ候

一將亦此度民部官ヲ被設候由誠ニ難有事ニ候右ニ付足下

御周旋ヲ以保実儀乍不敏何卒右民部官中^江被召加候様

伏^而願上度候尤右官中ニ者

水利 開墾

右両様共相籠り居候由ニ付左候へハ新開之儀八年来之宿

志ニも有之就中追々諸国開墾ニ取掛り候事此官中へ是非

ニ被召加候事ニ御願被下度候

但し京都ニ而者中御門殿治河ノ御掛リニ付兎角開田之

掛リ發起人トスレツ、ニ御座候間是非共 東京ニテ被

仰渡候事ニ願上度候中御門殿ニハ何も御談合ニ而は成

就致し不申必々 東京ニテ御決判願入候中山殿へも御

願被下度候正親町三条殿へも宜願上候岩倉殿江も宜願

上候

一開田御用掛リヲ被仰付候ハ民部官中ニ被召加候方御

取扱被成能候半と存候何分ニ厚願入候也

一実村昨午之信甲兩國一番乗込鎮撫ノ後兩道之鎮撫使へ

引渡し候段ハ全ク貴公ノ御働キ斗ニ而御座候右何卒寸

功相立候欵又更ニ何ソ東京ニ而一役蒙仰候欵ニ御取持

被下度候訳而願上候也

高松三位

保實

五月二日

東京弁事

岡谷鈕吾殿

尚々木村門倉菅谷加藤其外大嶋伴助等へも訳テ宜願入

申度候也

二七〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」七月十日

「封」 斯波彈正殿

保實

内容

尚々残暑随分被厭候様祈入候先此姿ニ而者岩印矢張

解合無之方ニ察し困入居候也昨日丁寧医ノ謝義痛

入申候此龐末ノ寸志中元祝儀印斗ニ及進入申候笑

祝被具候ハ、大慶本懷ニ存候嚙々物入察入申候也

懇書委曲承候先以秋炎難退候弥壯健珍重存候誠乍例大疎

遠不本意存候然者昨日者光来委細承候猶又今日御舍弟光

来且懇書之中何も相分候昨日取紛居不克面会ノ辺残念ニ

存候右之趣ニ而者勢州山田祢宜方何某亭ニ暫ク逗留と察

候夫も至極之弁理と存候段々右ニ付跡々之手配り迄心配

被具候段誠懇切忝事ニ存候太政官筋々若干一往復事有之

候ハ、其時ハ無是非御頼申遣候半と存候必無御見捨御上

京ヲ前以御約諾頼入置候実々万端内外ニ察入候事御座候

一引戸駕籠用達候無心置可被用候也

一此龐詠自然彼地土産方も可有之哉と察候御舍弟へ相渡

し候也

一昨日被返候書付類正入掌候事

一自余互ニ吉兆ヲ得次第可及再便夫迄ハ大凡疎遠ニ可相

成と有□二候

七月十日

保實

斯波彈正殿

内容

二七一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治八年)五

月五日

(封)

東京

内務省七等出仕

西京

国風社長

(オ)

(朱書)

岡谷繁實殿
御親披無別条

高松保實

(ウ)

(至急)
(朱書)

「此状ハ御役宅入ニ頼入候」

本年本月五日

逐日漸暖氣相加候所兎角不揃時候ニ御座候倍御安泰恐賀
誠ニ乍例御疎遠ニ打過居恐縮候陳者兼テ御引立相蒙居候

愚息実村儀も段々不容易御引抱被成下是迄ニモ奉職ノ場

ニ立至実以高恩紙上ニ^者難尽謝是非 東上ノ催モ仕居候

左候得^者拜謁ニ万謝と相樂ミ罷在候將実演儀迎も実村同様

御引立被為下御雇ニ被仰付候旨毎々申越し是以難有仕合

兩人ノ俸身上ノ程何分ニモ 貴官ヲ御力ニ昼夜々々神折

仕居候如何ニモ乍此上御見放シ不被為下御助勢被成下度

候可相成^者 貴公御蔭ヲ以今少し昇職転任ノ道ヲモ被為

開被為下候ハ、無限御高恩ノ上猶増々重恩難有事ニ御座

候不束成倅共実ニ恐縮ニ候得共如御案内実村ノ方ハ先年

御同伴出陣決死ノ一廉ヲ御憐ミ被下置唯々御察シノ程奉

神願候又実演ノ方ハ無祿ノ身分故一入保続向ニ差支ヘ罷

在候御憐察被下置父ノ昼夜ノ心痛ノ程不便トモ被思召被

下度此辺歎願迄何レ 東上仕候而可願立ながら先心急キ

故以書取歎願仕事ニ御座候何卒々々々御察諸願上候恩沢

ハ忘却不仕候謹言々々

亥五月五日発

高松保實

奉
岡谷繁實公

(高松)

閣下

尚々方今西京^并浪花表等ニ於テ国風社長ノ任ニ官許難
有事ニ御座候何卒其 東京ニ於テモ国風社ノ分課取設
度候尤何時^二而^一も京都府^方御達ノ御添翰ハ御渡しニ相
成候故 東京府ノ大久保一翁殿^江御手入被下度候分課
ノ聞届ニ相成様ニ願度候且課長ノ任ハ則伊達千廣^江申
付度候事御用多御中恐入候得共三都共国風社取設度事
宿願ニ御座候御尽力被成下候ハ、難有事ニ御座候也

副書

本章ニ内歎仕候通り^并共身分ノ一条是非々々 尊公御蔭
ヲ以御取立奉神願候此比^者何歎専ラ御改職ノ御変化ノ御
時刻歎ニ風聞モ有之候尤来六月^二者^一諸県ノ参事達モ其東
京^江参集被仰付候旨ニ相聞候則京都府^方ハ榎村参事参向
仕旨ニ御座候深ク御尽力願上此御交職ノ御時刻^(マ)ヲ無御過
シ様奉願度候方々御恩沢ハ永久忘不申候故昼夜父ノ心痛
御察し被遣度候尤^并兩伴とも會計向ニモ大ニ差支是非とも
ニ此度御引立願度次第ニ御座候已上

亥五月五日発

上

下

二七二 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年)三

月二日

一(封)

斯波彈正殿

高松三位

内啓

三月廿九日

(付紙)

(本文ト日付相違アリ別時ノ封皮ニアラザルカ)

今朝清記明六ツ時着致し申候 早駕籠中

尚々藤井清記も勞レ居候へ共精々為出迎再差立可申候
清水兵庫儀も差立可申候其外ハ於当館内待受ノ雜用ヲ
弁居候事凡今未半刻過^方申刻過迄ノ辺ニテ京着ニ相成
候様宜取計頼入候也若京着酉刻前ニ相成候とも不苦候
間軍莊^(後)十分ニ相飾リ立可被申候

昨朔日申下刻被差立候飛翰今辰半刻京着逐披見候先以無
異被逐旅行主從共厚苦勞察入候弥今二日京着之旨祝着候
右ニ付行莊振^(後)之事被尋越旨も承候 朝廷御模様尤軍装之
方御時宜ニ応シ候方ニ付精出軍装可有之候

一網代輿先箱長柄杓已下夫々人夫迄今朝申付候得共亦々

相留メ申候事ニ候也

小沢便リニ違

一虎皮尻鞘

清記便リニ違ス

一軍扇

只今林蔵便リニ違ス

一熊皮毛沓

只今林蔵便リニ違ス

一直垂 三領

一烏帽子三頭

長短交ル

右

一納戸一反風呂敷二包之

一佐竹右京太夫ヨリ為馳走実村乗料馬一疋參謀ノ料同一

疋

右二疋大津迄為牽申候

一白羽二重小袖同衿しばんと金ノ采幣二本軍扇一本

右ハ大津問屋ハ本陣迄預ケ有之ニ付可受取者也

一帰京道筋何レニ而も無差支也

但し三条二条ノ内ヲ寺町へ出テ寺町ヲ梨木町夫ハ

切通シハ二階町或ハ如何様成共無差支也

三月二日辰半刻發之

保實

參謀職

斯波彈正殿

二七三 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 四

月十八日

一(封)朱書 (四九) 月十九日出

(ウ)店□入り

質濟

大坂嶋町巷丁目

和泉屋多助方

高松御殿

(オ) 斯波彈正殿

御奥向

前略扱ハ薩州小松帶刀殿方^五其許殿御行向被下御頼込被

下候事ハ少々差支候よしニ只今外ハ申聞候ニ付先御見合

可被下候子細ハ 秋元侯御家老故薩印方ニテ却テ差支申

候由也此段早々申遣候若御行向後かと存案し申候也

在坂 四月十八日

保實

斯波彈正殿

二七四 東山道総督府執事回状写（高木大藏・高坂源

太封つき）（慶応四年）二月十五日

（封）

「江戸浅草北馬道

菅谷源右衛門殿方ニテ

皇都清和院御門前
高松三位殿御家

斯波彈正様

高木大藏

急御用在中

高坂源太

九月十五日発

緘

回章

高松殿京師御脱走ニ而人数御召連東国江御下向ニ相成候

趣右者決而 勅命ヲ以御差向ニ相成候儀ニ而者 無之全ク無

頼之奸徒幼稚ノ公達ヲ欺キ奪ひ出シ奉リ候御儀と被察候

右無頼之者共当総督様之先鋒坏ト偽リ通行ノ道ニ金穀ヲ

貪リ其他如何様之狼藉可有之哉も難計ニ付諸藩何も此旨

篤と相心得右等之徒ニ欺レ不申様可仕候尤公達ニおゐて

ハ卒忽之儀無之様可仕候得共人数之儀ハ夫々取押置総督

御下向之上御所置相伺候様可仕旨御沙汰候事

但し先達而綾小路殿御手ニ属シ居候人数綾小路殿既ニ

岡谷文書―幕末・明治書翰類―（二）（原島・松尾）

御帰京ニ相成候後右ノ者共無頼之徒ヲ相語合官軍ノ名
ヲ偽リ郷導隊坏と唱へ虚喝ヲ以農商ヲ劫シ追々東下致
シ候趣ニ相聞候右等も高松殿人数同断ノ義ニ候間夫々
取押置可申旨被仰出候事

東山道

総督府

二月十五日

執事

堀 左衛門尉殿

内藤若狭守殿

諏訪因幡守殿

松平丹波守殿

松平伊賀守殿

真田信濃守殿

堀 内蔵頭殿

牧野遠江守殿

内藤志摩守殿

老職中

右之通信州路一円江岩倉殿方被触渡候由ニ候得共人氣ニ
合不申候由至極不評判ノ回章ニ御座候由ヲ彼地方申越候

事

二七五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 九

月十五日

為吹聴以急翰得御意候秋冷增長候所弥無御障玆重ニ存候
誠ニ先達^著東国筋へ御引越シニ^而何欵嚙々御配意不少儀
と厚遠察候何分無擬次第柄之御様子ニ付万端都合能キ御
取計方專一と從京都折入居候斗ニ^而頼無甲斐微力之当家
心外成事恥入申候御方附次第再応上京待人候事ニ候

一 扱乍早速^{素村}儀も長々籠居謹慎罷在候所不掛思去ル九
月八日ニ出仕之事俄ニ被 仰出候ニ付誠以深畏入候^而
即日即刻ニ逐參 内積懷之勤 王ノ歎意具ニ言上猶
廻勤無滞為相濟翌九日重陽御祝詞參 内其後日々首
尾不惡罷在候ニ付此段早々及吹聴申入度如此候拔群隊
長職之貴士取訳ケ御同慶頼入度候聊之御不審御糺問等
ハ更ニ無之唯々類発ニ自今可令出仕旨被 仰出候旨刑
法官局々大原中納言ヲ以被命候事ニ候全信甲両国鎮撫

之軍功漸々相顯レ候事ニ候何卒御歎喜頼入候此上幾久
敷附屬も被下候ハ、亦々潤色之急度場合ニも可立至事
ニ存候当春ノ俣ニテハ何共残念ニ候其余^著 東幸弥被
仰出近々 御出輩ニ付甚御混雜中何事も及省略候何レ
得寸暇候上亦々委細相認メ可差下候事ニ候唯今誠漸々
是丈ケヲ認候事ニ候

一 神代上野大掾加藤欽三郎事

大進と改名

一 清水兵庫

右等此度 供奉ニ付添罷下リ申候御逢被下御周旋頼入
候

一 三条西大納言殿も御下向ニ付宜御取合セ置可被下候
一 関東十三ヶ国ノ諸産物ヲ改会所ヲ取建候儀ヲ發起此儀
ニ付於江戸表三条右府へ願立度候へ共何分亦々山子ノ
事ニ被思取候も必然ニ付心配候事ニ候深く御相談被下
度候運上金年分一万二万ノ事ハ急度上納候事ニ候ニ付
取持頼入候事

一 其余^{南新堀卷丁目}加藤大進ニ御聞取頼入度事斗ニ候也

九月十五日当賀

保實

江戸表二而

斯波彈正殿

尚々信甲両国共実村出仕之事触渡し度事ニ候宜々頼入候事

二七六 高松保實書翰「武者小路公香宛」(慶応四

年)二月十四日

(對)

在坂ニテ

斯波彈正殿

内啓

京師

保實

「

實村

從過日帰京之儀段々延日仕候而深恐入候漸急便飛脚等茂

今日帰着仕且又先着兩人罷登「(欠損)」深恐入帰京之事御

□(欠損)申上候旨申越候於保實誠恐入存候尤不日無相違帰京仕

万事恐入候次第申上度申越候然所昨日鎮撫使江令護送帰

京之事御幸「(欠損)」被為在被仰遣候旨今日從長谷殿御命

之趣御伝恐入承存候全ク帰京之程茂難相分候ニ付右之御

沙汰ニ相成候段実ニ恐入候於保實何共深心配仕居候事ニ

候乍去追々今日ハ先着茂仕候次第必定不日帰京仕候ニ無

相違候故右護送之 御沙汰格別以御憐愍 御有免伏而相

願度歎願仕候格別以 御憐愍願之通被 仰付候者誠以深

畏入可存候此段偏御勘考願存候也

二月十四日夜

保實

武者小路少将殿

辰二月十四日

武者小路ヲ以長谷三位江差出歎願ノ案

議定刑法律事務總覽也

二七七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年)四

月十六日

前署誠ニ此程ヨリ下坂之由乍苦勞万端篤ク周旋尽力頼

入存候

一去十四日保實参番中ニ秋元但馬守侯被 免御謹慎候旨

被仰出候ニ付早々為知遣候所下坂ノ跡ニ而誠ニ延引ニ

候乍去嚙々深々本懐と同慶候也

一此短尺七枚直書付

右ハ薩州小松帶刀殿へ御達頼入度候

一外ニ二枚薩藩名前相忘レ申候福井丹波事厚世話ニ相成
候由ニ付挨拶ニ遣し申度也

一小松帶刀事此比痛所有之療治ノタメ英國館ノ内ニ英医
ニ療中ト承居候於快方ハ平野屋五兵衛方へ旅宿ノ由ニ
候事

一三条大納言殿宿所ニ土藩土方楠左衛門と申もの居候此
者至テ正義ノ勤 王ニテ尤信甲両国ノ一件ニ付大丹誠
致し居候ニ付此度之供奉下坂中ノ見舞申入此ニ枚遣し
頼入度事

一木戸準一郎へ此ニ枚御遣し万々此上尽力御頼被下度候
一其許殿へニ枚差送度候笑艸ニ頼入候事

一福井丹波事小松帶刀ニ面会迄致し段々小松氏懇切ニ引
請被呉候急渡快方次第被勘考被呉候由ニ候間此迄差含
ミ宜頼入候但し他言等決^而々々不相成候由也

一正親町三条殿宿所へも御見舞ノ口状宜御頼申度候

一三条西中納言殿宿所へも御見舞口状^并過日福井丹波ヲ

以龜末ノ品為御見舞差出候所又為御答札大坂虎屋饅頭
一箱御登セ且御直書被為下深忝存候厚御請迎御申入頼
入候事取繕れ頼入候尤惣テ旅莊ノ俣ニ^而不苦万々吉左
右待人候也

四月十六日

保實

在坂

斯波彈正殿

此便宜舍弟矢野誠之進へ頼入申候也

伊東新吾へも挨拶〔申入頼入候事〕

〔題條〕

一岡谷文書 十四

二七八 戸田忠至書翰「中川久昭宛」(文久三年) 九

月六日

一筆啓上仕候追日寒冷之節御座候へ共被為損益御機嫌克
被遊御座奉恐悅候然^者其後久々御容躰不奉伺意外之御無
音申上候段偏ニ御高免可被下候扱又世上之形勢去月十八
日方大ニ變り先ツ京地も穩之形子御座候へ共中々真之穩

と申^二者無之此節幕府之御所置次第^二而^者天下治^二も至り又弥乱^二も相成可申只々御所置肝要之時節実意^二朝廷幕府之御為^二二尽力いたし候もの有之候ハ必天下治平二期し候機会と奉存候もし又十八日二長州之幕ヲ退ケ攘夷之氣分因循候節^者以前二倍し候乱^二に至り可申実^二此節為^二皇国尽力可致時節と奉存候 君公^二者御不例之由相伺扱々残情も不少奉存候尤 君公国家^二御志厚キ次第^者私^二も毎々感服仕候間風と右之見込^者噂サ仕候へ共御家来衆殊之外心配被致候間尚取消し置申候何卒尊慮易被思召偏^二御加養相折候將又

一此節^者 神武天皇御陵御普請最中^二而^者来月中旬^二者皆出来可相成と奉存候又々右之御場所へ出張仕候間寒中頃書状相呈し可申夫迄ハ御無音申上候

一正三も出勤議奏^者固ク御辞退申上只々日々参 内被致候間尊慮易思召可被下候右^者時候御機嫌奉伺度捧寸毫

候謹言^{（後筆）}

九月六日
（廿一日記）

上
戸田大和守「様」

「下」
修理太夫様

岡谷文書一幕末・明治書翰類一（二）（原島・松尾）

二白

追々寒氣^二向ひ候間折角御保護被遊候様奉折候金子も度々罷越申候同人申聞^二も此節為^二国家尽力之機会申居候諸事拜顔不仕候^而意中尽し兼候乍末筆未御目通ハ不仕候得共 御惣容様へ宜御鶴声奉願上候御家臣市川小原も度々面会懇談仕大慶奉存候尚重便万々可申上候已上

二七九 某章藏書翰「宛先不明」^{（文久三年）}

去ル十九日臣章蔵下着早々御書差出儘^二入手捧読先以御壮健被為渡今般御都合克御上京之由珍重奉賀候是^レ社心外之御無音打過恐縮々々幸^二御高許可被下候 如仰十八日云々承知仕誠^二驚入吐口筆紙^二難尽奉恐入候儀^二御座候其後京地之形勢穩之形^二御座候へとも真ノ穩^二も無之旨此上 幕府御所置次第治乱ノ二ツ相決可申尚又如尊命公武之御為^二聊私心なく粉骨周旋之仁有之候ハ、必目出度御時節^二可相成其段朝ニタニ御同意心配仕候十八日之一条ニ付攘夷益因循仕候^而ハ以前二倍し可申実^二攘夷

いたし候心得ニ相成候ハ、出来不申儀ハ無之と奉存候尤
攘夷之業ハ甚味有之事ニ而只訳なく打払候趣意ニ無之其
辺之件々其役ニ携候衆能々勦弁被致候ハ、六ヶ敷事ハ有
之間敷今爰ニ而攘夷因循仕候而者以而之外成義ニ奉存候

久々之不快ヶ様之節引入実以心底相済不申候得共病体旅
行出来不仕近頃残念千万且奉恐入候得共呉々も不得止名

代ヲ以奉伺 天機候義ニ御座候且亦私義平日国家ニ志

厚次第御感伏被成下候云々汗顔之仕合吐口申上方も無之
奉恐入候御承知被下候不束之私其段は天覧仕方も無之候
得共只々皇国之儀ハ聊之間も心頭ニ不離井ノ中ノ蛙ニ御
座候得とも深く奉氣遣候儀ハ于今不始其処ヲ御察被下候
条々誠ニ難有家来共々重々奉願候云々厚御汲取就而ハ尚

又厚御含被下候段御礼之申上様も無御座難有此上之処も
(朱書)(后)

何分宜敷奉願候

御陵御普請来月中旬ニ者皆御出来之趣右御場所へ御出張
之由御苦勞奉存候寒中頃御文通可被下旨御至念之御儀承
知仕候

御出勤目出度奉存候議奏者固く御辞退只日々御参 之趣

御尤至極御安心申上候追而者とも角も当今之形勢ハ何分
安心難相成今暫く光景御覧之上迄ハ只御参 其時々之儀
御談被為在候方万端御都合と竊ニ奉安心候不外蒙御懇候
御方之儀ニ付而者深奉存上候儀ニ御座候御序ニ宜敷被仰
立可被下候已上

(付紙 朱書)
(前文切斷セシナラン文意通セス)

難有公ニも御厭專一奉祈候金子も御懇ヲ蒙リ嚙々難有奉
存候儀と奉存候国家之機會申上候由是々も拝顔ニ無御座
候而は尽し兼筆ヲ留候

俾初へ御加筆難有御礼申上度申出候隼太章威度々罷出蒙御懇其
身ハ申ニ不及於私も難有仕合御礼申上候此上共度々御苦勞奉願
候儀も可有御座何分宜敷奉願候已上

二八〇 松本 凝書翰「(宛先不明)」(慶応元年) 九

月二十八日

副書

一昨日田中様ニ罷越候処柴田東五郎申聞候ニ者唐津候御

滯京中御逢被成候儀御差支之節^者御家老多賀谷長兵衛と申者御呼

一 天下之形勢も先便も申上候通内外之切迫實ニ開闢未曾有之時と寒心之至ニ奉存候既一昨夜^{〔欠損〕}昨朝迄之處

二^{而者}乍恐 幕府三百年來之御命脉も相絶候事と一同流涕之外無他事罷在候処昨朝より昼頃迄ニ少々御變シ

ニ相成先兵庫開^{〔港〕}之儀^者十日之日延ニ相成其内 朝命を奉窺開鎖とも 朝廷之思召次第と相成候様子にて一

橋侯御滯京ニ相成候^{〔欠損〕}由承知仕候此上^者 皇國之存亡夷となり候も神州ヲたもち候も唯 天廷之御

議論如何ニ在^{〔欠損〕}儀と奉存何卒十二ヶ年來御動揺無之種々被為惱 宸襟候 叡慮乍恐此時貫徹仕候様奉

折捧候事ニ御座候只々応接ニ幕吏共迷惑仕候^者夷奴上京いたし朝廷之御議論を親しく奉窺其上本条約相結度

由強^而申立候由ニ御座候何卒乍恐為皇國 朝廷之御議論兵庫開港御許容ニ不相成様御周旋有之候事今日動

幕之真面目と奉存候実ニ日延十日之中ニ神夷とも此國相變候欝と奉存候へ^者食事も咽喉ニ這入り兼候様ニ御

座候昨日^者小臣も必至と彼は探索仕夕刻会津手代木より右之次第承知仕少々落付候事ニ御座候昨昼迄之形勢

二^{而者}直様上京可仕と相決居申候何卒貴地之模様善兵衛^江被仰付御洩しニ相成候^而も不苦儀^者奉願候

一 御家之儀^者恒藏下坂之節委細被仰含候条々逐一敬承^{〔欠損〕}恐悦夫々尽力可仕奉存候

一 御箇条書之通兩人ニ^而夫々相勤申候 右之条々乍急速申上候恐惶頓首

九月廿八日未刻

松本凝再拜

二八一 山陵御普請についての伺案^{〔宛先不明〕}

山陵御普請越前守^{〔以下欠文〕}

山陵御普請御入用調帳三四ヶ所ツ、御普請出来之分

山陵御普請之義古形之振ニ出来仕候義ニ付其時々格別田畑人家等ニ差障り無之分ハ御陵毎ニ絵図面ヲ以候候義此

節御用多之御中無益之御手数数ニも相成且御下知迄延引も仕御普請候ニ付古形通ニ補理仕候分惣体尤兼^而申上候惣

計御入用之内ニ而取計候分ハ前以不奉相伺出来榮之上絵
 図面并御入用調惣并惣体御入用調帳差上候様仕度奉存候
 尤其模様ニ寄格別兼而見込^ル御入用格外相増候欤又^者田
 畑人家等多分ニ障り候義有之 御場所^者其節々絵図并御
 入用調等差上御差図之上取計ひ候様ニ仕度奉存候此段奉
 伺候

二八二 (差出し人不明書翰)〔宛先不明〕三月十

一日

水府烈公御義 山陵之義厚御心掛ケ有之候段小生^ハ御
 賞之義 朝廷^江相願候処今日御賞し被 仰出候仍^而水
 藩喜悅之様子ニ御座候為御安心此段申入候已上

三月十一日

二八三 禁門の変の報告書案〔宛先不明〕(元治元

年)

七月十九日禁闕之下ニ発炮有之始末凡左之通

六月廿日頃長藩人数多勢兵器ヲ携へ大坂^ハ伏見へ着凡四
 百人程家老福原越後右人数引纏メ関東へ罷出候旨最初申
 立其後淀^江歎願書差出候趣意^者三條殿初脱走之堂上方并二
 主人宰相父子昨八月不慮之蒙 勅勸其後謹慎憂苦之体
 臣子之分ニ而見ルニ難忍何卒御有免被下置候様且兼々被
 仰出候攘夷弥御貫徹有之度之趣巨細相認稻葉閣老へ執奏
 相願其後国元^ハ追々人数相増嵯峨天龍寺へ凡四五百人立
 籠^{大持不} 山崎天王山へも凡四五百人立籠^{大持不} 是非宰相
 父子之^{此時京地之動揺甚敷会連義病中參内御所御玄關迄乗駕越ニ而乗り込不致前代未聞} 勅勸御有免之義取頼り歎願候^{信濃益田}幕府^ト大目付
 永井主水正御目付戸川半三郎伏見へ出張福原越後へ応接
 之趣意^者長州ニ^而兼^而尊王之志深厚之趣被聞召候処今般
 為歎願兵器ヲ携京地近辺迄罷出候義不穩所業ニ付早々人
 数引揚ケ福原越後小人数ニ^而歎訴いたし候^者御評義之等^(マア)
 も可有之旨申聞候処福原答二^者嵯峨山崎之人数千人余何
 れも決心之者共ニ付忝人ツ、申諭無之候^而者行届間敷左
 候へ^者余程手間取可申何れ尽力可致旨相答其後長藩^ハ之
 答二^者是迄度々家老出坂歎願仕候へ共御有免無之此度^者

何れも決心之上京地近辺迄罷出候義且攘夷之 叙慮御

貫徹之義伺候迄^者一歩も退キ不申何卒微臣之志願御憐察

奉願候旨將又兵器ヲ携候段ハ先月五日京地騒々敷既ニ弊

藩之者非命之死傷ニ逢ひ候者も御座候ニ付右ニ二条願意

不達内万一非命之義等有之候^{而者}残情不少候ニ付全ク一

己之身ヲ護り候為聊兵器ヲ携候段必粗暴之舉動^者不仕候

趣相答候然ル処七月十七日永井主水正戸川半三郎尚罷越

福原へ申聞候ニ^者何れニも兵器ヲ携へ歎願候^{而者}不穩候ニ

付明十八日中嵯峨山崎等之人数引払ひ可申右日限中不引

払候^者弥不引払ものと思召御所置有之候旨申達候旨仍^而

十八日上京之諸藩へ長藩追討之御内沙汰有之而三日中

ニ^者長討之兵押出し可申手筈も有之候之処十八日夕刻長

藩^者申出候ニ^者会津義種々奸計も有之候ニ付討戮致し度

當時九門内ニ罷在候^{而者}御所近之義甚奉恐入候間九

門外へ御差出し被下候様ニと願出右ニ付俄ニ堂上方参内

種々御評義有之候内曉七ツ半時頃長藩人数堺町御門辺^者

押入候処最初^者会津其外之固メ人数も曾^而不心付候処追々

鉄砲打掛ケ候ニ付双方戦ひと相成既ニ唐御門辺之合戦余

程嚴敷会津勢大ニ敗れ候処横合より薩州人数討入新手相

加り会津之兵右ニ氣ヲ得て守り返し薩と会トハサミ討ニ

いたし候間長州人敗れを取引退尚鷹司殿屋敷へ入籠り右

ヲ桶ニいたし暫ク戦ひ候処其内薩大砲火矢等鷹司殿屋

敷江打込焼キ討いたし候遂ニ鷹司殿炎上此時長藩大敗

れ家老国司信濃其外長藩人多ク討死尤寄セ手之方会津ニ

^而百人余桑名ニ^而同薩州ニ^而七十人位長州も何れ百人余之

討死と申候且又伏見ニ罷在候長藩福原越後四五百人之人

数ニ^而嵯峨人数出張同時位ニ伏見^者押出し候処大垣之人

数喰留大砲打合長州方大ニ敗れ討死手負共九人大垣方^者

手負三人と申事ニ御座候一鉢今程之一条^者去八月之返報

ニ^而薩ト長ト之戦ひニ有之様被察候斯外患之中ニ双方私

憤ヲ以内乱相生し候段実ニ可歎之甚敷ニ^而終リハ国内之

擾乱無止有志壯士互ニ戦ひ死亡ニ及ひ彼之夷狄手ヲ不卸

彼ニ頭ヲ下ケ候様ニ可至^者非遠義と悲傷血涙之外無之候

右鷹司殿出火方追々大火ト相成十九日巳ノ刻前^者廿一日

朝迄京町焼失仕候先ツ十九日之始末荒々如斯御座候以上

二八四 中川久昭書翰「戸田忠至宛」正月十七日

(封)

戸田和三郎様

中川修理大夫

用事

春寒料峭之候先以御安康奉賀候然ハ野生儀明十八日参

内被 仰付難有仕合奉存候右ニ付今日ハ一郎右衛門被

参員厚懇切ニ世話相成忝存候同人^江御伝言難有奉謝候昨

日諸司代御對話至極万端御都合宜敷趣ハ鳥度^(渡)一郎右衛門

ハ承知仕全尊公御至誠貫通故之儀と御同慶仕候不日拝顔

万々可奉伺候

一近衛殿御辭職之由就^而ハ鷹司殿へ 御移も被為在候

由一郎右衛門ハ承知仕候此頃内御密話申上候通り小子

明日参 内済之廉^二而一先^ッ之御暇御塩合拔不申^二而

候何卒御暇被 仰付候様仕度在所表之處深氣遣至極

御察可被下候近衛殿御退職旁延々相成候^{而者}当惑仕候

其上弥右衛門義時々近頃之内鷹司殿ハ罷出候哉も難計

奉存候ニ付何卒早々御同所へ小子心配之云々並ニ弥右

衛門と申者ハ根元ケ様々々之仁と申事を御聞ニ入置度

候呉々も小子ハ一切申出し候事ニ無之候へ共 上

ハ明日之廉ヲ以何卒御暇之都合鷹司殿へ申入方如何御

座候哉近頃奉恐入候得共 公ハ一応被仰上被下候儀ハ

相叶申間敷哉此塩合を失い候^{而者}先キ之目度無之何分

ニも公ニ御すかり御願申上候尚一郎右衛門へも一応咄

置候条御承知可被下候今爰^二而万々一國義不和ハ事起

候^{而者}対 天朝申上訳も無御座中川家取鎮方ハケ敷事

なき内人心一和之策仕候外無之奉存候昨日^者転法輪三

条殿へ初^而拝謁仕候處攘夷等之御咄台場一条近日内ニ

者何とか御沙汰も可有之との御咄も相伺候弥右衛門之

儀も御尋御座候へとも右^者最初^ハ之順序ヲ以御咄不申

上候^{而者}鳥渡ケ様とハ難申上併領分一統之人望ニ触候

者と申義ハ無急度御咄申上巨細^二者態と差扣只此上留

守中又候人氣動揺仕候^{而ハ}不相済深く心配之段^者重々申

上置候なぞ咄之積ニ仕候弥右衛門ハ十分深く御信用哉

も難計と相考候拝顔万々可申上候取込用事ハ如斯御座

候已上

正月十七日夜認

大急乱筆御推覧

二八五 供連人数につき御沙汰書(断片)「(宛先不明)」

過日供連之義相達候所唐門内狭小二付多人數入込候_{而者}

自然不取締之義も出来可致二付以後左之通相心得可申様

御沙汰之事

二八六 戸田忠至書翰「(宛先不明)」(安政四年) 十

一月四日

昨辰十月左之通御達御座候二付甚心配仕候間為念御断申上候事

靈珠院様御幼年二_而御家督之処年来誠忠ヲ尽し勤方行届且勝手向取計方常々不一通令心配又候我等幼少之家督二付_{而者}以後別_而心配之事ト存候仍_而加増をも可遣処此度_者含之義も有之二付不及其沙汰家老上席ニ申付候尤補佐之義分テ心配相勤イ

右御達ニよ_て愚考仕候処万一此度御勝手向可也二御暮付候二付_{而者}御加増等之御沙汰御座候_{而者}何共奉恐入第一自他金主向無利足又_者在町調達等被仰付候中へ私加禄頂戴仕候_{而者}筋合不宜以後精勤之心障リニも相成候間嚴敷奉辞候心得二御座候御沙汰御座候上奉辞候_{而者}君命二背き候義ニ_而不宜各様ニも御取扱被成悪き義と奉存候間昨年中之御達御含ミ被為在候廉ニよ_て愚考之趣 御沙汰以前申上置候斯申上候上ニ_而万一御沙汰御座候節_者何方迄も罷出嚴敷奉辞候間何卒当分之内_者加禄等之御沙汰_者無之様御取成奉願候左候へ_者私義も公然と忠勤ヲ尽し可申心得二御座候尤私義も五十歳ニ無程相成候間万一病死仕候義も難計其節ハ本性戸田家之義ニ付奉願置候願書認置候間右願之筋_者御聞濟被成下候様仕度奉存候是以国家之御為ニ申上候義ニ_而自己之勝手合等_而已申上候心得ニ_者無之私義ハ何卒此後加禄等之御賞普無之此姿ニ_而被召仕被下候_者如何程も忠勤ヲ尽し可申候此段御沙汰以前申上置候已上

霜月四日

間瀬和三郎

二八七 畝火山東北陵修補和歌詞書案

畝火山東北陵修補給へる時松井清三郎とよへるもの、多くの人民を率ひあまたの日数ふるもと諸の事ふかくつ、しミいとなミ侍りける心さし朝廷を尊ミ敬ひ奉るを感じて

とふも六ツケ敷先ケ様ニも候半哉

二八八 允恭天皇御陵地引渡しについての伺案「(宛先不明)」(元治元年)

渡辺丹後守殿領分河州志紀郡国府村ニ被為在候允恭天皇御陵此節御修補取掛り候ニ付御用地引揚之義丹後守殿御家来中へ越前守家来及掛合候義相違無之候哉且右地所者本高場并新開山年貢等互相掛り候へ共先般村方へ御達シ之趣も御座候ニ付引渡候而不苦候哉之段渡辺丹後守家来方伺出候ニ付御尋之趣京都表へ申遣候処兼而 公辺方御達之趣^茂御座候ニ付通領主役人方へ及掛合候義相違無御座候尤御用地引上之分反別坪数并高引之分取調追^{而大}

和守方其節取替地被下之義も追^而大和守方申立公辺^{江差}出し候上^ニ而替地之義も申立候筈ニ御座候間其段渡辺丹後守殿家来へ御達御座候様奉存候

二八九 川村正平書翰「岡谷繁實宛」一月十一日

(封)

岡谷繁實様

貫下

二条家ニ而

川村正平

拜啓新年御慶申上候扱昨日二條家へ御越被下貯水云々ニ付縷々被仰下候由ニ候処二条家ニ而右之地所取入候義ハ既ニ一昨年已来之事ニ而遂ニ昨暮ニ決行候へとも貯水等之義者毫も不存候義ニ付何欵御心付之辺も候ハ、追々御添意被下度奉希候且又水車之地所相メ方御尋之由是ハ式万五百円ニ相当仕候義ニ御座候右等御尋之趣ニ付小生方一言御請申上候且御隣地之義ニ付何もくよろしく奉願候頓首再拜

一月十一日

川村正平

岡谷繁實様

貴下

二九〇 平松時厚書翰「岡谷繁實宛」

今朝御出之様申入処少々差支候間後日来車奉待候也

岡谷殿

平松

二九一 中川久昭書翰「宛先不明」(元治元年) 七月十二日

月十二日

今に残熱甚敷御座候処弥御安清被成御勤珍重奉賀候然ハ
去月末頃ハ長藩人数不容易行粧ニ而大坂ハ伏見迄罷出押
而上京可致哉之説も伝承就而は大坂京御役人衆御配意度々
留守居呼出し相成達之趣其都度々々申越尚亦江戸表ニ而
茂板倉酒井其外数々御役御免相成候由如何之御趣意哉訊
柄はさつはり心得不申増々御混雜大和守殿横演談判御委

任周旋之趣に伝承仕候得共既ニ異人共又々遊歩いたし候
説も承田舎ニ而は実以相分不申増々切迫不容易形勢奉恐
入候義ニ御座候和漢古今共用立候者ハ其失も不少哉板倉
如何之義被致候哉は難計定而実以其保難被差置罪状有之
候ニ付退役とハ相考候得とも兎も角茂當時板倉ニ比し候
御役人無之大和殿水野牧野稻葉井上殿粉骨周旋之義は申
迄も無之候得共弥増御手薄此末之成行聊茂目度無之哉公
ニは如何御賢考被為在候哉右代り誰ニ被 仰付候哉承不
申兼々御咄合申上候通可然と心付候仁は更ニ無之 上
ニ者御年若ニ被為人候旁只々落涙奉氣遣候只今此姿ニ相
成聖人再来いたし候共今爰ニ而無異御靜謐相成候義は無
覚束併最早国脉乏敷力ニ及不申と者乍申中国之倒レ候を只
空く傍觀は難相成倒候迄ハ死ヲ以粉骨被致候者執政衆相
当之事なから只今之姿ニ而は何程ニ有之候哉残念千萬皇
国浮沈之境何卒大藩之衆格別ニ尽力之外無之左候得者小
藩ニ而も有志之面々は其尾ニすかり助力いたし候者も可
有之府内とハ度々□□相互只々苦心歎息仕候京地之光景
如何哉嚙御混雜と遙察委曲何度奉存候 朝廷之处異変之

節御危難之義は不被為在御手厚ニ相成居候哉公武共実以御案し申上候

正三殿ニは益御勇健被成御勤候哉御伺申上度□□御願申上候
上候嚙々御配意不少御義と恐察仕候比度章藏立帰上京に付幸便ニ託し呈書仕候大乱筆御推覧早々御火中可被下候頓首百拜

七月十二日認

二伸時下折角御厭專一奉存候皆様へ宜敷御伝声奉願候大塚へも御一声御頼申上候

三白大塚之義ニ付至密内々御咄相伺候義有之重而借用等之義申聞候共取揚不仕候様との内々御咄し御座候ニ付密々申上置候又々殊ニ寄内分類ミ申聞有之間敷とも難申義風と伝聞仕候得共未為何義も承不申候へとも若又万々一内頼之義有之候節は品克相断候心得ニ御座候少々風聞も御座候間御含ニ申上置候御口外堅く御無用ニ奉願候私家来江も御咄なしニ奉願候已上

秘件

二九二 善福寺警衛歎願下書〔宛先不明〕（文久元年）八月二十五日

善福寺一件

下書

去ル丑年以來從 公辺武備專要ニ心掛ケ候様厚被仰出候義謹而御家来一統へ篤と申含上下挙而微忠ヲ尽し御厚恩奉報度心得ニ御座候仍而者綬之助様ニも御困窮之中御家来江武術御世話等厚被 仰出候ニ付下々至迄篤と御趣意相弁万一異人方兵端ヲ開候欤又者浪人共 公辺江奉対不義之始末有之候節御差図次第身命ヲ不顧相働候心底ニ凝り固り居候処今般為異人 御国之士ヲ害シ候義者丑年以來申論し候趣意ニ致相違候間一藩容易ニ承服不仕強而申付候時者御暇願出候族出来可申左候時者今般御固メ之為ニ御家政忽チ取乱れ候次第実ニ歎ケ敷心配仕候尤故山城守様御遠行以來御幼年当節迄拾壹ヶ年之間御家中御領内迄極々御靜謐ニ而聊之故障も無之御家治り候処今般異人御固方御家中不服ヲ生し候義当惑至極之次第私義是迄千辛万苦仕御補佐仕候処一時ニ崩れ立人氣不穩候

而者 此上取治メ方無之本文ニ申上候通元來之御困窮必至

之場ニ迫り候間御固メ中御手当金手段工夫も無之差支候

義者眼前之次第ニ御座候何卒右等之處厚御憐察被成下置

宿寺御固メ 御免被成下外御役場ニ御操替相成候様仕度

奉存候呉々も此上宿寺御固永ク相勤候様ニ而者一藩人氣

不穩如何様之變事出来候哉も難計尤外浪人共之如く不義

之始末者決而不仕只々宿寺御固者 御国江奉対恥辱之義

と存詰候心底何分難解甚心配仕候此段無挺申上候間格段

之以 御憐愍願之通被 仰付候様必至と歎願仕候已上

八月廿五日

二九三 大羽循之進意見書案（慶応元年） 閏五月二十

二日

〔(裏端書) 大羽循之進婦府之節ケ条書下〕

閏五月廿二日

一 御参内之節越前守様御賞之御沙汰有之右御請大吉左右

伝奏衆々御本家様へ御通達仍之祖太郎へ申含メ下向候

岡谷文書一幕末・明治書翰類一（二）（原島・松尾）

事

一 其後少々模様替り候ニ付必至と尽力之事

関白様殊之外御尽力之事

一 壱万石大和守へ可被下処右ヲ本家へ被下候様ニと歎願中之事

一 御所替御猶豫必至と相願御猶豫多分出来可致万一出来不致時者旧復出来可致夫も出来不致時者大和守分本家へ被下願可相濟候事

一 江戸表ニ而も御所替切迫御難決之願等都而権家御手入肝要之事

一 河州五ヶ年平均調当節差出候節者大坂其外之御借才一時ニ發起 山陵御用も勤り兼候ニ付其旨朝廷幕府へも申立置候事仍之無程前段之御猶豫外二ヶ条之内相発し可申ニ付夫迄之處小高へ御頼五ヶ年調少々御延し置被下度事

一 何れニも宇都宮者何れニも動き可申旧復者必出来可致旨一橋公内通之事

一 此節大坂へ棋太郎善兵衛斧三郎差出尽力候事尤棋太郎

八尾公二橋両家二知己有之善兵衛者周防殿へ肉縁有之
斧者松前二極々懇意有之候間差出し候事

一戸田肥後守尽力之事

一尾公殊之外御尽力之事

一二月朔日会津へ参り肥後守殿咄し之事一橋へ翌二日罷
越同断之事

一官家之方同斷之事

一五ヶ年平均調差出候時ハ小高へ内見篤と相談御損無之様可致

一棚倉城付四万石跡者朱丸印是非御手二入候様小高へ御頼之事

但朱丸印極上々之ケ所金満家有之二三万之金ハ忽チ出候事

一御所替猶豫出来候^者来春迄二^者壹万両^者手段可致事

一文久二年乙河州収納無之悉借用_{而已}ニ而押移_リ其上御下
し金壹万三千兩余之寢ミ出来此節卒業ニ付右之穴ヲ償
ひ必至手段中ニ_著候へ共江戸御差文御家中難渋ヲ相察
し五百金無理手段ニ_而下し候事

二日復外ニケ条之内相發不申内^者此表小生手ヲ明ケ候義
難相成候間右条々之内相片付候上ニ^而出府候事
一長征御見合之事

二九四 参与書翰「戸田忠至宛」十二月二十六日

文武館市中取締り之三藩へ御借渡之義昨日委細申入置候所右館長州より拝借願出無_レ執義二付御借渡二相成候間引渡等之義同家より可相談候間宜御取計可有之候此段申入候已上

十二月廿六日

参与中

戸田大和守殿

二九五 分地御渡しについての意見書案

殘高「(欠損)」蔵米ニ而免三ツ八分余之御渡しニ而ハ結構過
甚恐入思召義と存候右之訳者御蔵米ニ而者水干天災之引方
も無之又村々類焼其「(欠損)」拝借道橋修覆□ニ迄迄
(朱書)「外御致力」

都而「^(欠損)」無之御分知被成候事ニ相成甚御心配被成候

仍而殘高之分ハ新田之義ニ付三^{(朱書)(余カ)}八分□ヲ引キ三ツ五分位

之免ニ而何村内ニ而何百石何村之内ニ而何百石ト御本家様

御領知村々之内ニ而御分知被成候方 公辺御願面之御趣

意ニも相叶可申決而土地人民迄御引分ケと申ニも及間敷

御旗本衆杯ハ壹ケ村ヲ三四軒ニ而領し候類多有之候へ者都

而御本家様御領地之内御分ケ被為進御相給之振合ニ御取

扱被成候者子細有之間敷且者天災等御救ひ之拝借惣而之義

も御分知高割合ニ而被差出候者真之御分知御趣意ニも相

叶ひ可申尤右殘高之分者土地人民御扱ひ方ハ一切御本家

様ニ而御引請精一郎等關係不致右救ひ其外檢使等之御入

用丈ケ御割合ニ而御出銀被成候者御本家様御為ニも宜敷

御一家御同様御分知之御趣意も相立可然御藏米ニ而三ツ

八分余之御渡し高ニ而者余り結構過且者御本家様御出方茂

多ク相成可申と御心配被成候御様子ニ付篤と御両人様方

御本家様御役人江御談合被成候様仕度尤当年之義者余日

無之候間御調之通当年丈ケ御渡相成来卯年方ハ前段之振

ニ相成候方 公辺御願面ニも相叶又御本家様御為ニも

相成此方様ニも御取箇者少々減し候而も難有思召候義と

奉存候

新田之免本田ニ込有之候間難引分候間取調出来兼候旨此

義何分難解本田高何程新田高何程ト申義者村々水帳ニも

有之候間随分引分ケ出来候義と存候御本家様調者土地人

民迄引分ケ候調ニも可有之候而難引分と申義ニも可有之

決而土地人民迄引分ケ候ニ不及壹ケ村相給之振ニ候へ者百

石之村方十石ニ而も五石ニ而も引分ケ候義出来可申と存

候

〔題簽〕
「岡谷文書 十五」

二九六 大原重徳書翰「嵯峨實愛宛」(慶応元年) 七

月十三日

残暑も少々弛ミ候愈御快然被為遊候哉御保護專要候抑今
夕出頭可致様申置其積リ罷在候処俄ニ不得止事儀出来仕
候ニ付不得其儀候猶明朝出頭巨細可申上候併荒々申上候

尤御内々御咄し

博陸公御内存ニハ是非々々元禄ニかへし国替ヲ為止ル御所存之旨拝承仕候是ニも種々御座候へとも難書取候且又七月廿日国替発足之期限欽之旨ニて和州大当惑候へとも右期限ハ九月之よし併仕度ハ可有候へとも廿日ヲ発足せねハならぬと申様ハなき事と一橋申上居候よし当地ニてハ左様二候へとも百卅里東しニてハ左様ニもなき欽其辺掛合中之旨同人被申上候趣ニ候右等誠ノ荒ましニ候へとも一寸明日出頭迄之処勘要令言上置候仍早々如此候也

七月十三日

二白さし置かせ候必御答御無用候和州へも同様内々荒まし噂いたし置候呉々も可令出頭之処随意可被免候也

正翁大人

大愚老

内々梧下

二九七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至ほか五人宛」二月十

七日

(封)

間瀬和二郎殿

三條大納言

戸田三左衛門殿

春寒難去候処愈無御障奉職之儀珍重存候然^者今般大塚氏上京ニ付段々御懇情之儀深畏入辱存候年来品々御厚情之上重畳之儀何共千万辱存候猶亦宜御頼申入置候扱右等之儀ニ付儀八郎事殊之外出精周旋万端都合能閑白家内嶋田左兵衛権大尉杯ニも追々懇意取結候段於拙子も得力大ニ辱存候其上儀八郎儀殿下館入被申付候ニ付^{而者}弥万端都合便宜ニ相成候右館入之事も決^而当人^方内願等^者毛頭無之以殿下思召被申付候事ニ^而当家^方願立候筋等一切無之於本人も差懸当惑之趣拙子へ内談ニ付折角被申出候事故領状可然旨申答御請ニ相成候自余当人在京中他出以下諸向往来初一々拙子へ相談有之拙子差図之上進退有之万端嚴重いかにも明白之義ニ有之候当節柄之事故於御地品々御心配も可有之哉と存候前書申述候通之儀故必御休慮之様と存候同人儀前文之通便宜も有之ニ付^而ハ今般越前守様立願立置候次第も有之候間自然被仰出候ハ、可然御含

置御頼申入候將又林藤左衛門儀年來愚家取計向万事誠実
出精之上近比拙子繁勤二付^而ハ弥以何欵二丹精実二無二
之誠忠実以安心辱存候就^而ハ是迄身分も御取立二^而被差
登置候由猶此上一等御取立被遣候ハ、実以忝畏入候御規
則も可有之拙子^右様歎願^者御差支も難測何共恐入候得
とも希入候何卒御取立二も相成候ハ、実々辱存候二付不
省恐先々願入候何分宜御頼申入度存候右等之儀共申入度
如此候也

三條大納言

二月十七日

實愛(花押)

間瀬和二郎殿

戸田七兵衛殿

戸田公平殿

鳥居小八郎殿

石原鍋之助殿

戸田三左衛門殿

二九八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」

(封)

間瀬和二郎殿

三條大納言

戸 大和守様

再陳御□書之趣被為入御念難有奉存候 尊公様二も時下
折角御養愛被下候様奉折候扱不寄存御高吟御祝し被下数
回感明難有奉拜謝候如何様二欵御かへし之真似成共差上
度奉存候得共不相替不□吟口難開乍残念暫御預ケ申上候
御笑察奉希候恐惶頓首

二九九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(文久二年) 間

八月二十二日

追申本文申入候老中奉書披露之事昨日殿下承候於殿下も大
感服被成候事二候万々上京可申入候兎角流行病有之猶御用心
御上京相待申候也

秋冷頗加候処愈御安穩珍重不斜存候扱今般被仰立候山陵
御修補之儀如御願望被仰付候旨昨日武伝^右老中奉書披露

有之候旨伝承候実以御誠忠貫通速ニ被仰付恐悦御同慶無
此上候全段々幹旋之儀と存候右ニ付而も早々上京も有之
何欵と於当地取調向も可有之哉夫是ニ付品々申談度存候
条々有之間旁急遽ニ上京相待申候委細之義ハ儀八郎方可
申進と存候得共一筆申入候儀八郎事も雀躍大ニ勢力相加
リ相待申候同人専此比中外共周旋実々一臂之助ヲ得扱々
都合能忝存候先ハ早々当用斗申入候也

壬月廿二日未時認

封

間瀬和三郎殿

三条大納言

三〇〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月十七日

(封)

戸田和三郎殿

三条大納言

度々御細翰被下忝拜見候追々寒氣相加既入寒愈凛烈候処
御安全日々宋書〔周旋力〕御周還実以珍重賀寿安心之至ニ候乍去土地も
相違山湿等御用心専一存候然桂小五郎内々申出候儀御心

配御尤ニ存候態々精一郎被差登御手厚之段桂も感伏居候
御心配之趣同人江も申聞置候右ハ全矢守之事哉ニ愚察候
事ニ候

一後醍醐院山陵仮ニ先御修復置之事は又差当御苦勞ニ存
候御請之趣猶可令披露候右一件も甚恐慄寒心候事ニ候
尚又御聞及之分御申越可被下候

一至而御壯健日々御奔走第一安喜仕候乍去余リ御勉勵ニ
過候而ハ又々御当りも可有之哉と御案思申候とかく御
保愛祈入候

一勇記寸暇に可差下候併此両三日昼夜透間無之同人も殆
弱リ居候位ニ多忙ニ相成候此所少し過候ハ、隙も可有
之見計可差下候

一毎度〳〵色々御患なら漬霰酒日々相楽候御芳情難謝尽
候此一箱任便進呈仕候

今日ハ早天方阿州家老長州桂小五郎土州平井収二郎青
門家来四五人等来談唯今迄間隙無之大弱リ荒々当用斗
申入候万々猶期後音候也

十一月十七日午半刻認

戸田和三郎殿

實愛

緘

様之變事出来候哉も難計義深奉恐入甚心配仕候ニ付不得止事申上候間格段之御憐察ヲ以願之通御繰替被仰付候様被成下候様必至下歎願仕候

三〇一 善福寺齋衛歎願下書「(宛先不明)」(文久二年)

年)

^(前文)御間柄之御場合ヲ以御内慮奉申上候今般宿寺御固メ被仰

付 台命之義ニ付篤と申論し一旦之処^者漸出張為致候

へ共御家来人氣容易ニ折合兼左候時^者御固メ之為ニ御家

政向差纏候次第甚心痛当惑仕候尤故山城守様御遠行以來

御二代御幼年当節迄十^々年之間御家中御領内迄極御靜

謐ニ相治り候処今般異人御固メ人氣ヲ動殊ニ日光山御

警衛^并浪人捕押方等ニ付多分之御人繰御入用夥敷御家来

一統必至難渋之場ニ迫り寢食も不安心配当惑仕候義^者別

紙申上候通之次第ニ御座候扱又故山城守様重^而御役首尾

能御勤被成候廉も御座候二付何卒右等之処厚 御憐察

被成下宿寺御固御免被下置外御役場へ御繰替相成候様仕

度奉願候此上宿寺御固永々相成候^而者一藩人氣不穩如何

三〇二 朝廷幕府間の不穩についての意見書案(文久元年)

元年)

攘夷之論^と天朝幕府之間不穩節愚意下按取調草^(欠損)

攘夷之義昨年 勅使御下向ニ^而被命又当春 將軍上洛

ニ^而 御直ニ 勅命尚御後見一橋公ヲ始水府其外惣裁

職老中等迄何れも攘夷之義立派ニ御請夫々関東へ御下向

之処一橋公関東着前小笠原圖書頭殿独断ニ^而英人江償金

相渡候次第是^者圖書頭殿独断故老人之罪ニ^而無撓候へ共

一橋公^并水府ニ^而夫形リニ差置候筋何共難解且 將

軍御還府被為在候へ^者尚更攘夷之機會ト奉存候処何之御

沙汰も無之剩横浜交易^者盛ニ行れ候様子此上天下之形勢

如何成行可申哉日夜苦辛罷在追々様子承り候処幕府之役

人上下大概攘夷之志無之攘夷之説ヲ唱へ候ものハ悉罪せ

られ候様子又諸侯之様子も真之勤王家ハ少ク表ニハ勤王ヲ唱へ候もの^茂内心港開説多且諸藩共港開鎖国之論^人心割れ衆議一致之藩中ハ少く相見へ申候段彼ノ術中ニ陷リ斯日本瓦解之体ニ相成候義歎^ケ敷次第二奉存候右之振ニ相成候処故何程攘夷之説且必勝之策略等建白いたし候^者連其説行れ候様子ニ無之假令一向宗之もの禪宗ニなれと何程論し候^而も改宗候義無之ト同し事ニ^而肉食妻^帝体之宗門之方能キト心得居候もの共故中々改宗之志ニ不至此節之幕吏矢張其通ニ^而夷人渡来港開之義ハ決^而あしき事と不存一向宗ニ染込候ものと同じ事ニ御座候幕吏夷人渡^{来者}皇国之不為幕之為ニも不宜ト心得居候へ共彼ノ虚カツニ恐れ攘夷不致義ニ候へハ忽チ必勝之策略其外建白直諫之手段も可有之候へ共前段之通港開ヲ能キト心得追々夷狄ニ染込候へハ中々一向宗禪ニ改宗不致事と存候^{刺諸藩茂}石之次第二候へハ迎も以後天下泰平ニ^而朝^朝威幕威輝候事ニ不至群雄割居之姿ニ可相成其時之心得此方^者徳川家御譜代之家筋朝ニも幕ニも誠忠之道立不義ニ不陥様所置いたし度候万^一官軍幕ヲ攻ル時^者天朝へ対し

是迄幕之攘夷因循ヲ一向御託申上是迄^者幕吏専らニ仕候故無^一捩候へ共斯相成候上ハ臣等先鋒攘夷仕^一宸襟ヲ奉安皇国之武威ヲ四方ニ輝候間幾重ニも是迄之義ハ^一東照宮二百有余年泰平之勲功ヲ被^一思召何分ニも御有免被下置候様仕度尤臣微祿從^而家臣少勢ニシテ一手之戰爭無覺束奉存候間援兵之義ハ幾重ニも被仰付可被下候右様之振ニ申立又幕^一万^一一迫リ奉ル事有之時^者以死幕ヲ諫メ候言葉言夫軍ハ以義不義ヲ討直ヲ以曲ヲ討必勝之術ハ軍之正不正ニよる事ニ御座候然ルヲ征夷將軍之御職掌ヲ不全^{而已ならず}勅ヲ立派ニ御請有之候^而攘夷之事件更ニ御被捨置候段御過チ重キ事と奉存候然れハ御出陣有之候^而も必御破れニ相成候義と奉存候右之通^一君之危ニ被為至御不為ヲ存御供仕候義^者臣たる之道ニ背奉恐入候三百年来之御高恩ヲ蒙リ候段^{朱書(覽)}実骨随ニ徹し難有奉存候間不願恐奉言上候愚臣申上候義篤と御賢考被遊暫御止リ被遊候様奉存候右様之振ニ幕府へ申立御家政之処嚴重ニ君臣一和いたし無道ニ不組様自国ヲ守り居候様いたし度候

三〇三 戸田忠至書翰「齊田明善宛」五月二十三日

明善様

忠至

拝見益御勇健奉賀候然^者賞典被下帳則返上仕候

一 昨日日本所へハ老人も不参富士見丁へ参り候哉二付後刻興朝^者可承旨敬承仕候

一 岡村秋田之円物正ニ落手仕候岡村ハ昨日参り候間早々為持可遣候秋田ハ妾暇ヲ遣し父淡更同居候^者小子^者ハ從四位公へ相願些少之金円^者取計遣し可申自身妾坏ヲ置候^而些少之御救ひモ小子^者ハ難願旨昨日岡村へ篤と申談候処同人モ同意ニ^而篤と教諭可申聞と申候間五十円^者右文雄妾之片付候迄御預り置申候左様御承引可被下候

一 御端書岡村徳兵衛^者何も不申聞候何か申出候模様モ御座候哉実ハ此度限りニ致し度存候先ツ^者貴答早々敬首

五月廿三日

小子風邪快方ニ御座候妻不快モ伊東療治ニ^而快方ニ相成候乍憚御安意可被下候

三〇四 親征その他意見書案(慶応四年)

天顔奉拝度候^者京都へ被為召 御国法之通御取扱被為拝候事

御親征ニ^而浪花へ被為入候^者本願寺ニ^而可然候へ共万一
天顔之詔ニ候^者此方へ御呼寄せ之方可然と奉存候事

三〇五 武具大破・城郭普請の意見書案(断片)(慶

応元年)

一年来城付武具類大破ニ^而先城主方引送り相成居候処追々手入いたし昨年之戦争ニ相用候故尚及大損又戦場へ捨り候類も有之此調破損修覆不足補ひ急速出来兼物入多分之事

一 城郭普請一昨年稀成大風雨ニ^而及大破昨年修覆可致処浪士追討ニ^而不能其義当年ニ至り御咎メ減知被仰付候

以来必至及困窮普請不行届候事

古来有来之城付武具類當時不用之品取繕ひ二不及破損
修補二不及尤當時勢必用大小炮^著双方共熟談之上引送
り可申城郭普請之義も小破之分其俣時節柄之義二付^(朱書)
^(以下太々)

三〇六 戸田家へ忠勤の覚(文久二年)

御陵を収めよとの公命を蒙りし事いやしき身^而斯有難
き事御国に生れし甲ひも有何とも言尽すへき事あらねは

御陵を君のおふせに納るは嬉し涙に言の葉もなし

不省身^(月)二而重き御役ヲ蒙り殊二老年二もおよび重き御役

勤候事恐多過ちあれば君の御為二もならず去りし年々致
仕之事内願いたせしに忠温公世を遠くならせ給ひし時^著

忠明公御いとけなくて御家を継せ給ひ御兄弟之おさき君

達も数多在らせられ又忠延公忠温公之御後ひつをはしめ

御年丈させ給ふ御婦人方も多くましませし殊更こかねは

乏敷からせ給ふこかね多くいかん共すへきよふなく外^著

公迎之御役人を請け内は御いとけなき君をいたき奉り
ものしらぬ身^而とても過すへき事ならぬと思へとも天
二います之祖先へ対し奉り命の終るまでと覚悟いたした
地二いのり忠明公を御そたて上ケ奉り御初て御暇を蒙ら
せ給ひて御国^江入らせ給ふ程二成らせ給ふ事難有不肖も
少しく安堵の思ひをせしに其年之冬府内大地震二而三や
しきをはしめ寺々迄も皆大やぶれとなりこかね足らぬ中
二而やうやくにいとなミあくるさつきの末二君の参府さ
せ給ふをまち奉るにさつきの初め風と病ひつき給ふもし
らて居りしに御国^江早馬来て病ひ重らせ給ふ事を初て告
しに驚とも何とも言葉なくて直二御国へ行しにはや世を
遠り給ふ事のかなしさは胸も張さく斗斯迄なれと丹精無
二なり君の薄命ハ申迄もなく斯微運之臣国政二預り候^而
^著此上君家之御不徳いか、あらんや彼是を考て致仕を願
ひて遁世もせばやとも思ひしに又 忠恕公いやましいと
けなき御有様を見上ケ奉ればいとおしく是ぞ君家大切之
御時節尚一入謹仕して守り奉らはやと又勇氣をはけまし
愚忠を尽すといへともこかね足らぬゆへに何事も届かぬ

事多かりしまゝ、さま／＼工夫を廻らし　公辺御役人

蓄財家之町人^江たのミ彼是^二而多くの姫君達も大方縁付せ給ひしに　忠恕公も追々御歳も増せられ去冬御任官御元服も済せられこかね足らぬも御国へ人參作之事公のゆるしを請たれば年程へすして数多之こかね人事にも至れば元方不肖追々老年^二および君家之御不為ならん抔引出さん内に致仕すること愚忠之はしとも思へハしきりと致仕を希ふニコんと願之通重き任を免され給ふ難有存去とて御在世御村替の時ち忠温公世を遠り給ふ後御二代の御幼君の事をかへり見てよめる

やせ牛の重荷背負ふてやふやくに

山坂越しけふぞ嬉しき

又よめる

山坂を越し、姿の拙さを

跡かへり見てはつかしき哉

三〇七　外国人への対応覚書（慶応四年）

岡谷文書―幕末・明治書翰類―（二）（原島・松尾）

（朱書）（前文次）
乍去當時於

朝廷御多端之折柄ニ付暫時何之誰へ外国惣督被　仰付候間御国内一統篤と相弁外国人^江対し無礼等不致様可相心掛尤不弁之輩有之候者何之誰へ弁論いたし可申事

三〇八　戸田忠至書翰「齊田明善宛」九月二十九日

一翰啓上仕候秋冷之候益御勇健被成御座奉賀候然者興朝殿洋行之義ニ付愚老拙論申遣度乍不文書綴申候何卒

從四位公深川様^江も被入御覽思召も無之候ハ興朝殿方へ差遣し可申候尤思召も被為在候候者無御腹藏御沙汰被下候様奉願候且又洋行之義輕率ニ可致義ニ無之御国之義も弁知致し万事之事ニ通し候上ニ無之候而ハ彼ノ国へ参り御国之愧且^者乍恐秋元公之御外聞ニも相成候其訳者外国之貴族自国^二而華族ト唱へ候ものハ皆学者^二而自他共弁知之由ニ御座候依而初学之もの抔めつたニ洋行スレは却而笑ひヲ取候事ニ相成候乍去興朝殿ニも憤発方出候義ニ付只管差留志ヲ折キ候様^二而者不宜候間やはらかニ差

留メ度夫^二者養実一致ニ無之候^而不宜候間何卒別紙愚文
宜敷御推覧被下候様可然被仰上可被下候敬首

九月二十九日

明善公

忠至

別封書付御覽後御戻し奉願候

三〇九 戸田忠至書翰「齊田明善宛」十月一日

一 翰啓上連日不勝之天氣ニ御座候益御勇健奉賀候然^者過
日入御覽候洋行云々拙書御覽相濟候^者何卒御下戻可被下
候時勢騒々敷義毛内聽仕候ニ付一日も早ク篤と興朝殿へ
申談置度奉存候此段早々申上候以上

十月一日

二 白拙書之内思召も被為在候ヶ条^者無御腹臆御加筆之上御戻し可
被下候已上

齊田明善様

戸田忠至

三一〇 戸田忠至履歷下書

忠至

文化六己巳年八月十一日江戸昌平橋屋敷^二而出生初名方
之丞後嘉十郎又和三郎卜改文化十五寅年三月十歳之時大
御番組木村内藏允為養子其後木村家実子出生ニ付養家取
纏文政十一年子忠至廿歳之時離縁昌平橋屋敷実兄戸田輔
方^江同居右同居中間瀬方実姉宇都宮住居ニ付為対面文政
十二丑年相越天保四巳年迄逗留帰府之上尚又養子可参処
忠温公度々厚御意之旨も有之候ニ付再養子ニ可参存意相
止メ御家臣ニ相成仍之同巳十二月御宛行二百石被下置御
取次上席被仰付同六未年御用人役同九戌年御番頭役右役
中三拾石増知二百三十石同十三寅年間瀬家相続人絶候処
同家之義^者元来戸田家之客家同様^二而古今由緒有之家筋
ニ而難取捨置仍之忠至相続可致段忠温公被命候ニ付乍
不本意不得止間瀬家相続同家知行六百石其俣被下之弘化
元辰年六月家老職同未年勝手掛り嘉永元申年十二月長子
戸田鍾太郎へ貳百石賜同二酉年江戸定宅被命家内一統江
戸へ移ル同四亥年河内国村替之義取扱二百石加増八百石

ニ成ル安政二卯年家老上席ニ成ル同五年加増貳百石賜
リ千石ニ成ル万延二酉年異人御固メ辞退之義骨折候ニ付
戸田家御伝来之御刀ヲ賜ル同戊年家老職御免相願候処間
瀬家相統人出来ニ付本姓戸田家ニ立戻ル仍^而戸田和三郎
ト成ル尤末家並之取扱為賄料五拾人フチ賜ル且家老職永々
精勤之廉ヲ以御刀ヲ賜リ以後御家政向之心付候義^者無斟
酌申出候様被命且此程越前守様^ハ山陵御修補之義 公
辺^江建白忠至周旋候処速御修補御用被仰付^并忠至上京仕
候^而右御修補取扱候様公辺^ハ被仰付同年九月江戸出立十
月九日上京夫^ハ 天朝へ伺之上五畿内 山陵所々巡
拜仕十二月帰京文久二亥年正月十九日一橋殿於御旅館山
陵御用相勤候ニ付諸大夫被仰付為御手当貳百人フチ被下
候旨小笠原圖書頭殿御達其後正月廿一日 天朝^ハ御召
出之上武家玄閣休息所於上之間伝奏坊城大納言殿野々宮
宰相中将殿御列座ニ^而從五位下大和守御推任叙宣下且為
御手当貳百人フチ被下置候旨御達有之右ニ付公辺^江御届
候事同二月廿四日 神武天皇御陵御修補御取掛リニ付
為告命 勅使徳大寺中納言殿次官万里小路右中弁殿大和

国畝火山迄参向ニ付右為御用大和守同所へ相越御用無滞
相濟二月廿七日帰京其後 神武帝御陵御修補ニ付^而者
品々関東へ申談御用有之候ニ付伺之上三月廿四日京都出
立四月八日江戸着御用濟ニ付同八月十二日江戸出立同廿
七日京着同十月廿二日 神武天皇御陵御普請為見廻り大
和国畝火山^江相越十月二日帰京同十一月十三日出立
神武天皇御陵御修補皆出来ニ付為見分相越同十七日^ハ帰
京神武天皇御陵御修補五月^ハ取掛リ十一月中ニ卒業仍^而
皆出来之御届濟同十二月朔日神武天皇御陵皆出来為告命
勅使柳原中納言殿畝火山へ被相越候ニ付右為御用罷越
同十日帰京且又於江府松平大和守惣裁職被仰付忠至同名
ニ付改名仕度段 朝廷^江奉願諸司代^江も願書差出候処忠
至義大和守宣下之義ハ深 叙慮有之候^而御推任叙之義
ニ付改名不相成段伝奏衆被相達候文久三正月廿九日朝廷
^ハ御呼出しニ付参 内仕候処 神武天皇御陵御修補
格別骨折二千余年之御荒廢既ニ可及廢絶処盛大ニ御修補
行届 朝廷御追孝相立幕府御誠忠後代ニ残リ候廉ヲ以
新ニ被^{御感不糾仍之}召出永々山陵奉行諸侯之列御取扱毎歳年始御

礼之節奉拜顔頭候様且為御賞御劔毫振被下置候段伝奏野
宮中納言殿議奏柳原中納言殿広橋右衛門督殿虎之間へ例
座柳原殿被相達候事仍之種々御辞退申上候得共何分御取
上ケ無之一ト先ッ御請申上翌二月朔日只管御辞退申上度
公^江迎書面差出候処二月九日老中連名酒井雅樂頭殿水野
和泉守殿有馬遠江守殿奉書到来翌十日二条へ登城候処神
武天皇御陵御修補御成功且千歳ヲ過候御場所追々御修補
相成畢竟 官武御為筋深心掛ケ候故之義と一段之事ニ被
思召仍之御刀拝領被仰付候段酒井雅樂頭殿御達但シ駿州
嶋田義輔作也尤今般 天朝^カ之御賞只管御辞退申上度段
去ル朔日書面差出置候処格別之 叡慮ヲ以被仰出候義ニ
付 朝命之通拜任可仕旨右御同人書付ヲ以被相達候其
後二条御城へ罷出候節坊主部屋詰所御礼等之節八万石以
上之席ニ^而申上候

三二一 戸田忠至忠勤についての覚書（安政五年）

私義養家^カ離縁後文政十三寅年中 上之御人別ニ^而御

分米代^カ壹ヶ年拾六兩被下置福井宗藏外ニ中間^カ人御附被
成下罷在候処其節間瀬家幼年ニ^而私実姉^并甥共難渋之躰
難見捨^而同家へ同居仕候処乾光院様御在城之節日々又
^者隔日位ニ御機嫌伺罷出度々御咄し之節養家ニ^而難渋仕
候次第被及御聽 乾光院様御意ニ^者其方^者又々養子ニ
参リ候心得哉と御尋ニ付私申上候二^者是迄之養家ニ^而種々
艱難仕又^者耻辱ヲも度々與へられ候間何卒今一度養子ニ
被差遣被下候^者 御当家様御名も顯し候程之精勤ヲ尽し
次ニ^者私義も是迄耻辱ヲ與へられ候面目ヲも相雪キ度奉
存候間何卒如何程下輩之処ニ^而も宜敷御座候間又一度御
直参へ養子ニ被遣候様ニと申上且又 隆松院様ニも毎々
被仰聞候二^者御同方様ニも御病身ニ^而 公義之御役ニ
も不相立候義恐入思召何卒輔私一郎右衛門殿此三人之内
ニ^者 公義之御役ニも相立候様ニと常々被仰聞候義も有
之候間再ひ養子ニ被遣候様ニと申上候処其後間瀬家へ同
居追々永引私義容易ニ難手放甘^カ廿歳^カ廿五歳迄同居仕其
後も 御在城之度毎ニ折々御噂サ被遊且又其節之御重役
戸田三左衛門殿ニ^者格別懇意ニ仕時々出会夜話等之節被

申候^二者 御当家ニも大臣之列少ク且又身ニ入候^而御奉

公相勤候ものも人少^二而常々心細ク被存候間幸ひ私義当

時爰元^江罷越居候処間瀬家之義老人子供其外扱ひ向朝暮

之深切之段致感入候間何卒御家臣ニ相成候様左候得^者

御家之御為御先祖様へ之孝道ニも相成候間養子之義^者思

ひ止り御家臣ニ相成候様ニと度々異見同様後^二者出会之

度每位ニ被申聞私義も追々^者相嵩ミ間瀬家之処も急々

手放し候事ニも参り兼候間三左衛門殿異見ニ随ひ又^者乾

光院様度々御意之御様子も御家来ニ被成度思召ニも可有

之哉と奉恐察候間養子ニ再ひ参り候義ハ思ひ止り御家臣

ニ可相成と奉存候へ共隆松院様御遠行跡之義ニ付其節堀

丹波守様御隠居興廉院様前永井肥前守様奥方様^者私幼少

之時分^方格段御愛憐も被下置候事故私御家臣ニ下り候義

如何可致哉と御相談申上候処御家臣ニ相成候義暫見合候

様被仰聞候間私^者不相願候へ共追々^者相嵩いつ迄も

此姿^二而罷在候^而者身分之極りも不相付候ニ付如何様ニも

御取極メ被成下置候様申上候処天保四巳十二月御内意之

趣も有之候ニ付御宛行二百石被下置御取次上席御家来並

被仰付候段御達ニ付難有奉答然ル処其後追々結構被召仕

候処天保十四寅年間瀬家相続人忠勤可仕と奉存候処相絶

候ニ付私義同家相続被仰付誠ニ以奉驚入候次第元^方他家

相続仕候位之義ニ御座候^へ者何れニか養子ニ罷越陪臣ニ

下り候義^者隆松院様御在世中之御言葉ニ奉対候^而も御請

難申上候処全ク戸田家相名乗り候義則 君家御繁茂之次

第二も御座候間乾光院様思召ニ随ひ陪臣之身分ニ下り候

義ニ御座候

乍去右ニ付其節も同役中嶋董九郎ヲ以段々趣意戸田三左

衛門殿^江申上何卒間瀬相続御免被成下候義^者出来間敷哉

と品々申上候処一旦被 仰出候君命之義ニ付兎ニ角御請

申上候様戸田家之義^者追^而思召し等も有之候段被申聞候

ニ付其節私義も篤と覚悟仕世之中之望ミ更ニ相断子只々

御先祖様へ奉対為國家之生涯忠勤ヲ尽し相果候^方外

ニ余念無之義と覚悟仕候義ニ御座候然ル処嘉永四亥年不

存寄二百石御加増被下置難有仕合ニ奉存候其後昨辰年被

仰出候^二者 靈珠院様御幼年^方格段忠勤ヲ尽し尚又

当君公御幼年ニ^而御補佐申上候段心配之義と被思召御加

増も可被下置処御含之義有之候ニ付此度不被及其御沙汰御家老上席被仰付候段被仰出重疊難有仕合ニ奉存候然ル処私義間瀬家相統不被仰付戸田家ニ罷在候ハ先亥年被下置候御加増永久戸田家之知行ニ相成第一 君家御枝葉之戸田姓繁茂仕永ク御当家大臣之列ニも加り可申左候へ者私義も陪臣ニ下り候も君家之御枝葉繁茂仕り候へハ乍恐 御先祖様又者隆松院様へ 奉対候も孝道之苞ツニも奉存候且又乍恐 当君公ニも御家之御枝葉繁茂致し候様ニ御取扱被遊候社御孝道之筋と奉存候尤間瀬家之義も古今御由緒も御座候家筋之義ニ候へ者重モク御取扱被下候義ハ重疊難有仕合ニ奉存候へ共 君家之御枝葉為間瀬家ニ大臣之列ニも不入罷在候而者間瀬家代々之亡霊恐入不快義ニも可存又當時私間瀬家相統仕候へ者君家之御盛榮ヲ日夜朝暮心掛ケ候義第一之義ニ御座候然れ者本姓戸田家當時私伴ニ御座候得者父子之間柄等ヲ以愛情而巴ニも遠慮仕候而者誠忠之之筋ニも無之候間無腹藏申上候乍恐御先祖様御血統も御座候もの之義ニ付君家之御枝葉何卒大臣之列ニ加へ被置候者當時鍾太郎ハ未熟も

のニ而も後々御用立且又戸田輔私兄弟ニ而最初被召出候節者格禄共同様ニ被召出候処私義大臣之列ニも不入者全ク間瀬家相統之為ニ而御先祖様へ奉対候而も何共不本意至極又隆松院様御在世中御相談之上之御所致ニ候へ者格別左も無之為天命御先祖様之枝葉大臣之列ニも御入被置候者御孝道之一端ニも可相成外諸侯方ニ而者君家之枝葉家臣之列ニ被加候時者夫々附屬之家来も御附ケ被成候哉ニ承知仕候然ル処私本姓大臣之列ニも不入時者譜代家来も不被召仕家筋ニ相成候義私間瀬家相統仕候故之義ニ而呉々も 御先祖様又者隆松院様へ奉対奉恐入候間何卒前段之通百石配分仕都合三百石ニ仕度又間瀬家之義も百石相分チ候へ者都合七百石ニ而同家相統仕候勤功も相残り難有奉存候昨辰年御達ニ御加増も可被下置処思召御座候而不被下置候段被仰出万一此後御加禄等之御沙汰も有之候者実ニ奉恐入候間幾重ニも奉辞候心得ニ御座候間何卒亥年中頂戴之御加増高二百石戸田家間瀬家へ配分仕度奉存候尤此義も当節奉願候筋ニ無之戸田鍾太郎追而同居引分れ之節奉願候義ニ御座候乍去私義も五十歳ニ相成万々一

死去仕候義も御座候者何卒養子へ家督被仰付候節戸田家へ百石間瀬家へ百石被下候様仕度奉存候此段兼而各様迄御内意申上置 君公達 御聴被下置候者其段私義も本願書認置安心仕候而弥忠勤ヲ尽し候心得二御座候將又一舛分知之義者ハ不容易御法ニ候へ共外一ト通り之訳合共違ひ戸田家之主人間瀬家相統之義者不容易事ニも有之処被仰付且又 君家枝葉之義ニ候へ者以思召左之振ニ被仰付候へ者外ニ差障り之筋ニ者相成間敷ト奉存候

近キ御由緒も有之且実父間瀬和三郎願之通先年同人江被下置候御加増之内百石其方へ分知被仰付都合三百石高二被成下候段被仰出之

譜代家来被下米者私戸田姓ニ而亥年御加増頂戴仕候へ者其節被下置候義当然之事ニ付何卒外三百石並之通被下置候様仕度奉存候斯本姓戸田家之義申上候も自己之勝手合之様ニも御汲取可有之と心配仕候へ共聊左様之義ニ者無之 君家之御為深ク心配仕候而申上候義ニ御座候其訳者

後年 君家之御枝葉私如き之身分之もの有之候節私之列ヲ以同様之御取扱被成候而者実ニ 君家之御枝葉繁茂不

仕御家臣二下り候者も無之又異姓之御家来共心有ル者考へ候而も 君家之枝葉サへ右之通之御取扱ニ而者異姓之臣下者尚更御取扱も軽々敷事ニ者有之間敷哉と相心得自然忠勤之励ヲ失ひ可申聖人も其親ヲ不愛シテ他人ヲ愛スルものハイ徳ト言ト申候へ者其親ヲ愛スルヲ以先ト被遊候杜御本意之筋と奉存候私本姓殊ニ父子之間ニ拘り甚申悪き次第第二候へ共無抛申上候万一私之為ニ申上候様ニも思召候而者恐入候次第二付強而者不申上候此段無腹藏右御内意申上候

(表紙)
〔岡谷文書 六〕

岡谷文書 卷十六 目次

嵯峨實愛ヨリ 戸田忠至へ 壬月八日

全 全

全 全 六望

全 全 六月十七日

岡谷文書 卷十八 目次

大原重徳 <small>ヨリ</small>	戸田忠至 <small>へ</small>	後五月朔	全	全	正月廿九日
全	全	十一月十五日	全	全	三月朔
全	全	五月廿一日	全	池田茂政 <small>ヨリ</small>	全
全	全	十二月六日	全	大原重徳 <small>ヨリ</small>	全
全	全	五月四日	全	全	全
全	全	後五月十九日	全	全	全
全	全	十二月五日	全	高松保實 <small>ヨリ</small>	全
全	全	十一月十六日	全	坊城俊政 <small>ヨリ</small>	全
大原重徳 <small>ヨリ</small>	戸田忠至 <small>へ</small>	三月五日	全	岡谷繁實 <small>へ</small>	全
全	全	十一月廿七日	全	戸田忠至 <small>へ</small>	全
高松保實 <small>ヨリ</small>	岡谷繁實 <small>へ</small>	二月廿五日	全	全	全
大原重徳 <small>ヨリ</small>	戸田忠至 <small>へ</small>	三月七日	全	全	全
池田慶徳 <small>ヨリ</small>	全	季春念九	全	全	全
大原重徳 <small>ヨリ</small>	全	七月廿一日	全	全	全
全	全	七月廿一日	全	全	全

(以上の目次は半紙本に収載)

(題簽)

「岡谷文書 十六」

三二二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏

月八日

昨日^者御細書被下候処当直參 内中^二御請延引恐入候如貴示煤雨不正之景色^二御座候御揃御清榮奉賀候然ハ内々被示下候事昨日^者愚考仕候処更ニ心当無之候賢察之辺ニも哉とも存候へとも何とも難考得若々右之事ニも候ハ、無異儀訳^二而遵奉勿論之事と存居候若夫ニ付札尋之筋も候ハ、夫ハ問ニ応し可答申外無之候宜御含置奉願候先御報耳一筆敬呈仕候也謹言

壬月八日

二陳唯今退出早々御請斗余ハ期拝面候乱書御推覧願入候也

荒神口様

石薬

内々御答

三二三 嵯峨實愛書翰「(宛先不明)」(慶応元年)

一唯今御示教有之候戸田一件之事如貴諭一橋阿部豊後守昨烏上京肥後守義^者今日帰京之趣ニ候間幸之義ト存居候事ニ存候右^者過日来兼^而御噂^サ申入置候通豊後守ヲ説得致

し試度ト先日來愚存致シ居候義ニ付今度^者よき機会と存居候如才なく精々尽力之覚悟ニ候御示之三ヶ条^者委細承候家領旧復之義^者速急^二難運と存候へ共先ツ差向所替之義猶豫之運ニ相成候様説得再三可試と存居候一昨日も大和守入來^二而其辺申次ヲ以精々可令心配と答置候事ニ存候不惡^〱御含可給候

三一四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 六

月十五日

(封)

戸田大和守殿

實愛

口述

今朝関白殿へ參上仕候処面会御理ニ付巨細書付申入候処別紙之通答命御座候間入見參候小生^方申入候趣^者昨日御談申承候通何分 山陵御用御賞ニ旧復之処殿下方御直説被下度若どふしても急遽難相運候ハ、先差懸り所替之事今一応幕方沙汰有之候迄ハ可致猶豫旨幕命出候様御懸合

被下度段申入候事ニ御座候且此程以武伝被仰出候儀御催
促被下度旨以上三箇条相願候事ニ候別紙御覽濟候ハ、此
人^五御返し被下度候他事も有之少々入用故申出度存候且
又天璋院一件今日陽公へ參入可相願積リニ^而有之候処同
公今日面会差支候由ニ付今日ハ未申入候左様御承知被下
度候何も当用斗早々不典

六望

和州君

實愛

三二五 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)六

月十七日

御手簡之趣敬承仕候残暑甚敷候処愈御安全奉賀候然ハ今
朝以山善被示下候儀其節御返答申入候通水戸之儀御書載
ニ^而者六ツケ敷可有之哉右之所御勘弁之様仕度且久世を以
殿下へ御申入可然尤久世へハ小生^も篤可申談御返答申
入候通ニ仕度と存候其儀難被行候ハ、所替猶豫幕令早々
下り候様尽力之方可然と愚考仕候先初段ニハ旧復之方申

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二二)(原島・松尾)

立其次之段ニ所替と仕度存候小生ニハ此見込ニ^而可申談
心得ニ在之候扱大坂^も申上候趣示給驚入候右之模様ニ^而
ハ猶更所替猶豫幕命ハ何レニも速ニ出候様今日精々可談
申候明日ハ山陵掛へ右御申入之由可相成^者今日早々御參
内申入被下度候左候へハ御評議且一会白^(采力)とも參内故都合
宜と存候此段御答申入候実々切迫扱々苛酷成事と存候右
所替之処ハ何分ニも幕令迅速出候様ニ周旋仕度此段實報
早々如此御座候也

六月十七日

緘

實愛

三二六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月六日

(封)

戸田大和守殿

實愛

今朝御細答被下候処取次之者間違御座候^而御返答ハ跡^も
と申事ニ承知仕先刻又々長州書付申出甚不都合恐入候唯

今御返事之事承り御書拝見仕候事^二而大^二不都合御断申入候尾書と申上候段全心得違^二而乃長州之書付^二御座候御心配相成御断申上候

一殿下へハ何レ一兩日再参上可申入候

一越州公上下艱難^二付^而ハ俱^二被^二経^二辛苦候御趣意御尤^二

感伏只々悲憤之外無御座候乍去至当之御処置^二而何共

申詞無之候

一浪花之儀此方^二而も相分り候ハ、早々可致啓上候

一葛廻之事承候

右前書之儀御断旁荒々御請如此御座候以上

六六

戸田様

御再答御無用

正三

三二七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」閏月十六日

尚々会へも可申入候只今取紛荒々乱書御断申上候也

拝見仕候御揃御安全奉賀候然ハ御別紙儘^二拝受後刻殿下へ可申入と存候御案文之通^二可仕候昨日退出後書試置候も凡大同小異^二候へ共尚御案之趣至極宜かるへくと存候間認改可申候今日^者無余義儀^二而程なく出門前殿下へ参上候間午刻迄ハ留守中^二御座候此段御報如此候也

壬十六

實愛

三一八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月二十二日

今日ハ快霽仕候愈御揃御清迪欣賞仕候扱昨日ハ小童着袴内祝^二付色々御祝被下御鄭重之御事恐入候併幾久敷愛度拝納奉多謝候又右^二付御出相願御苦勞恐入存候乍去光臨被成下賑々敷相祝候段大慶御札申入候尚又拝時万々可奉謝上候扱其御拝見之一刀至極之品^二而実^二懇望仕候間御讓被成下度奉願候実ハ折角御取入レ之御品拝受も恐入候へ共御命^二二任七御讓奉願候扱又藤鞘卷之事御心配甚以恐

入存候右ハ御由縁御尤之御儀正返上仕候間御入手願入候
幾久敷御佩用之方於小生も安悦仕候中身も幸相応之身ニ
而御鞘ニも相当仕候故此候御用被下候ハ、本懷大慶仕候
御鞘ニ応し候中身又々急ニハ在之間敷哉とも奉存候間此
候御用幾久敷御佩帶被下候様奉伏願候書余期拜時申略候
昨日之一刀ハ最早拜受仕置候仍早々如此候今日ハ取紛居
大ニ乱書御断申上候也

四廿二

和州様

正三

三一九 高松保實書翰「高松實村宛」(慶応四年) 正

月二十六日

今廿六日午刻過為 勅使武者小路少將入来有之実村脱
走御評議中之折柄此別紙之通從若州昨夕届出候由右_者甚
朝廷御差支ニモ相成候ニ付早々可引戻旨_江被
仰付候義御請不申上時ハ朝廷ヨリ被引戻候旨ニ候

右議定長谷三位被申渡候旨候早々可有帰京者也

正月廿六日

保實

左兵衛権佐殿

三二〇 高松保實書翰「岡谷繁實外二人宛」(明治二

年) 十月四日

追申 中宮供奉ニ当家油小路局罷在り候ニ付其供方ニ差加へ岡
勘兵衛差下し候御三傑御尽力被遺速ニ勤王成功之場ニ立至り候
様御丹誠願入度候石願入度以愚翰厚歎遣候也

一 翰啓達候寒冷増加候弥御清寧珍重候陳_者去九月廿三日
御差立之御返書十月三日当着忝披見候開墾之御宿願先以
御願濟ニ相成候段幾永久祝着歡喜々々嚙々御本懷察入候
勤王之大貫_者此時勢実ニ開墾ニ可有之御尤御同意ニ存候
早々御成功ヲ神祈候將亦右ニ付御三傑_江厚願入遣候彼江
湖新開之儀_茂昨年八月於會計官ニ一旦御聞濟之事ニ_者有
之候得共其後民部官ヲ被置候ニ付亦々民部官_江願直しニ
取掛り居事ニ候尤表立願入ハ岡勘兵衛卜申候用達共ニ有

之候外二百姓も有之候此方儀ハ發起ノ隊長ニ有之候然所此比承候所大藏省ヲ被置元會計官ニテ御聞濟之事件ハ惣而右ノ大藏省ニ於テ御取扱ニ相成趣キニ承候何分去ル七月願人ヲ民部官江差出し候所大津県ヨリ添願無之^{而者}難取扱ニ付早々大津県ヨリ添願ノ事県令朽木李允江段々相願候所承知ニ^者有之候得共当節大無人ニ相成居折柄逆も開懇等ニ手引ケ候儀ハ迷惑ニ付暫ク相延し置候様ニ申聞ラレ誠以困入居候右一旦昨秋御聞濟ノ上ノ再願ノ事故何卒可然官中江御手入被下大津県江民部官方ヨリ御内論相願速ニ運付候事ニ御尽力願度候此段再三願迄願人岡勘兵衛差下し申候間御周旋願入候也

十月四日認

岡谷 大三傑
菅谷 門倉 内急用

高松正三位

(封)

秋元侯家老

岡谷鉦吾殿

用書

人貫齊

三二一 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十一月十八日

(封)

秋元侯家老

岡谷鉦吾殿

用書

高松三位

向寒候弥無御障玆重存候誠ニ過日^者得懇話大慶不少候其後之模様柄御咄しも申入度且外ニ相分り候廉も有之候ニ付毎々午御苦勞今明之内昼後蒙光来度候此段及御頼候也

十一月十八日朝

尚々小沢一仙御同伴相叶候ハ、一入忝存候事ニ候明昼後不苦候ハ、御同伴被下候運ひニ御頼申度候也此染筆物乍見苦認進入申候也

三二二 高松保實書翰「高松實村外五人宛」(慶応四

年)正月二十八日

口述

朝廷御沙汰ニ^而是非共ニ急ニ一先ッ帰京無之^{而者}重キ御咎

メニ相成父迄御咎被 仰出候旨ニ亦々御沙汰ニ付何卒々々

一先ツ帰京有之候事ニ是非々々可被致候無左候得^者

御所表^ら引戻し之人数被差向候由誠ニ恐入候訳ニ相成候

ニ付再三飛脚差立申候もの也

辰正月廿八日卯刻

甲府或ハ信州歟

左兵衛権佐殿

高松三位

保實

小沢一仙殿

岡谷鈕吾殿

増田要人殿

真田求馬殿

守屋靱負殿

其外一同^上

三三三 高松保實書翰「岡谷繁實・菅谷淡路守宛」

(明治二年) 四月十四日

追申夫々別紙ヲ以書面認差上度候所何歟^{乍平安}大混雜^{乍平安}無人多用無寸暇
取紛レ居候ニ付万々宜々申願度候此上御尽力被下候事ニ願上候

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二) (原島・松尾)

也

四月七日出御用便同月十三日宮中弁事御役所^ら来着忝正

ニ披見候先以御清安御勤役祝着不過之存候誠実村今般其

御表^上御用召ニ付罷下候万端之事願入遣候所御心能御承

引被下忝存候偏宜願入申候乍去不日ニハ奥羽巡察使ニ御

随從御出張之由何共残念之至ニ御座候但シ晴天統キニ付

道中も無滯必定昨十三日ニハ 其御表^上着仕候事と祝

察致し居候此書状乍御世話実村へ御達し願入申度候

一木村氏門倉氏其外月岡氏祓郡菅谷淡州加藤神代等へ宜

御伝達願入候

新田家末流

一大嶋伴助是へも宜御伝言万端厚頼入候事ニ御座候事

一何卒正親町三條殿へ此上ナカラ御取扱被下実村事如何

ニも何ソ一方御用相勤メ候廉ノ願上申度候無左候^{而者}

昨年信甲両国貴公折角御骨折被下候其寸功^茂消失申候

形ニ付幾重ニモ今般於東京一役一事御用被仰付候事ニ

是非々々申願度候菅谷氏ニも段々御骨折被下誠ニ忝事

ニ候此上御尽力是非願上申候也

四月十四日

岡谷鈕吾殿

高松三位

菅谷淡路守殿

急用答

二致し置候間若岡谷氏御発向後二候へハ菅谷氏へ御達し被成下候様此段厚御頼得御意候若御兩人共御居合無御座候へハ何卒乍御世話当地^五其御表^五左兵衛権佐殿儀如御案内被罷下被居候間右ノ旅館へ向ケ御届ケ被成下候^而も不苦候此段御頼迄如此御座候已上

四月十四日

三三四 高松家執事書翰「秋元中屋敷詰合中宛」(明

治二年) 四月十四日

(封)

秋元刑部大輔様
御中屋敷御詰合中

高松家
執事

御急状添

(封)

三三五 高松家東江州館入党(慶応四年) 七月二日
斯波弾正殿
要用

高松三位

覚

以手紙得御意候追々薄暑相催候所弥御安福被成御勤仕珍

重之御儀二奉存候然^者別紙急御用状一封岡谷鈕吾殿^立差

向申度候所此比奥羽巡察使二御随從何時となし二御発向

之程難計由二伝承致し候二付自然御発向後二相成候節ハ

御開封も難相叶哉と案候吉見太神宮神主菅谷氏と御兩名

一、東江州小川村

庄屋 清七

同 垣見村

友左衛門

鉢光寺村

久右衛門

山路村

九兵衛

川南村

三右衛門

本庄村

大治郎

稻葉村

孫右衛門

新村

九介

已上

右弘誓寺殿々御引附高松家江館入ニ相成御座候事

辰七月二日

三二六 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年)七

月二日

追申弘誓寺ヲ差除候事ハ決而難相叶候矢張弘誓寺ヲ以御談込被下
度候又ハ何ソ外ニ御工風ノ口有之候ヘハ入ニ存候岡勘平も此
比ハ下坂中ニ御座候此手筋斗ヲ心当ニハ致しかね候次第ニ被察
候事ニ候彦根筋ハ差支ニも相成候哉御考可被下候且又岩倉八千
郎ハ帰京ニ相成候ヘ共今一人跡ニ被相残候間矢張埒明不申候万々
歎息候其内得面話申承度候也

嗚々於其許も万事被困居候半と千察候也會計官者大弘底ノ由此比
同列共給禄蔵米取ノ聲今以不相渡候ニ付いづれも及難決居候事

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二) (原島・松尾)

ニ候当家も則蔵米取ノ身分ニ付甚困入居候也

秋炎難凌候弥御安泰珍重然者過比来一応御面談度候
所何分厳暑殊ニ日々無寸暇繁務ニ罷在候ニ付乍心掛延引
ニ相成候段及御理度候彼ノ承ノ一件ニ候則無残方尽力候
得共有力之銘々形勢ニ氣後レ候故歟金札ニ被痛候込歟甚
疲労之様子出財致し呉かね候ニ付今日ニ相成候上嚙御待
かねニも可有之哉と存候森嶋米三郎儀も過日面談致シ相
咄し置候ヘ共猶又其後如何体ニ丹誠ニても盆前之間ニ合
不申候將亦当方逆も此別帳扣書共御一覽被下御諾察頼上
申度候此盆前是非二百金位ハ無數而も才覚不致候而ハ中
元ヲ難越候ニ付御同様ノ始末ニ有之候間此東江州小川村
弘誓寺ノ手引此八ヶ村当家ヘ館入ニ致し置有之候故此村
方ヘ承候事御談込被下候而者如何哉其拍子序ニ当方も盆
用相整申度候也

七月二日夕

斯波彈正殿

内啓

保實

三二七 (差出し人不明書翰)「高松保實宛」(慶応四

年) 四月十四日

高松三位宿江

急用

秋元但馬守殿唯今被謹慎候旨被^(免脱力)

仰出候此段斯波彈正

へ艸々申遣し可申候者也

四月十四日

追而嘸々畏入と察入候也先刻福井丹波帰京万端都合宜

方ニ存候也

三三八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年) 八

月二十二日

(封)

東京

岡谷鈕吾殿

京都

高松正三位

八月廿二日認

絨

本文之通御合置頼上候保實者是非開懸掛リニ被仰付候様願度候又

実村^者東京ニテ今再度御用何成共為相勤度候深御周旋被下度候先

ハ御恩謝印迄ニ不取敢以書状此由申願遣候也

為厚謝一翰啓達候時分柄秋冷相加候弥御安全珍重存候誠

去四月已來長々實村其御表^江 御用ニ付罷出居候所不一

方御世話御深切被成下千万忝存候全依御憐抱万々都合能

御用濟ニ相成首尾能御暇道中も無川支去十八日未刻

帰着致し候此段御安心願入候右在逗中^者菅谷氏門倉氏其

外殿方ニも御厚配被下御加力ニ預り実ニ忝事ニ存候何卒

宜ニ御礼御挨拶御伝達頼上申候且又今再応東京ニ^而 御

用為相勤度候ニ付深ク御周旋被下度候保實儀も中御門家

方ノ差込ニ逢暫ク謹慎引籠居候へ共去十三日方御免ニ^而

出仕日々参内致し居候定シ右引籠辺差障ニも相成候半と

至極歎入居候へ共無致方次第也此上之所矢張江湖開田ハ

去七月十一日表立願入用達共岡勘兵衛ヲ以其御表民政部官

江向再願為致候処^{去辰秋京都會計官ニテ} 民政部官ニ^而も先願之通

り御聞濟ニ可相成ニ付御取調ニも不及候由但し大津県方

添願書艸々可差出左候へハ取掛リニ相成由也

八月廿二日

緘

東京

岡谷鈕吾殿

内急謝章

京都

高松三位

(封)

御家老

斯波彈正様

白ニテ

御扶助米四斗三升五合添

糠も添申候

封

三二九 供・警衛人数覚書

(朱書) (前文欠乙)

部止宿等用意ハ整ひ居申候也

一供人数廿八人

右ハ心得居申候

外二

警衛ノ人数別段ニ

右ノ外ニ廿人余リ付居事ニ承候此分如何哉尤膳部向ハ申
付置候へ共引取方之儀ハ着宿ニ^而も可致歟亦当館内ノ止
宿歟又近隣ノ理正院ノ里坊明キ居候ニ付夫へ成共止宿ニ
可取扱哉とも存候事

三三〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年) 閏

四月二十二日

覚

閏四月廿二日

一黒米五斗分

此白米四斗三升五合

つきちんなし

高松御殿様

斯波彈正殿

保實

印

前略扱ハ内国事務総督徳大寺大納言江実村信甲両国鎮定
之詰問札書附リ歎願共無滯落握ニ相成不遠内勘考被致具
候旨ニ付一同得力居申候此段早々及吹聴候附^而ハ從臣一
円附屬等ニ到迄夫々勝手次第出歟可宜と存候猶又心添可
被下候乍去太政官昨日方俄ニ転変禁中^江被移候事故一兩

日ハ至テ混雜之由ニ相聞候間一兩日ノ所見合セ可然哉御聞合可被下候

一随テ為扶助米黒壹俵但し五斗入

右白米ニ為踏上ケ糠ともニ其旅宿^江和泉屋小兵衛^五差送り候様申付遣し置候間当着次第無心置可被食用右ハ誠ニ寸志印迄ニ謝遣候事候也

後四月廿二日

三三一 高松保実書翰「岡谷繁實宛」(明治二年)三

月十七日

(封)

緘

(ウ) 三月十七日夜燈下認之

(オ) 秋元但馬守侯御藩
斯波彈正殿

高松三位

急御用筋

前略陳者去月十五日行政官^江其許殿儀被召出候旨誠以御

同慶至極ニ存候右御款厚申入度候事

一 実村義茂段々昨年御出陣已来不一方御懇志被下厚忝存

候昨九月八日漸出仕ニハ相成候得共勤王之程貫徹も不

致只々残懷ニ罷在候但シ今般 東京ニ御評議御用之

筋有之老輩五六輩壯年血氣之輩五輩等被 召候其員之

中ニ 実村儀も差加リ来ル廿九日卯刻此表発足道中

東海道十五ヶ日 之休泊割ヲ以 致発向候間四月十三日ニ 者必品川^江參着ニ可

相成候条格別御懇志ヲ以 御用透も候ハ、万端ニ付

御談合為致度外ニ此度召具候供方ノ内ニハ職者學者共

不居合依之其許殿ヲ御頼と為致候故訳テ御心添頼上候

御恩澤ハ不打忘候ニ付可相成ハ昨年信甲両国鎮撫之微

力相顯レ候御取持方幾重ニも願入存候何卒甲府ノ滋印

卜御仕替歟信州伊那県之北小路卜御仕替ハ不相叶候哉

附属人^茂多分ニ信甲両国へ居合候事故訳テ御取持願入

度候事

一 御主藩秋元刑部大輔殿^江此度ハ其許殿ヲ御頼ニ相成段

表立右御掛合候所御領掌ニ相成候ニ付一入万端宜願入

度候書外ハ実村^五御直ニ歎立可申儀ニ候増田要人守屋

北大路左京小沢其外藤井清記など御馴染斗付遣し候深
御周旋被下度候也

三月十七日

保實

東京^二而
斯波彈正殿

急談

三三二 高松保實書翰「(宛先不明)」(慶応四年) 三

月二十九日

久々勤務ニ取紛罷在不相尋甚疎遠不本意ニ存候追々暖
和ニ相成候弥御安福珍重賀入候併腫物ハ如何哉嘸々困と察
入候段々順発ニも候哉此比^{而者}二^{油斷}藥湯^茂時宜と存候精々無
由段加療祈入候

一誠当方逆も何とも埒明候廉無之今以同様之仕合^{而已}ニ
罷過候乍去此比ニ到テ漸相分り候件々も有之哉ニ相聞
候ニ付段々心添諷諫等致し呉候有志勤王共不少然ル所
長藩 木戸準一郎旧名桂小五郎

薩藩 小松帶刀

大久保一藏

右三傑ヲ以信甲両国鎮撫之始終ヲ

天朝^江申立ニ相

成時ハ必定顯功ニ^茂相成且速ニ^{実村參}朝之場ニ^茂立至
リ跡々御用^茂相勤候運ニ可相成由ニ候左^茂無之候而ハ何
分ニ^茂岩倉父卿副総裁職ニ付一切当家之儀ハ 奏聞
ヲ取留メ被居候ニ付他人^左披露之事深被差扣候旨ニ有
之候仍右薩長両藩ヨリ申立ニ相成候時ハ不得止岩印^茂
披露ニ被致候外ニハ被致様も無之筈ニ相聞候依之則薩
ノ小松帶刀ハ從來別懇ニも有之候間深頼入帶刀^左大久
保一藏ヲ取込候工風ニ手配リ相整候乍去長藩木戸準一
郎ノ所ハ未手筋無之哉如何候哉尤長藩逆も穴戸杯ハ從
來別懇候其外只今登り合ハ不知向斗ニ相聞候此木戸準
一郎ノ手筋若有之候ハ、早々御手引被下度候秋元候ハ
格別不被為外御間柄と存候何とか工風頼入度候
一正親町三条家も此比浪花表 皇居^江向一応為何被罷下
候由ニ承候可相成ハ其已前被罷向前大納言一応為談込
頼入度候何卒々々兎角全快ヲ祈入候事斗ニ候小拙儀ハ

連日 行幸御留守中之護整之惣軍隊長ニ被任甚無寸暇罷在候事ニ候少々得閑刻候迎疲勞^而已何等之并用も難出来只眠居候斗ニ付成文^ケ工風ハ付候へ共加力人無^之而ハ難行屈形ニ候併腫物ニテハ誠ニ被困居候半隨分尽力加養願入也

三月廿九日

追申此龜菓到来合セ申候ニ付見舞ニ差廻し申候外ニ龜末ノ一封相添置申候乍聊白穀^セ袋薪少々定吉手透ニ持運セ候筈ニ申付置候旅宿ノ模様如何候哉と案し居心ニ掛り居候ニ付何成共入用ノ品ハ遣し申度候追々可及下知候也

三三三 高松保實書翰「宛先不明」(慶応四年) 三

月二日

尚々万事都合宜候ニ付主従とも可有御安心候也

清記事殊之外足痛メ申居見合居ニ付此福井ヲ遣し候也

(朱書)(装カ)

誠今日吉辰ニ付凱陣帰京祝着不過之候右ニ付行莊振之事

ハ則今朝林蔵ヲ以早打ニ差立候通凱陣之帰路ニ付尤軍莊可然諸家も皆々軍莊ニ^而是迄相済居候軍事ニ先箱等ハ却^而見苦敷候由ニ候仍網代與^并先箱等^{長柄とも}ハ不差廻候間乗馬可然候也

三月二日

三三四 高松家納戸書翰「高松實村參謀宛」(慶応四年) 三月二日

年) 三月二日

(朱書)(前文欠)
則秋田屋敷^カ馬式正差向候筈也

尤五日 行幸御延引之由ニ付今日七ツ半時迄之京入ニ相成候へハ尤宜候其段篤と軍莊ニ仕立上ケ支度飭り出来次第可有帰殿存候也

三月二日昼過

(封)

左兵衛権佐殿
參謀中

高松三位殿
御納戸

急御用

(題後)

「岡谷文書 十七」

三三五 戸田忠至申置覚「(宛先不明)」(文久元年)

申置覚

一自分五十^三才ニ相成追々余年も無之万一死去候義も有之候へハ跡々之もの心得違有之候^而者家之混雜ニも相成候間寸暇ヲ見合書置もの也

一鍾太郎へ申置候自分幼年之時養子ニ参り十々年之間^(銀也)歎難苦勞中々難申尽右養家離縁ニ相成候後 上之御

人別ニ加り御厄介之身となり候処其節間瀬家^者姉常身院殿兩人之子供斗ニ^甥而甚歎ケ敷事ニ付 上之御厄介

中姉常身院殿ニ力ヲ添度兩人之幼年之甥ヲも養育致し度廿一歳之時宇都宮^江参り夫々段々長逗留ニ相成常身ゐん殿之御難義^并幼年之甥難渋難見捨足ヲ留メ候内間瀬家類焼弥以難見捨右類焼之ふしん出来候処自分廿五歳ニも相成候間公義御旗本ニも養子ニ参り度と存候処乾光院様ニも是非御家臣ニ下り候様度々御意有之仍^而

無摺御家臣ニ下り天保四巳十二月御取次上席御宛行式百石被下置御家来並被仰付右ニ付其後日夜朝暮忠勤之志無怠精勤いたし御用人御番頭追々被仰付候処間瀬家甥兩人共致病死折角丹精ヲ以成人致し候もの右之通相成愁傷不少跡間瀬家之義外々々養子も致し度ト親類中相談致し候内 上之思召ヲ以自分義間瀬家相統被仰付実ニ驚入奉恐入候ニ付間瀬相統之義強^而御断申上候へ共何分御取用ひ無之戸田家相名乗候^者暨陪臣ニ下り候共無摺事ニ御座候へ共間瀬家相統候^而者実ニ残念之義ニ候へ共君命之義無摺御請申上候乍去国家之御為ヲ存し候義^者相替義無之忠勤ヲ尽し弘化元辰年御家老職被仰付夫々日夜之勤勞其元ニも幼年之時々見請候通ニ御座候自分生れ候^而者五十三才迄国家之御為ニ心志ヲ碎キ候義^者不少候へ共寸時も自己之慰又^者自己之好物等相求メ候義無之日夜謹^而勤勞いたし候間追々御加増等被下置間瀬家も先知千石之禄ニ相成戸田家其元ニも三百石被下置候義若年之其元之力ニ無之全ク自分勤勞ヲ御賞し被下候義ニ付其元ニも深ク相慎ミ難有君家ニ

精勤いたし父之志ヲ続自己之慰ミ又^者好器等ニ金銀ヲ費し不申節俟^者ヲ守り君上ヲ敬ひ一藩之諸臣ニ無礼不致聊^二而^一も我俟之志無之樣能々可心掛其元生れ付愚昧ニ其上自分御役中故右之子ニ候へハ諸人敬ひ候間自然奢りも出候義自分死後^者諸人もかまひ申間敷甚歎ケ敷事ニ存候間何卒諸人之付合深切ヲ元ト致し都^而人情ヲ厚ク心掛ケ可申候事

一其元^二者^一御用人役抔勤り候義ニ無之君公御血筋も有之候故重ク被召仕候義甚恐入候事ニ有之且^者當時^者斯天下治乱混し候世の中別^而上ニ立候御役人^者肝要之義ニ付其元抔相勤万^一君上之御不徳ヲも[※]生し候^而者^一奉恐入候間自分死後^者千駄ヶ谷へ罷越丈ヶ之弓馬稽古人之世話ニ^而も深切ニ致し其元俾生質相応ニ候^者御用立候様仕込可申生質愚昧之ものニ候^者お貞ニ人物亘敷ものヲ養子ニ致し往々国家之御為ニ相成候様可致

一宇都宮^江引越候^者間瀬^江四五年^者同居いたし追^而本宅相願引分れ候節^者常身ゐんどのヲ御頼申上当分家事之御世話相願候事

一其元家之道具類自分間瀬家相統之節売拂候間當時間瀬家在合之道具少々ツ、引分ケ其余^者間瀬家之入用ヲ以調候^而可然事

一方之丞義^者其元方へ引取置文武等能々仕込相応之御旗本へ養子ニ可遣養子入用等^者兼^而申間置候通ニ候事

一母常身ゐん殿其外妹^并万之助方之丞等都^而深情ニ取扱ひ可申事

一照義^者万之助成人之上夫婦合善惡見極メもし中合不宜候^而者^一往々家事不治基ニ付外へ嫁し可申幼年之時見合候心得^二而^一も成人之上互ニ中合惡敷候^而者^一往々之不為ニ付外へ嫁し候^而も可然筋ト存候事

一万之助へ申間置候事其元義自分養子ニ致し間瀬家相統致し候上^者君上ニ忠勤ヲ尽し母親鍾太郎照方之丞抔へ万事深切ヲ尽し可申其元養子之身分ニ候得^者別^而間瀬家大切ニ可致一鉢其元之心根ヲ考候ニ第一口上と心と違ひ偽りを申又下々召仕ひ之ものをあわれミ候心無之子供とハ乍申偽り之心あわれミの心無之候^而者^一成長之上重き役人^二者^一難相成候弥成長之上右阿条不相改時^者

自分死後家督いたし候共 君家之御不為次ニ者間瀬家
之不為ニ付病氣引込隠居為致候様鍾太郎初其方里方勤
解由殿諸親類江も申談置候間速ニ隠居いたし相應之人
御屋敷内又者他方ち也共養子ニ可致其元之成人迄善惡
不見届甚不安心ニ存候間君家之御為間瀬家之為ヲ深存
候ニ付申置候事ニ候

一 鍾太郎義者自分間瀬家相統之為ニ漸三百石拝領致し候
間同人江一生毎月米壹俵ツ、可相贈事

(※印に続く訂正稿)

生し候而者奉恐入候間自分死後者御下屋敷へ罷越引下り
相應之勤相願候方君家之御為次ニ者自己之為ト存候宇
都宮表へ罷越候義可然筋とハ存候へ共引越彼是入用も
不少候間御在所御宛行ニ而千駄ヶ谷へ住居候様可被致
候人之上ニ立候へ者人々惡まれ人之下ニ居候へ者自然
人之憐ミ有之もの故引下り相應之御奉公相勤候方と存
候

一 自分死後者母ト徳之丞引取置可申尤右兩人扶持小遣間

瀬々米壹俵金壹両ツ、引取可申徳之丞成人之上ハ相應
之御旗本へ養子ニ可遣養子入用者兼而川村へ相頼置候
事

一 其元悴生質相應ニ候者御用立候様仕込可申若又愚昧ニ
候者お貞江養子いたし成丈ケ御用立候人物相撰可申事
一 其元家之道具類自分間瀬相統之節売払候間當時間瀬家
在合之道具少々ツ、引分ケ其余不足之分者間瀬家之入
用ヲ以調候而可然事

一 常身院との母并津田之姉おきの万之助お照徳之丞等都
而深情ニ取扱ひお愛お貞等もよくあいし可申事

一 武芸學問未タ年若之義ニ付随分心掛ケ可申事

一 日々小子拝礼之ケ所其元ニも拝礼可致此義者子孫へも
申伝永ク不怠様ニ致度候右神仏ヲ拝し候趣意者我朝ニ
而ハ神とあがめ奉るハ皆日本六十余州ニ大功之有之御
人之尊靈ニ候へ者其尊靈ヲ祭り神と仰奉る事ニ候へハ
我國ニ生れたるもの尊敬拝して宜敷筋と存候又仏と申
候而者天然二而人ヲ善ニ導引候方々ヲ尊敬して祭り候
事ニ而我朝ニ而も義家公其外古之名將達皆尊敬被成候

義ニ付是ヲ拝して宜敷筋ト存候小子信心致し候義ヲそしり候もの有之候へ共信心者則誠之心ニ而此信之心ヲ神仏ニ誓ひて日夜朝暮不失様ニと心掛候事ニ有之候譬へハ婦人之朝夕鏡ニ向ひ我形チ之不乱様ニと心掛ケ候も同じ事ニ而朝夕神仏ニ向ひ君父朋友杯へ信義之心不乱事を朝夕省る為之信心也必欲情杯之為ニ信心してハ誠之心ニ非ず其所はよく心得違ひなきよふニ致度候尤国家安全家内病患消除者昔之名将達も折念有之候間折念して可然事

大神宮 東照宮 御先祖様 金比羅大権現

秋葉大権現 宇都宮明神 觀世音菩薩

觀喜尊天 弁財尊天 八幡宮 笠間稻荷

多賀大明神 十一面觀世音 妙法善神

方之丞成人之上信心之ケ条

一大神宮 東照宮 金比羅大権現

秋葉大権現 觀世音 觀喜尊天 弁財天

八幡宮 笠間稻荷 多賀大明神

妙法大善神 三社稻荷 忍岡稻荷 瘡守稻荷

青木団八靈 是者水代施主ニ可相成事

一 鍾太郎義日々 殿様上々様ヲ拝し次ニ江戸宇都宮御家老衆是者国恩ニ相成候ニ付小子も日々拝し候間其元ニも同様ニ致し度候如何様之無理成事ニ逢ひ候而も決而上ヲ恨ル事者心得違皆己之不徳と心得而謹而朝夕国恩ヲ拝スへし

三三六 戸田忠至伺書案（宛先不明）

諸陵御再興ニ付年中幣物十陵別貢御惣体惣而国忌御祭り陵頭同官人荷前使參勤料并預り守戸給米且諸 陵御修理料迄取調旧冬差上置候処御沙汰無之然ル処此節追々御普請御出来ニ相成候御場所必預り守戸無之候而者又如元御破壊ニも相成候ニ付當時御出来之御分者何卒給米被下置候様仕度奉存候預り守戸被仰付候様仕度奉存候重タル御方
十陵別貢 旧冬調差上候へ共是迄年久敷御焼しニ相成居候間當時先ツ御見合ニ可然哉
寮頭參勤料 旧冬調差上候へ共是も御見合ニ可然哉尤畝火山之節下下行可被下置候事
寮官人參勤料 旧冬調差上候得共右同斷之事

唐櫃料旧冬調差上候へ共是者御修理料之内ニ而
出来相渡し候方可然哉と奉存候

右之通之御取行ひニ而可然哉と谷森大和介其外者共相談
仕奉伺候尚御賢考之上御差図可被下候已上

三三七 戸田忠至書翰案「秋元興朝宛」

今般其御元之洋行スル則忠孝之道ト思ワレ候義尤之事ニ
付其憤発之念ヲ為遂度存スル故ニ今者早シト止ル也其早
シト云所以者前々追々申述ル通也此処ヲ不聞入者忠孝之
志者難遂事ニ可至必過候事篤と考候様ニ存候タトへ百人
洋行善ト云トモ是ハ一ト通り之考也壺人之親暫時止マレ
ト云者其子之出生ち追々成人之生質ヲ千慮万考之上赤心
ち出ル所也呉々も篤と勘考有之真実忠孝之立ツ様致スコ
ソ洛川公江之孝道と存候

三三八 戸田忠至遺言下書（明治六年）

天地間之万物有生必有死其内不幸ニシテ早ク死スル有又

岡谷文書―幕末・明治書翰類―（二）（原島・松尾）

幸ニシテ七八十百歳ニ至ルもの茂有忠至者幸ニシテ当年
六十五歳迄身体杜健也乍去若年々辛勞多故自然精神之劣
れも有之何時終命モ難計依而忠至死後之義ヲ記し置聞此
所をよく守り必違ふ事なき様ニ致スへし

一從五位三才之時忠至無扨間瀬家相続いたすニ付戸田家
之方者右三才之小兒家主となり依而小兒之只成長をの
ミ心掛ケ日夜両親にて養育いたし遂ニ何事も申俣にそ
たて小兒之好む所者大凡其意ニ任せ候故我俣に成折々
肝氣ヲ發し家内其外江も肝氣ヲ以当り候様にては実ニ
あんじ候間父死後者必肝氣をおこすへからず忠至之靈
前へ百味を備へ祭よりも肝氣をおこさぬ方忠至之靈者
よろこび候間何卒肝氣おこさぬよふニ心がくへし全忠
至之そたて方あまきゆへとはぢ入候事

一出入之人茂能々撰手かたき実意之人と懇意すへし丹羽
正庸江頼置候間忠至死後者此人ニ諸事相談すへし大原
重朝杯も相談してよし諸町人杯者川村之外者附合人無
之又かるき町人杯江者懇意すべからず

一川村へ預ケ金千両之處當時四百兩是を養蚕ち其内百兩

ヲ加へ五百兩にして内三百兩之利足^者母之小遣ニ可遣

一母^者元來病身ニ候間十間川やしき内^正住居心の俣に不

自ゆふなきよふニいたすへし

一照は當時大岡ニ居住^{住方}未熟談繁昌いたせば宜候へ共往々

の所いか、相成哉難計此もの手当^{者兼}而取置候千五百

兩質地証文今度養蚕不作ニ付手放し候へ共何卒近年之

内養蚕ヲ以右千五百兩ハ積戻し川村へ預ケ金ニいたし

候共又^者千五百兩丈ケ之地面ニ^而も買入右之利潤ヲ以

照之生涯之手当ニ差向可申婦人之義^者心もせまきもの

故其元と同居いたし候^{而者}必こまり可申ニ付万一大岡

々もどり候^者年若ければ外へ縁付年寄候^者十間川の内

へすまひ候よふそんし候

一秋元興朝^者其元ニ取候^而ハ男子之兄弟五ニ力ニ可成者

ニ候必諸事相談いたし双方添心いたし兄弟和合候へ

^者忠至美ニ死後之喜ひ是ニます事なし尤秋元養子之身

分故当人迷惑不致様ニ心ヲ添秋元之義ニ付取計ひ候義

有之候^者大原等へ相談其上毛利從三位毛利從五位等へ

相談之上可取計尤其時之次第寄此方へ取戻し候^而も

不苦候事

但取戻ス時ハ秋元之人別ニ致置賄料興朝生涯何程ト

申義篤と熟談之上可取計事

一秋元興朝洋行之義^者当人病身故必可断外国風土かわり

候へ^者可煩第一從四位殿老年禮朝殿長病故遠出候義ハ

不宜殊ニ当人病身故風土変り候所へ参り病ニおかされ

候^{而者}却^而修行ニ不相成且是迄洋行之人ヲ見ルニ格別之

功能も不見未熟之人ヲ外国へ遣し候^{而者}御国耻と存候

間御国ニ^而能々修業可致興朝秋元家へ参り候ハ外ニ功

能無之全済川公御血筋之義ニ付遠方へ不参トモ御国ニ

^而十分修業出来候事と存候遠隔之地ニ^而風土之為ニ病

ミ候^{而者}志ヲトケ候事ニも不至左候へハ忠孝之ニツニ

背き不宜候間此義ハ篤と勘考有之度斯申候^而ハ興朝之

氣ニ不入義トハ存候へ共若氣之存込る必後悔可致ト存

候間申遣置候也

一和三郎義^者生質宜文才モ有之末々頼母數存候乍去格別

壯健ト申ニ無之少々薄手故十七八才迄^者身体養ひヲ專

要ニ致し身体壯健之上諸事修業すへし和三郎義^者必家

をたもつ事安心也忠至之千辛万苦を能々咄し聞せ度候也

一多称義^著何れも欽実直成人物ヲ撰貫ひ請商法^二而も為致往々和三郎方の為に二も相成候様ニ可致炭の見せハ其佻多称ニ遣し候事

一亥五郎義^著鹿園家へ養子ニ遣し候得共成長之上篤と人物ヲ考へ其上^二而三條殿丹羽へも申談候而弥先方へ可遣人物不宜不案心之もの^二而ハ鹿園へ対し不相濟又ハ三條殿^并当家之外聞モ不宜義と存候

一お愛^二者^一從五位肝氣ヲおこさぬよふ^二何分頼候其外子供之事は申迄も無之厚世話いたし母も病身^二而追々年も取候ニ付何分依頼ミ入候お照おき朝も是又頼入候

一お順^二者^一惣領^二而も^一祿少追而融通金出来之上追々都合式百両可遣

一忠至死後神前ヲ作り候事活計相立行末之目途立候節迄^者是迄之神前^二而^一不苦毎朝水ト洗米ヲ備候事其外叮嚀之備物等^二不及^一

其元若年之時は忠至と夫婦二なり子供四人持永々格別

之世話ニ成追々家をおこし候も其元之世話のあつきと又忠至之日夜千辛万苦せしは斯ハなりぬ且子供之身分も夫々かたつきまつ安心之事なり扱又忠至千辛万苦の中ニも其元之心ニ叶ぬいたつら事も有りて其元ニ彼是心配いたさせ候段^者何とも氣之毒ニそんし候忠至存生中のいたつら其元之氣ニ叶ぬ事は何分ゆるし給り忠至死後ハ從五位お照興朝此三人を忠至之片身と思ひ何事も宜よふ頼入常身あんだの追々御年取被遊候間よく心をつけ上ケ候よふ頼入

一聞瀬家之義^著自分一旦相続いたし候義ニ付此上共難捨置左近心得違ひハ有之候へ共其家ハ何れニも行立候様致し遣度乍去當時金子無之来年又^者来々年之養蚕ヲ以左近之借才ヲ返シ外ニ小家ヲ求メ家祿ヲ全ク渡し右ヲ以活計ヲ立候様尤行末之家産も工夫致し遣し度候左近心得違ひ不改ハ隠居為致往々間瀬家之為ニ可相成物養子ニ可致事

三三九 戸田忠至願書案「(宛先不明)」(慶応元年)

昨年中水戸家浪士追討戸田越前守へ被仰付家来人数差出し追討仕候処戦ひニ破れ候義も有之又勝利仕候事も御座候而家老始討死手負等数多ニ而必至と尽力仕候然ル処家来共水戸浪士へ関係之もの有之上人数差出し方不都合

之旨全家来不束之由ヲ以当正月廿五日越前守領知之内二万七千八百五十石被召上其上慎隠居所替上屋敷御取上被

仰付実ニ恐怖仕候水戸追討外之諸侯ニ者一向可非共御

沙汰無之如何之訳ニ而越前守へ斗右様被仰出候哉難計候

へ共越前守者昨年追討之節八十八歳ニ而殊ニ当人出陣仕

候事ニ無之家来人数さし出し候事ニ御座候間越前守無罪

事ハ顯然と仕居全家来共不束之始末有之義ニも可有御座

哉左候へ者其家来ヲ如何様ニも罪せられ度事と奉存候越

前守先祖之家族減知被仰付剩若輩之もの隠居慎被申付

候義歟々數次第二奉存候且越前守建白ニよつて山陵御修

補御用同性大和守相勤居右 山陵御修補之義者千歳之

荒廢ヲ起し候義朝廷ニおゐても御追孝相立弥御繁栄之基

本と奉存候右御用者其元越前守相勤居候義ニ御座候へ者

殊ニ尊大之御用中減知并当人嚴科ニ被所候而ハ如何ニも御不都合之義後世記録ニ残り候而もいかゞのものと奉存候仍而ハ今度 山陵御普請卒業ニも相成候間右為御褒賞越前守領知復古同人隠居慎御免再勤被仰付候様仕度只々元ニ復し候義ヲ奉願候義ニ御座候

三四〇 嵯峨御所についての意見書下書「(宛先不明)」

後醍醐帝御即位御時と三ヶ年之間於嵯峨御所万機之政を

被為 聞召其御宇より被残置候永 宣旨ヲ以真言一宗之

僧徒官位其外医師画師諸職人位階受領呼名等連綿被差免

候旨且嵯峨御所坊官位階之義永 宣旨ヲ以推叙之上伝奏

職事へ被相届猶又宗派之僧侶其寺柄ニ応し權僧正拜任之

節以永 宣旨被差免權大僧都法師之官位其俣於 朝廷御

取用ニ相成直ニ權僧正宣下被為在全 勅許同様之御取扱

ニ相成居尤嵯峨御所者 皇居之御遺跡ニ付從往古僧侶

其外諸職人江位階受領呼名等被 免来候義之趣被申立候

処往昔皇居之御遺跡ニ候とて其 御場所へ 宣旨等被

殘候義ハ筋合ニおゐて甚相当不致 朝廷₆ 宣旨可被

出謂無之且官位等之義一途ニ不出候_{而者}御政体も難立義

元来於嵯峨御所御遠慮有之候_而可然筋と存候乍去是迄被

免候義ハ既往之事ニ付其俣被差置以後ハ是迄被 免候

向ニ₆出願候_者從嵯峨御所執奏有之 宣旨_者從 朝廷被

仰出候_而可然存候

三四一 戸田忠至書翰「大橋臨平宛」五月二十八日

多年之御勤功ニよつて今般新知六十石御拝領被成候段重
疊目出度欣喜之至ニ存候実ニ積年之御誠忠相顯れ大慶不
過之候右御歛申入度目錄之通令進入候恐惶謹言

五月廿八日

戸田大和守

忠至（花押）

大橋臨平殿

三四二 戸田忠至口上案「宛先不明」

秋元興朝洋行

ホアイト教師同行ニ_而秋元

秋元興朝洋行之義実父忠至へ相談有之処右興朝_者生質虚

弱之身体肺病之萌モ有リ既ニ一昨年ハ吐血疳モ致し候_而

且養家ニハ老人病者有リ実母_者久々病床ニ臥し興朝身体

薄弱ヲ朝暮心配いたし居右当人并養実之差支多第一当人

病身ニ_而ハ風土變り候処ニ_而ハ必衣食住之變₆必病ヲ

「_{（欠損）}」義ハ必定也洋行イタシ候_而も修業難遂義ト「

（後文）
」

三四三 戸田忠至口上覚「宛先不明」

口上覚

今般秋元興朝忠至_江洋行之義相談有之処右興朝_者生質虚

弱加ルニ肺病之兆モ有リ既ニ一昨年吐血モ致し元来物ニ

凝り平常元氣無之生質也且養家ニ_者老人病者有実母ハ永

ク病床ニ臥興朝身体薄弱ヲ日夜朝暮勞苦ス右之通養実ニ

差支多ク第一当人弱躰ニ_而風土衣食住之變_{ル地江}行_{而者}發

病シテ修業難^遂者必定然レハホアイト同行イタシテモ其功ナクシテ却^而害ヲ求ルニ可至依^而洋行之義^者追^而当人身体健康養実等ニ無差支節迄断然止リ国ニ在テ修業候方養実^江之孝道其身モ安全ニ修業ヲ遂ル事ニ可至と存候此情実ホアイトヘ宜御伝言同行之義御断被下候様希望仕候

三四四 戸田忠至書翰案「鞠負宛」(慶応元年) 六月

十二日

(朱書)「前文欠」
切迫^并越前守隨^而一藩中必至と困窮相谷リ誠ニ歎ケ敷様子於私も寝食も不安只々悲歎仕候右越前守^并一藩難渋之様子当所詰家来共篤と巨細ニ承知仕俱ニ痛傷安座仕兼候^而下坂之上御屋形様^江相縋リ只管歎願仕度旨申出候何卒愚臣共之心中御憐察被成下候様奉願候仍^而ハ御用多之御中不顧度々罷出候義深ク奉恐入候得共一家浮沈之堺愚臣共歎息焦志方起リ候義ニ付不惡御恕察可被成下候尤全本家義徳川公三百年來被召仕祖先之軍功^并代々重キ御役モ相勤候義乍恐 思召被出当今且 山陵御修補之御用相勤

候廉ヲ以御譜代一家御救ひ被成下候思召ニ^而偏ニ御取成奉願候將又尚歎願方之義ニ付御心付も被為在候^者無御腹藏御添心可被下候右^者御厚情之御礼尚歎願旁家来義度々罷出御用多之御中奉恐入候得共全ク越前守^并家来共艱難之次第忍ひ兼候方之次第ニ付不惡御恕察可被下候此段申上度呈寸毫候以上

六月十二日

大和守

鞠負様

二仲浪花^者暑氣も強キ由承り申候何卒御厭被成候様奉存候^已上

三四五 戸田忠至書翰案「鞠負宛」

泉涌寺御普請之義来ル十一月 光格天皇御忌迄ニ皆出来相成候様此間中^方広橋右衛門督殿度々御達ニ相成候処追々短日ニ^者相成迎も十一月中旬迄ニ出来榮無心元存候間其段申上候処何れニも精々出来候様ニと御達ニ相成致当惑候仍^而先般御頼申候御入用入札之義早々出来候様ニ御取計之義尚御頼申候且入札之者へも右極御急ニ^而十

一月中旬迄ニ出来之義相合候様御達可被下候

五月廿日

戸田大和守

三四六 戸田忠至口上案「初負宛」五月二十日

御医是迄之振合^者御内儀へ罷出候節御用筋私共曾^而不相
并直ニ罷出候事ニ相成居候右ニ^而御取締り之規則も相
立不申御不為之御義と奉存候仍之以後^者御用筋私共へ被
仰出私共不詰合節^者執次へ被 仰出御医へ申付又御尋等
之義^者相尋候上大乳人ヲ以御返答可仕候万一女房衆直ニ
御尋ニ^而不相叶御用筋^者私共御医召連罷出御用并有之候
方と奉存候御医ニ限り無沙汰ニ御内儀^江人込候^而口向御
締り筋ニも差障り可申と奉存候且又局向へ御医罷出候節
元来執次附添罷出診察見張り候御規則之由ニ御座候然ル
処いつの頃^方欽鍵番ニ^而附添参り候事ニ相成候右^者畢竟
途中^而已之事ニ^而御締り筋ニ^者不相成仍^而以後執次之者先
格之通附添罷越診察中見張居候方可然是迄之振合ニ^而
男女之別不正療治之外逐世俗之物語等致し候様ニも相成
候^而御為不宜義と奉存候仍之此段申上候以上

三四七 山陵維持の意見案「宛先不明」

国々 山陵御修補追々御出来ニ付兼々被 仰出候古制
之振ヲ以預り下司陵戸可被差置之処此節柄陵田等被宛候
^而差支之筋も可有之ニ付陵戸^者不被差置守戸被差置候間
御陵毎ニ最寄土着之者ニ^而守戸相当之人牀取調可申
出旨戸田大和守へ可被相達候

但シ下司之義^者當時御見合之事

一預り守戸給米之義ハ別段貢獻拾五万俵之内ニ^而被下候
思召ニ付其段兼^而可被相心得候

三四八 山陵探索の伺書案「宛先不明」

讃州表へ為探索罷越候義當時諸向混雜之時節且又五畿内
御陵此節取急キ御普請仕候ニ付^而諸方へ家来共分
配仕置候義ニ付私義暫時モ留守相成候^而ハ甚差支申候ニ

付讃州の方へハ先ツ谷森大和介^并私家来老兩人差遣内探仕駿と相分り候上^二而御宮等弥御取立之御治定^二も相成候節私罷越差図仕候^者可然奉存候此段奉伺候以上

をゆるし功賞ヲ重し候義則幕府繁栄之基本ヲ深被思召被仰出候間此節柄譜代之家筋仁慈ヲ加へ無過失様取計可申旨肥後守へ御沙汰之事

三四九 肥後守へ御演舌書写「(宛先不明)」(慶応元年)

三五〇 覚(山陵修補の覚書)「(宛先不明)」九月二

年)

十一日

肥後守へ御演舌書写

覚

常野浪徒追討戸田越前守へ幕命有之候処家来共不束之廉有之旨ヲ以嚴重之咎申付家禄^二も及び候段風聞有之然ル処越前守義 山陵御用被 仰付候^二付^{而者}同姓大和守^并家来共永々令上京格別^二尽力多分之散財いたし千歳荒廢ヲ起し数々所 御陵御修補此節九分通余致出来 朝廷御追孝相立チ幕府精忠之美名後世^二伝へ候義家来共不束之筋有之候共右 朝廷幕府へ対し格段精勤之廉有之候へ^者格外寛典之沙汰有之度殊^二 山陵御用相勤候者嚴科^二被宛候^{而者}御追孝難相立釈慮不安思召候仍之領知之義^者先々之通復古越前守義慎被免候様被成度尤罪之疑敷

一 柳元辺目論見之事成丈ケ早々出来候事
一 今井辺車木辺之模様承り候事
一 北浦へ 元明帝元正帝御陵之義^二付谷森書類為見尚北浦之存意書面も早々京都へ差越候様申談之事
一 河内 御陵篤と拝見泉州御陵之様子も承り度事
一 河内 御陵出来次第見分罷出度尤 御進発之頃合^二而者不都合^二付其前後之内見分罷越度事
一 出張之者へ時候見舞能々申聞必相厭ひ出情御普請候様可申聞候事
一 渥見不快相尋度事

一 浦島加藤江時候見舞能々申述且此間松茸沢山ニ恵ミ忝段挨拶申述候事

一 河州大縣郡青谷村之者外屯人 御陵御用之石献上願差出し尤野々宮殿に談有之候事願書別紙有之候間篤と訳柄承り糺し候事

一 河州ニ而九月限り金千両返済之約束ニ候処大坂御金方未夕渡り不申何れ来月上旬ニ者相渡り可申候間其節早々返済候ニ付少々猶予之義申談之事

一 旭連社へ厚挨拶申遣且金子口入之挨拶も能々申述度事
一 此後金子出来候哉之噂サ過日信八郎へ申聞候もし出来候者借用仕度事

一 清寧天皇陵土岐出羽守知行ニ拘り候ニ付下民難渋不相成様且又知行引高何程ニ候哉承り度事

九月廿一日

三五二 松平慶永書翰「(宛先不明)」(慶応四年)三

月晦日

岡谷文書一 幕末・明治書翰類一 (二) (原島・松尾)

過刻者於官代得拜願大慶尔来御清安令拝賀候陳者転法輪一条ハ何分関心之事ニ候定而從閣下八郎へ御内話被下候事と奉存候今日ハ例之集議ニ而も無之一両輩へ斗り談と存候岩倉不承知ハ頼母敷事ニ候明日ニても橋本へ御尋問拙子分り候ハ、御内々早々被仰下度奉希候書余不贅候也頓首

三月晦日

慶永

三五二 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年)三月十五日

(封)

彈正殿

保實

内密々

昨夜ヨリ下宿ニ而療養之由今朝退出後承之如何哉と案し申候随分無由段腹薬頼入候何時ニも問ニ合可申候様全身壮健之事ニ祈入度候

一 拟昨日公武惣参 内ニ而一致之神文ニ列判被 仰付候

次第二候此一巻誠ニ乍密々心得迄ニミセ進申候今一卷も只今写し取中ニ付後刻ニハミセ可申候追々 御親征之意味合も相分り候次第二付深心掛ケ^(虫損)□□申度候詔合不合点ニ^而ハ存外之手違ヲ生し可申哉ニ考候

一諏訪家へ預置ニ相成居候武器類ノ目六品書ノ扣御序ニ御書記御渡し可被下候左候へハ 太政官代程能手ヲ入可申儀ニ御座候也

三月十五日朝

三三三 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(明治二年)三

月二十九日

(封)

東京浜町

秋元但馬守様御中屋敷

高松三位殿家

(オ)

斯波彈正様

至急御用筋

高木大蔵
高坂源太

(ウ)

岡谷鈕吾様共申候ニ付御両名ノ内ニテ可然御披見「^(欠損)」廿

九日 質濟

(端書)

「七日申ノ下刻拝見」

追申何分東京ニテ急度々々此度ハ昨年ノ軍功ヲ顕シ被下候事ニ御周旋願上申候有志竹内三郎右ハ当家々来ニ有之此度供ニ召連公議人ト称し居申候宜御示合セ可被下候

馬ノ所ハ不取敢其御屋敷方御間ニ合セ被下度候何レ東京ニテ求メ度候心得ニ候大島伴介へ万事會計ハ御引請サセ可被下候此段訳テ願上候也

前略扱今廿九日吉辰ニ付弥寒村儀此表發馬東京江罷向申候尤東海道筋ヲ通行道中十五日ノ割

休 泊

大津 石部^{三月廿九日}

土山 関

四日市 桑名

宮

池鯉鮒 岡崎

赤坂 吉田

新井^(居) 浜松

袋井 掛川

島田 岡部

江尻 蒲原

原 三島

箱根 小田原

平塚 戸塚

神奈川 品川 四月十二日

東京着 四月十三日

右之通太政官ヨリ宿割被仰出候四月十三日東京着ニ付偏
宜御心添之程願上申候木村角倉并^(朱書)用達加藤大進其外夫々
^(様説カ)乍御面倒可然ニ御達し方願入候

上野国新田郡新田庄

歌道門弟也

大嶋伴介

右江取沢々早々御申遣し願入候尤供之人数ニ召加ヘ遣候
事ニ^而則大嶋伴介ハ品川方供列ニ召加候筈ニ供頭ヘ申付
置候也

三月廿九日

何卒東京ニテハ万事御心添々々伏^而希上候御引抱被下度候也

行政官并事職

斯波彈正殿

至急御用談

高松三位

(題後)

岡谷文書 十八

三五四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏

五月一日

(封)

戸田大和守殿

さし置

重徳

二白少々御不例ハ如何御保養專一ト存候猶承度候

梅天霽々候愈無御障玆重存候陳^者今日可致出頭御噂相楽
ミ旁出頭之存意ニ有之候処俄ニ不得止用事出来不克其儀
候乍残念千万右御理申入候猶不日ニ御悦ヒ可致出頭候早々
要用耳不典

後五月朔当賀

三白孫も可參御噂辱存候是も折悪俄ニ番代被頼不得其儀候残念

之旨從小子幸便御理ニ及候也

戸田和州君

必々不及御答候

重徳

二百里も隔如何ニも致し方も無之候十方ニくれ申候
悲歎く

御答

新在家

三五五 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十五日

(封)

御答

重徳

三五六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月二十一日

(封)

戸田殿

報答

大原

拝誦候御安全珍重存候被示候条々扱々愁歎無限事ニ候成

程清一之勘考筋も又々積り可有欵故此段早速為知可申処

ニ候へとも昨日之筋ハ御本家江申込御本家御勘考中之事

ニ候間只今清印が別ニ勘考も有之間敷と存候最早明朝ハ

貴館江出頭致し候次第ニ相成有之且ハ小子も毎々便り

致し候も何欵事ありかま敷候故今夕不申遣候左様御承知

可被下候早々御答如此候也

十一月十五日

二白扱く気毒く申様も無之候何分ケ様ニなり候処

(朱書)「近江」

二白 泉山面会より以前ニ愚宅へ参り先日以來御無事ニ被為済目

分も相動難有かり居候便ニ其折々之御模様とも巨細ニ相語り一

笑ヤラ又歎息ヤラニて候猶其内面語ニ可□と書止候乍例乱書御

推覧可給候也

宝翰拝誦候如命向暑之節追日暑氣相送り候愈御平康珍重

此事ニ候陳者 山陵之御一儀も追々御卒業ニ被為向々々

御安心之御事恐察いたし候扱過十九日不図矢盛近江ニ於

泉山面会後堀河帝御陵案内いたし御模様拝観いたし候此

御場所打見ニハ格別御手数之掛り候とハ不^(欠損)□拝観候へと

も一通り道作りヲ始総てヲ存候へハ中々御大造なる御儀

御場所ニ依りてハさこそと被奉察御高配之程^(朱書「恐力」)景察いたし

候事ニ候讃州ハ御残りニ相成一先御卒業被仰上候趣具々

も御安慮察入候廿三日後ハ光臨も可有之趣敬承候従小生

参賀可致筈ニ候へとも何欸御草臥も可有哉両三日ハ見合

可令出頭万々御悦可申述候扱御到来として見事之年魚殊

ニ数尾御恵投扱々芳意辱御札紙筆ニ難尽候例之一酌ヲ可

勦と相楽候扱又江戸団扇数握是亦御芳志辱早速子ともニ

も落握いたし相楽不浅辱厚御札申居候扱毎々御懇情何と

も痛却いたし候何そ御札と存候へとも折節存付も無之^(欠損)子

共がむしり居候ニ付若哉煮梅ニても可被成哉今□□未熟

候へとも実ニ御器物塞ニ入置候猶万々期接眉之時候早々

不典

五月廿一日

回麟

重徳

三五七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(元治元年)十

二月六日

口上

昨日^者御菌痛之處押て御出氣毒千万尔来如何候哉御見舞

申候扱昨夜清一^江書状到来正三卿^江進入貫兄へ御回し申

候様申入置候定^而御覽と存候彼様子にてハ戦ハ不始哉ニ

も被察候へとも分散と申様ニハ無之昨日ノ見込とハ違ヒ

矢張戦争ニ可相成哉扱くいやな事ニ候原市之進大津駅

未刻出しの書状ニ候へハ一橋も矢張大津ニ滞在候欸疑レ

候清一文ニ一橋も困窮と御座候ハ用費の事にてハ有間敷

事実ニ困りの事と察し候夫ならハ召返し候ハ僥倖と存候

何分清一行向候故巨細事実可相分帰りを待申候尚分り次

第可申入候書状御一覽候ハ、可返給候御菌痛御見舞旁如

此候必く御答御無用御答ニ御執筆^者ハ御保護專一折申

候早々不典

十二月六日

荒神口賢兄

内々

大愚老

三五八 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月四日

(封)

戸田大和守殿

重徳

必々不及御答候

向晴候愈御安泰珍重存候陳_者此節日々御見分ニ御回勤嚙々御草臥察入候併日々ニ帰館ニ相成候由少々ハ御休息もでき候半欵此餅ハおかしなるできニ候へとも今日つき候故御家内御女儀御子様方の日長ニも哉と掛御目候扱先日之懸軸便宜ニ返呈候御入可被下候乍便一寸申入置候蔵人理之一件從小子可申聞且貴兄_もも御申聞と申置候へとも彼身分子細故と貴兄_江巨細ニ申述候てハ本人実ニ赤面之訳ニ候てなじミの事故甚気毒ニ心付候右ニ付てハ本人若伺ニ出頭候ハ、何と欵御はづし欵程好御あしらい可給御理のすじハ追々御面会ニて巨細可申述候早々不典

五月四日

二白呉々も日々御草臥と存候間必御答ハ御無用候也

メ

戸田賢兒

大愚老

三五九 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

御書拝観候過刻ハ来車之処例之早々之仕合気毒無申条候先々御安全珍重存候陳ハ御頼之儀折好有合候俣応高示候処御念示御一札等痛却之至リニ候乍去為持被下候事故致落手置候則御命之通三百両御使へ相渡し候御改之上御入手可給候仍如此候也乃刻

二白扱又佳肴一折御心入辱存候折節一酌中早速拝味何レへも遣し候厚御礼申入候猶万々拜上可申述候也

メ

戸田殿

御返事

大原

三六〇 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 閏

五月十九日

先々快晴暑氣も相増候愈殷方ニも無御障珍重存候誠過日ハ罷出乍毎度御馳走懇情辱存候此ハダン杏庭前ニ出来候見事ニも無御座候へとも奥向御子達之御慰ニもと掛御目

候御笑艸御覽可被下候荒く要用耳不乙

後五月十九日

ニ白此間ハ林録太郎御差向緩々談話尋存候至極鎮靜之人物と察し江戸へ御返し打込ハ実ニ惜キ物ニ候讃州御参向も同じ御用ニ候夫迄ハ表向御引はり其後ニ遊学ニも候半哉又ハ御本家へても御附屬にて御勘弁所希ニ候時氣御自愛專一候也

ふくさハそなたのにて候返却 麓ハ御かへし

戸田大和守殿

重徳

三六一 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(元治元年)十

二月五日

拝披候又々御齒痛之由嘸々御困り御察し申候随分く御用心御保護可被成候扱今朝清一郎出頭之筈少々見合出頭可致之事右御齒痛ニ付小子出頭為見合候様御念示敬承候巨細清一御臥床へ被召御申聞之由凡用ニ候ハ、御止も可申処ニ候へとも右ハ昨夜も承り候処之様子にてハ早キ様

岡谷文書一幕末・明治書翰類一(二)(原島・松尾)

勘要ニ候間御齒痛御困りハ察入候へとも御止申場合ニハ参りかたく其上ハ小子御臥床へ参り候ても御談し申度程之儀ニ心得候併清一とハ小子へハ又御失礼等之御斟酌も深かるへく然レハ一入御齒ニも可障御気毒ニ存候間任貴命無左右差扣申候猶同人^江御示諭承り又々愚存も候ハ、可申入得意ニ候ハ、正三卿へ可参欵又々同人^江可相談候仍御答如此候扱此一紙書取誠いか、數御齒痛にてハ御一読も被成かたくと存候へとも風と昨夜ねさめに認申候愚存幾度も同様ニハ難述候故相認是々処々辞ヲ添御咄し可申積りニ候間幸便ニ掛御目申候猶清一二御渡し返し可給候随分く御用心專一と存候早々不乙

十二月五日

荒神口賢兄

大愚老

(封)

戸田大和守殿

重徳

三六二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十六日

三七

(封)

戸田大和守殿

重徳

於御承知ハ不及御答候

追日寒氣増加候愈御清康珍重存候陳ハ過刻清一郎從貴館
帰掛立寄巨細御趣意之處令承知候扱今日御本家大公 博
陸公と御示談可被為在由拙も承知いたし居候其御模様ニ
より貴兄と清との御咄合三大卿^江可被申入之趣承知いた
し候至極道理筋ニハ候得共過日^江御談し筋ニて御すわり
の処ハ口外ならぬ事乍万々無覺束候夫^江ハ今日御談し之
方ハ出来易クと存候ニ付清一二直二謁 博陸公且三大公
も参上候半旁届書其次第直様言上候ハ、可然と申間候間
從愚亭直様^江駄家^江参上いたし候少々貴兄御談しと齟齬
いたし候事申間候て御不審も可有之哉心配候間右子細申
入候昨日之振合ニてハ何事も手早ク埒明候方勘要ニ候間
右之通り差越申間候仍此段御理旁以寸楮申入候於御承知
ハ必々御答御無用候以上

十一月十六日

封

戸田賢兒

重徳

三六三 大原重徳書翰「戸田忠至宛」三月五日
春陰鬱々候愈御安康珍重存候陳^者 御陵御修補大和国
中之分御皆出来ニ付出来栄御身分等も無御滞御済ニ^而過
日御帰京扱々恐悦嚙々御安心之御事と珍重無此上候此處
肴ハ誠些少輕薄赤面之至ニ候へとも御悦之験迄ニ掛御目
候御笑納ニ於てハ本懷不過之候將又 神武天皇御忌日
ニ付又々近日^江御下向と存候其続キニ四国辺御下りニも
相成候歟とも存候ニ付此二瓶之酒彼^{砂糖淡盛}と生なりと 御道中之御
草臥安メニも可相成哉と進入致度候尤其前と存候へとも
風と不為存も難計何レ近々と存候ニ付為持上候其上御平
日ニ^而も御氣保養ニ御用ひ候ハ、是亦本懷ニ候早々要用
耳不乙

三月五日

戸田大和守殿

重徳

必不及御答候

三六四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

御答書拜披候何欵御念書痛入候無益之事とハ存候へとも御咄しも申度ニ付申入候事ニ候御疲勞御保養專一と存候少々清一と談し候事も有之候猶明朝御出候ハ、巨細可申入候御書取ニ通則相渉し候一読相為し何欵と咄しいたし候事ニ候仍御請迄如之候何も明朝可申入候也

乃刻

奉酬

(封)

御答

大原

□□

三六五 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十一月二十七日

口章

誠ニ過日^者久々ニして得參拜致大慶候其節及歎願候儀ニ

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

付無御捨置早々一昨日ハ遠路蒙光車殊以数刻ヲ被移御心配被下置^{実村江}御説諭実以深忝仕合ニ御座候段々御尽力ノ程如何ニも喜入申候右ニ付先不取敢^{実演}ヲ以今日ハ御苦勞ヲ奉謝度御札申入度候何レ不日保^実推參御厚謝可申入候積リニ罷在申候

一 佐州ノ一条何分ニも貴官出格ノ御憐配ヲ以品能彼ノ銀行ノ余財ノ口ニテ取組ニ相成候ハ、実以国方ニモ永久御恩ハ忘却仕間敷急度万代御謝報可申上候儀勿論ニ御座候当方ニ於テモ^江実ニ佐州^江對シ申訳相立相助リ申候無左時ハ裁判等ニ自然持出し候事ニ^{而者保實}身上ニ相響キ無限悲歎ノ事ニ御座候もはや齡還曆ニ相過被告ヲ請候義如何ニも致しとむなく御座候貴官ノ御助ケ以何と欵左様ニ不立至候運ひニ願申度候先年御勤王御出陣已来ハ一通りならざる御懇意ノ事御助ケ被成下度他ニ助ケ呉候義務ノ良器更ニ無之候尤^{佐州ノ童願ノ者}何時ニ^{而も}も差上御引合も被成下候ハ、御詰引願申度至テ慥成者ニ御座候外ニ六七人斗在京滯留罷在申候先^者不取敢御謝礼迄ニ呈書貴官ノ口御不調ト相成候時ハ^二如何致し

候半哉と心苦候也

十一月廿七日午前

追申本家三条ニも既ニ此比も段々引立被具候運ひノ儀も有之候
折柄へ自然裁判筋ヲ相発候而ハ忽チ差響キ破件ト可相成候旁御助
ケヲ以相鎮リ具候ハ、無限致大慶候也

申入候也

二月廿五日

不相変かすゞけ辱一寸御礼申入候
風邪如何哉□□□
朝候哉心得ニ御尋申候
御口上ニて御返事承度御念答ニ不及候
戸田大和守殿

重徳

岡谷繁實殿

高松保實

御親披

(封)

回鴻

重徳

三六六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」二月二十五日

春寒難去候御風邪如何哉御保專一候陳^(兼脱力)者一件愈今朝発足

ニ相成候様取計土山淡州と相談相詰候定し只今比ハ最早
発足いたし候と存候事ニ候要用斗為御安心申入候猶巨細
ハ面上可申解候將又昨日ハ御念示承り候乍去刑法局へ届
候事ハ不致候尤預ケニ相成置刑ニ無之候間不届是も巨細
面語ならてハ不相叶候左様御承知可被下候早々為御安心

三六七 池田慶徳書翰「戸田忠至宛」三月七日

一翰呈上仕候愈御清康万賀候抑先達而申入候華族集会ノ
一件漸仮規則ノ案相調候間入進覧候趣意ノ処^者先日入貴
覧置候向も御座候得とも都合も有之候故改訂致此冊子之
首ニ掲有之候主意書ニて東京府并阿大臣へも可申入と存
候就ては来ル十六日午後第一時迄ニ浅草東本願寺集会処
へ乍御苦勞御参会被下其節無御腹臆賢慮御示可給候右主

意書之義も委細可申述候仍以廻章申入候早々御一覽十一日迄ニ御返却有之度候也

三月七日

追而十六日御出之節御実印御持參可給候若御所勞等にて御出席無之候ハ、御所存御書付ニて御名代家令扶御差出可有之其御家令扶御実印持參可有之候也

正四位戸田殿

慶徳

三六八 大原重徳口上「戸田忠至宛」

(封)

回麟

大原

復

重徳

口上

何も拝承候御命之通六ヶ敷事ハ申迄もなし併してミぬ事ハとんと不分何分清一今ニ不参候故正三へも参りかね只今清方へ人遣し分り次第正三へ可参と存候又戦争とめ

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

の事御尤ニ候併是以如何可有哉前同断してミぬ事ハ不相分何レニ清一分り次第正三と御咄し可申と存候貴兄ハ齒痛清ハ感冒小子一人飛出シても役ニタ、ス扱々難義なり扱昨夜清一の文本紙ハ三卿写しハ一ッ致し其写しヲ上候故大鉢ハ承知候へとも一寸見度存候間御かへし可給候早々乃刻

回厂

大愚老

三六九 左金吾書翰「戸田忠至宛」三月二十九日

拝承春暖之候転御安康欣然扱今日大原殿へ御面会御座候由臣禮浪華より帰京之程御承知無之ニ付御尋問も無之然処御面話被成度事就有之近日之内参越候様貴君方御伝声御頼御座候旨御叮嚀御示諭具拝承候大原殿御他適等ニ而者御不都合ニ付参上日時被成御聞置度旨委曲御伝言之趣相心得申候態々御細書御懇篤深恐縮候右御答態々御人遣

候礼御返事迄例之蚯蚓書乱走筆御宥恕希候也

季春念九

尚々乍序貴君ニも臣禮拝謁仕度事有之二日朝者御差支有之候哉若御差支無之候ハ、一寸參拝希候御差支無之候ハ、別段御沙汰ニ不及御不都合ニ候ハ、御側向五一寸被仰下候様希置候也

拝復

左金吾

三七〇 大原重徳書翰「戸田忠至宛」七月二十一日

芳墨薫誦候如示命秋涼快然愈御平康珍重存候

思ひやる君か心のうれしさは何にたとへていひつくさまし

内喻之事故巨細御答不申述万縷面語ニ有之候早々不典

七月廿一日

重徳

戸田賢兒

回鴻

三七一 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

御書拝見候誠ニ今朝ハ得寛拝辱存候尔来御無異珍重存候陳ハ中條へ之事段々御面働何とも氣毒千万ニ候彼返書一覽候成程端書ヲ相考候へハ全ク当節嫌疑ヲ避候ため御面談ヲ被願候事と被察候二日ニ御面談候ハ、先其上の事ニ可仕哉猶勘考可致候段々御面働御人遣ニも氣毒千万猶面期可申謝候中條書中返上御入手可給候早々御報如此候也

乃刻

二白此上尚更御面働申兼候へとも二日之御様子一寸為御聞願置候也

報復

大原

三七二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」正月二十九日

(封) 御返事

大原

御投書辱存候漸春暖愉快候挙家御無異珍重此事ニ候陳者

過日之一軸返給正致落手候只今方持主参り候ニ付何のふ
下行之辺尋試候処従先代持伝候品故何程と申位も不相弁
候間望手の存心如何可有之哉先方之心持承度坏と申居候
此様子にてハ余下直ニ離し候とも不被存候御一笑く併
玆數品ニ相違有之間敷候將又娘儀被掛御心頭御尋何とも
恐懼いたし候先々相變り候事も無之依然と送日候同辺可
頼とも存候何卒勝利ヲ得度事ニ存候従何之御菓子被下扱々
厚情難謝尽本人も何欵口さミ敷様ニも申居候折ヲ見合一
口ハ可参哉と相樂候尚全快候ハ、厚御礼可申述候先御答
迄如此候也

正月廿九日

三七三 大原重徳口上「戸田忠至宛」三月一日

(封)

復

重徳

口上

大御無音申条なく候御平康御奉職玆重々々此筭不御玆候

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

へとも折節到来御硯ふた返上之便り進呈候早々不乙

三月朔当日めてたく候

重徳

戸田大丞殿

(及脱カ)
必く不御答候ハにつか段迄

三七四 池田茂政書翰「戸田忠至宛」三月二十九日

春暖之節御座候処愈御安康大賀之至存候然^者依 召今日

参朝仕候处麝香間祇候被 仰出深畏入候近日罷出御礼可

申述候得共不取敢御吹聴且是迄御尽力被下候故右様ニも

被 仰出候義と実以御礼難尽筆紙候何も其内拝顔万々可

申上候也

弥生廿九日

戸田宮内大丞殿

御直披

茂政

三七五 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)二

月三日

三白御書改ニテ御^(欠損)「回し候との由承り候也

拝見候誠ニ今朝^(欠損)飛脚^(欠損)立可被成御邪魔とハ乍存掛念之

次第故出頭候処不相変快愉之御あしらいニて不覺長席ニ

相成氣毒千万候尔来御多福珍重此事ニ扱其砌一献も可被

下之処として佳肴美酒等^(六条のよし)被下何とも無申条候ケ

様なる義理々々敷事ニてハ却^(欠損)迷惑いたし候されハとて

折角被下候御心入ヲ返^(欠損)「心訳柄然レハ辱申受候

拝納候からハ例之一酌之比ニ候間早速拝味可致家内子共

迄^(欠損)「相楽不浅辱存候併呉々もケ様ニ御配慮ハ誠

痛却いたし候重てハ必御無用可被下候扱^(欠損)どい^(欠損)」

なから帰路ニも又心に掛り候て能^(欠損)「存候ハハ全幕

が一向々々済ぬ次第追討ノ軍さ振ニ如何之儀あるなしハ

扱置山陵御修補^(欠損)「懈怠ヲ貴藩ヲ助ケて 朝廷^(欠損)正急

度御奉公ヲ被成候最中故大牀之事有りと有メ可置筈

「^(欠損)「一廉公役ヲ申付候上ハ何事ニも不遺筈之も儀

にして未曾有之御用ヲ勤て居者へ出陣杯申付候とハ言語

道断之暴政ニ候半ス哉云ても^(欠損)「ぬ事と存候

会ノ正幕も不被行御書取空しく持帰り候ハ、何と欵被

仰出方も可有之と存居候事ニ候無役のくり事御人為待ニ

も氣^(欠損)「と^(欠損)可申候早々不乙

二月三日

二白此うしの絵頼れ認メ残り如何敷乍赤面御一覽御笑

可被成一時御辭散にもと進入候且又御器物自迹返呈可

致候早々以上

メ

回鴻

大愚老

三七六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」三月盡日

向薺候少々御時氣当り之よし如何哉御保養專一と存候扱

今朝出頭いたし度儀ハ別事ニ無之彼中條面会之事嫌疑な

るへく察し候ニ付別ニ可致面会勘弁無之貴亭へ被致参上

候砌押掛小しも出頭いたし面会いたし候欵とも存候へと

も嫌疑なれハ夫とてもいやニ可有之哉とも存候其辺御談

し申迎も不相成哉ニ御考へ候ハ、小子心中之處貴兄ニ篤
と申入候て巨細ニ御伝言可給歟とも存候ニ付頭致度キ
と申伺候事ニ候^并ニ二条殿忌り一件御聞合之御返事昨日
承り候ニハ尚此後御達し書取回り候ハ、出来可致可取計
候乍併御厨司所御所御用として申立有之候夫方出来候ハ、
一条殿も可出来候へとも御厨司所忌り不出来候ハ、一条
殿の不相叶との事と相覚候何歟取紛レ御咄し申候故風
と不安心ニ存候若間違候てハ不都合候間念ニ御尋申入候
御答可被下候勿論別段御返事ハ御無用此通りニ候ハ、此
所丈切て此通りと二字御書添可返給候若相違候ハ、御頭
痛も止候上ニて御答可被下候將又前条中印之咄しハ猶以
御面働候間二日之朝ニても御返事可給候歟御勘考之上ニ
て宜候仍右申入度如此候

三月盡

二白ケ様御せわしく申入候も氣毒候へとも御当分之御事ニて明
日朔故諸司代^五御出勤可被成候左様候へハ彼町奉行ニも御出会と
存候然レハ忌り一件更ニ御達しも可被差出候間其節宜御取計御
頼申入候と申迎之事ヲ申入度存候且又花山殿御染筆物費兄御頼

之文言二幅ニて宜候ハ、何時ニても可相類候旨御申聞可被成候
付てハ彼官名之時ハ印なし調印なれハ官ハ不被認趣ニ候何レ歟
宜哉御尋置被成絹地と同時ニ御示可被下候也

戸田大和守殿

重徳

三七七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

御念篤御答書何も承り候御齒も朝之内ハ少々御助かりの
よし随分〳〵御用心御保養專一ニ候安ノ書状今ニ御覧無
之よし如何之事哉もそつと前三三卿^五御回達被成候趣被
示候其人相兼候て愚宅^五かへりニ貫亭へ参り候歟夫とも
最早参り候やと存候程ノ間ハ有之如何ニも不審ニ存候併
最早只今比ハ御覧と存候扱又如示命今度之浪士ハ本浪士
ニ^者無之又神州ノ忠士ニて候哉心得違も程ノ有ものと歎
息之事ニ候猶清一帰り分り次第可申入と存候早々不典

乃刻

随分〳〵御用心〳〵

荒神口賢兄

御報

大愚老

之儀真平御宥恕所祈二候万々期接眉之時候早々不典乱書
御免

十月晦

三七八 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(慶応元年)十

月晦日

御答拝見候寒氣増加候砌愈御無異珍重存候陳ハ御本家御
復封以下総て御安心之筋珍重々々御同様ニ御歛申入候右

ニ付御丁寧ニ御出折惡外出中御面会ニ不克残念且失礼痛
入候右御歛申入候印迄ニ龜末之品掛御目候処御挨拶とも
御丁寧ニ承り痛却いたし候何レ出頭いたし御歛可申入心
組ニハ候へとも何欵取紛未克其儀御免可被下候扱又松井
金次郎長之事段々御取計以御蔭都合宜御聞濟之由廣橋殿
御申達し有之候旨扱々安心仕候全御厚配故と深々辱本人
只今外出罷在故歸り次第可申聞嚙々難有かり可申不取敢
小子方御答迄ニ御札申入候且又菓子献上御家来衆への贈
物之事迄御念命痛却いたし候何と欵致し様も乍可有貧生

夢かと御あやしみのよしを
も其辺尚又宜御頼申入候也

夢ならハさめなくといふへきに
さめはいよ／＼うれしからまし

御一笑／＼

回鯉

大原

三七九 軍裝行進の覚書(慶応四年)

五日ノ行幸延引候事ハ昨日申遣候尤定テ相達候哉と存候
一馬印棒斗遣候間若用意有之候ハ、早々飾立可然候

(朱書)「装乙」

軍莊二而尤無子細候ニ付此段申達候幃も用意ニ候ハ、
節立不苦候へ共如何候哉

一 外國人ニ出逢候事万一有之候へハ必々咎立ハ不相成候

只々道ヲ替候歟無摠節ハ半々ノ通行ニ而互ニ札節者宮

方とても可致旨被仰渡候ニ付互ニ同格ノ札節ニ付必々

咎立不相成候也被仰渡ヲ守リ可申候

一堂上ニ行逢候ハ、下馬ニテ札節可然事互ニ相馬上ノ時

ハ不及其儀乘興ノ人ト乘馬ニテ行逢候ハ、是又乘違ニ

テ不苦と存候事何分精々通ヲはづし候方無難也

一 其外万事心ヲ付可申候道中目附役ニ清水兵庫ヲ遣し申

候

陽明公 左府御辞退

一條公 右府同斷

跡ハ

九條公 左府

大炊御門 右府

廣幡 内府

右之通被 勅許候仍早々及案内候也

一 誠ニ深御心得可然候大變ノ事ニ候

一 前頭ヲ密察候事常ノ事ニ候既ニ九條殿此度左府引統キ

不遠して関白被為持候氣色茂有之間御考置可然候

陽明公少々行当り居申候也

十一月廿八日

岡谷鉦吾殿

内急々

保實

三八〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応三年)十

一月二十八日

追申田口翁一件委細ヲ早速撰政公へ申込置候何レ近日

御返答次第可及御案内候也

誠火急御轉變之條々及案内候昨夜俄ニ

三八一 坊城俊政書翰「戸田忠至宛」二月二十四日

全 全

六一

岡谷文書 卷二十一 目次

全 全

六九

大原重徳ヨリ 戸田忠至へ

全 全

七月十一日

全 全

十一月廿日
臘月六日

岡谷文書 卷二十 目次

秋月種樹ヨリ

岡谷繁實へ

五月四日

東久世通禧ヨリ

岡谷繁實へ

九月十九日
一月廿五日

全 全

七月十四日

香川敬三ヨリ

弁事へ

四月二日

議定総裁ヨリ

信甲有志へ

慶応四年二月

釋玄猷ヨリ

岡谷繁實へ

五月十四日

高松保實ヨリ

戸田忠至へ

二月八日

杉孫七郎ヨリ

全

五月卅日

嵯峨實愛ヨリ

戸田忠至へ

十二月十六日

福羽美静ヨリ

全

九月十日

高松保實ヨリ

岡谷繁實へ

十二月十六日

福羽美静ヨリ

岡谷繁實へ

五月廿六日

久我通久ヨリ

弁事へ

二月廿八日

□川讚岐守ヨリ

戸田忠至へ

廿三日

池田章政ヨリ

戸田忠至へ

五月九日

高松保實ヨリ

斯波彈正へ

二月十七日

高階丹後守ヨリ

全

四月廿一日

竹屋光有ヨリ

高松保實外へ

二月十四日

亀井茲監ヨリ

戸田忠至へ

五月十二日

高松保實ヨリ

岡谷繁實へ

十二月廿四日

東久世通禧ヨリ

岡谷繁實へ

二月十四日

大原重朝ヨリ

全

八月三十一日

島田龍章ヨリ

間瀬和三郎へ

十二月廿七日

小笠原長育ヨリ

全

三月十五日

洪澤栄一ヨリ

戸田忠至へ

三月九日

嵯峨實愛ヨリ

戸田忠至至

七月八日

嵯峨實愛ヨリ

全

四月十六日

戸田越前守ヨリ

全

閏五月十日

戸田忠行 ヨリ 八月念八

鈴木良三 ヨリ

前田 ヨリ 岡谷繁實へ 十一月十八日

秋元興朝 ヨリ 岡谷繁實へ 十月四日

(瀬川)
讃岐守 ヨリ

高松保實 ヨリ 斯波彈正へ 四月十日

五九

池田 ヨリ 戸田忠至へ 五月十二日

(以上の目次は半紙本に収載)

(題簽)
「岡谷文書十九」

三八二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 六

月二十七日

(封)
和州公 實愛

二白期限ヲ立猶豫之事ハ御尤故とくと可談申居申候万々尚又期

拝面候也

先刻御念書被下拝展敬聞仕候如貴命殘炎難堪候処愈御揃御安全恐賀候然ハ昨日拝面其後美濃へ御示之趣共具二承候扱野左貴館へも罷出候由追々差迫り候旨御談此上精々御頼之趣委細承候先刻も同人入来候間段々御示之御趣意申聞益後二ハ追々引越初メ実々焼眉之急ヲ談申候移替不致候てハ幕令違背又移替二付而ハ手当不出来進退谷窮之訳其外山陵御修補発起大基本勤幕之意等更ニ申聞此所二而官家ニ取入旧復ヲ計り候趣意ニ無之官武共歎願之事御紙上被示下候趣共精々申諭候処野左も殆当惑一々御尤之事私共取込通りニ於幕御汲取不被下実々恐入候旨申居候間一万程 尊官へ被下夫ヲ以本藩扶助之見込(愚身)一個之見ヲも申談何分ニも会主従尽力倚頼之外無之管只頼置尚又益前二ハ黑白相分り覚悟ヲ窮メ度申談置申候且期限ヲ立猶豫之事其余尊官之賞先ツ出夫ニ而本藩御救等之事も精々申入置候明日下坂精々尽力可有之主人へも可申入旨申引取申候此段早々啓上候也

六月廿七日

尚々野左ハ如才無之と相見申候とかく中元前ニハ成否決定覚悟ヲキハメ度申談置申候書簡袋沢山被下もはや
弘底之處ニ^而一入御札申上候今朝⁶段々引つ、キ早々荒々余ハ申略候也

和州公

内々御答

實愛

三八三 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月二十一日

(封)

戸田和州刺史公

實愛

御揃御安全恭賀然ハ一昨日ハ無御滞御帰洛先以御見分も相済御安心と恐悦存候扱不存寄御土産品々預御投恵何共畏入候御心入御品一入畏存候御芳志千万感悦仕候万々猶期拝謝候先乍延引御札如此候昨日ハ少々紛雜罷在御札延引恐入存候何も拝時と申洩候也

十一廿一

戸田和州君

實愛

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

三八四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 四

月二十八日

(封)

寺町様

石薬師

尚々不順之時候其上雨湿御用心專一奉存候早々乱書御判覽願入候也

陰雨霽陶敷御座候愈御揃御壮福奉南山候扱昨日^者御投翰被成下出仕之儀賀給其上見事成鮮魚御恵被下千万御札申上候昨日ハ久々ニ^而出勤芽出度一酌仕一同^江も頒遣し全御芳志打寄賞翫仕厚奉謝候將亦兼々申承候越州公一条昨日篤と博陸公へ申入猶又先方御見込も承候処右之義ハ何レニも旧復無之^而ハ於 朝廷も御追孝之道難相立御義理も關候筋合故是非^く事の行はれ候所を被取計候見込就^而ハ愈来月十六日大樹発途上洛故其所ニ^而懇到切至ニ可被諭付御趣意之旨被示談候尚又精々申入置候次第も御座候拝面縷々可申陳候先々早々如斯御座候謹言

四月廿八日

和州様

内々

實愛

三八五 一橋慶喜内願書写 (戸田忠至宛嵯峨實愛の封

つき) (元治元年) 十一月

(封)

戸田殿

實愛

此度常野浮浪脱走之徒多人數中山道筋罷登り不容易模様
ニ相聞此上万一 帝都へ相迫り候儀御座候而者職掌ニ
取り恐入候而ならず右之内私実家之家来も交り居候哉ニ
候得者別而不相済次第ニ付江州路辺まで早々出張追討仕
度奉存候間何卒暫時御暇被成下候様仕度奉内願候以上

十一月

一橋中納言

三八六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(元治元年)十

一月晦日

口述

昨夕一件御帰り後安清入来殿下御承引昨夜ニハ是非被行
候趣御返答故安心候処其後大原殿下へ参上之处一橋面会
一卿ニハ是非共可討物と申見込自身出陣願立ニ参殿之由

会桑等家来も一卿断然之論ニ承伏殿下も同断先々一卿江
州辺迄出陣哉ニ可相成若不被許ば自分ニも下向と申見込
之由扱々困入事と存候一卿当地動キ候事不安心存候是ハ
何卒尽力致し止メ度存候宜御周旋御尽力被下度候大原安
清等も御談願入候今朝へ掛けて昨夜も殿下山階宮以下所々
文通今日ハ是非く四ッ半参 内一向間隙無之其上頭
腦齒痛大ニ困居候間御助希入候一卿申立書取入貴覽候
御一覽此者へ御返し被下度候也

十一晦

封

寺町大君

内々急事

石薬師

三八七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」十一月二十四日

(封)

戸田大和守殿

實愛

追而御齒加養且寒氣御用心折入候乍例大乱書御判覽可被下候也

追々寒威相募候処愈御揃御安全恐賀候乍併御齒痛御困之趣歟々御難渋と御察申候御加養偏所祈候扱右之儀も不相心得昨朝^者御面勵申入恐惶仕候將安達書翰被為見下一覽返上仕候昨日殿下面談仕候間愚存之分ハ篤と申入置候得共何分重大之儀決極之処何程ニも可有之哉苦心至極ニ存候安清^者精々説得有之度事ニ存候長^者も御詫書差出尾前大^者言上ニ相成申候ニ付^而ハ追々模様^者段々之運ヒも可有之候得共決極の討欵赦欵ニッハ最早被決候^而当然之処故斯自博謝罪之上^者於^者朝家^者御寛宥ニ被決候事勿論之義と令愚考候間見込申立候処於博陸^者粗御同意其余親王丞相攝関家等ハ格別異議も無之趣ニ相考申候処武伝^并相役之内存外之論ニ^而兎角幕府^江御委任之義且幕^者討罰も差向ケ候事故幕次第と申説主張有之候於愚存ハ討手ハ幕^者申付候得共追討之^者宣ハ^者朝^者被出候事其根元も禁闕ニ迫り候訳^者起り候追討旁以於^者朝廷御決議至当之事と奉存候段并論仕候得共中々一決六ヶ敷甚以疑念も相起り候義有之候^而実長大息仕候筆端難相尽候凡近年之御時宜合甚難渋色々心配仕候得共とかく難被行百端

万事無詮之煩勞斗ニ相成此間之水戸一件斗見込通りニ先々ケ成ニ被行候次第何事も恐入候事ニ奉存候種々御談申度候へ共御齒痛御困小生も押^而ハ出居候へ共御同様ニ^而困居候間先々荒々昨日之貴答旁令啓上候安清書状令返上候也

十一月廿四日

和君

極内々御覽後早々御火中

野叟

三八八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応元年) 七

月十五日

(封)

戸田大和守殿

實愛

当日芽出度存候愈御揃御清勝欣賀之至存候然ハ昨夕光臨被下候節御相談申承候一条今朝殿下^江罷出候処今日^者殿下御參内之趣ニ付先用意持參致し居候書付を差上置委細^者於^者宮中拝談と申入置其後殿下御參候間何分ニも右一件ハ殿下へ御倚頼申上置候処於江戸表周防守方^者段々

強談切迫実ニ差ツマリ渋々九月七日取極メ候始末移替ハ
 九月七日ニ候へ共以前追々双方移替故当月廿日比ハ初り
 候儀共申入多人数先祖墳墓之地ヲ離レ候悲憤ハ心得違等
 無之様心配且ハ右取極メ候上ハ九月七日期限無故障引移
 リ為致度就^而ハ手当一切無之於国許相弁し兼候ニ付専ら
 当地ニ^而金策御周旋之事庄内長岡移転農民歎訴ニ付止メ
 之事共書付ニモ致し置候へ共精々申入候元々 山陵御
 修補ハ 朝幕^江之御奉公寸忠^而却^而奉惱 宸衷
 殿下御初二モ奉掛御心勞候段恐惶至極於貴兄ハ勿論於小
 子も惴惧仕候段篤と申入江戸来状外三通等も入覽候処殿
 下ニも甚々気毒ニ被思召実ニ御当惑被成候へとも何分当
 月廿日と申急場ハ致方無之兼々夫も御承知被成候へ共重
 大差縫れ候事故急ニハ難解何卒九月七日移替迄ニハと申
 御見込之由尤夫迄ニも可成丈ヶハ差急御懸合有之候趣一
 橋^もはか^くしき御答無之ニ付安豊へ此比被申遣置候
 趣有之右ハ何レニも取極メ候返答無之^而ハ不相濟事柄故
 右返答次第可被示旨ニ御座候間何分ニも度々色々申上候
 段全御催促ニ相当恐慄之儀最早申上間敷と存候へ共昨日

大原^も承候処ニ^而ハ当二十日と申辺万一行違有之候^而は
 折角之御尽力ニ相振レ候^而も不都合故御含の為ニ申上候
 段申入決^而御催促ニハ無之殿下御精力十分御尽之事ハ承
 知仕居候趣共精々申上置候觀念ニ^而廿日^も初り候ニハ返々
 無之中途ニ^而も止候へハ難有段も申上置候委詳書取た
 く荒々啓上仕候書余拝面可申述候也

七月十五日

追申只今退出早々大乱書略札御断申入候也

戸田大和守様

内々

實愛

三八九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月九日

(附)

荒神口様

樺木

昨夕御投書被成下候処来客中不能拝答恐入候追々薄暑促
 候処愈御揃御安榮奉賀候併過日来御違和未御清快と申ニ
 不被為到御吹出物御熱氣御差引之趣何卒早々御快然所仰

折候兩三日中^二者御出勤之旨恐悦ニハ御座候得とも篤と御看養之上御出仕可然と存候過日^者到來合之野菓呈上之處見事之鮮魚被下置甚痛入候其上毎度御念謝恐入存候扱又世上形勢御案勞御尤御同事日々焦慮仕候事ニ御座候画工申分^二而も何歎可有之と相見候中川家頼申上候趣^二而も既ニ干戈之端緒相開キ候勢と相聞へ朝廷^二而も一向議論も無之去六日一会桑参内^二而防長処置追々手も詰り候ニ付^而ハ長人諸方遊説京家へも可及歎訴相聞へ候間御採用無之様言上ニ御座候ニ付一同入説等不相用様との事ニ御座候追々模様相勘候処兎角ニ宜敷方へハ運ひ兼あしき事ハ被行候事迎も天命氣運のめくる所ニも可有之と歎息仕居候衰世之勢古今同轍唯恐入居候事^二而御座候賢考相伺度存候先昨日貴報耳呈寸楮候也

四月九日

荒神口様

内々

樞木

三九〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」二月三日

先刻御細書令拝見候愈御揃御安全拝祝仕候然^者別紙ニ通御到來ニ付拝見右之趣^二而ハ甚不審ニ相見候全横槍を入候者可有之と存候何れニも甚残心至極成事と存候併何々様ニも旧復可相成と存候且会^レ御含ませ之義御別紙拝見仕候至極御宜と存候少々心付候迎添削仕猶又柳卿へも相談仕可申候書改候上会へ可渡承候自余御示之条々夫々拝承存知候間尚又跡方可及拝答候今朝退出引ツ、キ来人大ニ紛雜甚乱書略答御断申上候也

二月三日

二白別紙ニ通返上仕候御入手可被下候大乱書御推判希入候也

拝復

實愛

三九一 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月十一日

先刻略翰差上候処御細答被下謹承候先以愈御清適令渡給奉恭賀候然ハ名簿差上候儀ニ付御念答恐入候吉井香川等専ら尽力之由猶兩人へ御談可被下趣恐入候夫^二而ハ却^而

甚不宜候間御聞流し之方ニ奉願上候今日之時勢ニ到り御互之場ニ而人を吹拏致し候事抔ハ不可然故必々吉井香川等へ御談ハ御無用ニ被成下度此段別而奉願候必々御聞流しニて御心配不被下候様返々奉願候將又御端書之趣恐入承候御念入候御示教痛却仕候此段再応御請迄勿々頓首拝復

七月十一日

拝復

實愛

三九二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」三月十二日

追申猶又此上なから御心添御探索等御頼申入候也

拝見候御安全珍重存候陳者越州へ御こし御苦勞ニ存候薦と御談し置其上御繰入処別条も無之由先々安心之事ニ候乍去亥刻比岩印參内ニて口上^{詰所ニて}此上御聞済も無之ハ御席ヲ汚し候^{生不安心}いたし方なくと存し候よし其御対面と申処へ御寝之触有之候故最早今夜ハ是きり欽と存候非番の者御寝後ニ無用ニして在 朝ハ不審も立候故先退出いたし

候猶明日可申承候早々御答如之候也

三月十二日

二百よくこそ御申こし辱安心いたし候也

報復

重徳

三九三 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」五月十九日

(封)

荒神口様

石薬師

快晴候得共時候揃兼候処愈御揃御清榮奉賀候然ハ昨日ハ何寄之御鋪物被下必要之御品早々相用以御陰除濕毒避陰邪候上昨夜^者蚤抔も近寄不申実以重疊奉拝謝候万縷尚拝時可申解候返々も御懇篤芳情筆端難相尽候此段御礼啓上仕候扱此提画ハ水口細工不玆候へとも備笑覧候御一咲斗之事ニ御座候也

五月十九日

追申野村昨日可来筈之処桂川炮術出役之由ニ而断申越未来不申候下刃追々人氣騒々物議不穩実ニ恐入候勢之

由風聞承候御承知も候ハ、伺度候三藩口論之事ハ尚拝
談と申略候也

封

和州様

内密

正三

和州様

内々御請

實愛

三九四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」九月十三日

(封)

戸田様

正三

「

昨夕御細翰被成下謹拝承候逐々寒冷ニ相向候処愈御清健
恭悦之至存候然ハ過日拝談申承候一条ニ付縷々御示教千
万々々御札申入候至極御尤之御示命何様御推量之通ニも
可有之又万々一案痛之辺ニも到り候共兎角沈黙発言仕間
敷候此段御休慮被下度候色々御厚慮御細教之趣屹と相守
可申候間御安心被下度候万々尚又拝面可奉拝謝候先御請
旁早々如此御座候也

九月十三日

三九五 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」三月八日

拝承候御壮栄欣賀仕候扱臈之事縷々御示承候松本持来候
ハ、落手可仕候林丘ノ事も拝承候彼は御手数畏入存候今
日退出之期難相分俄ニ御用出来在 朝仕候退出候ハ、一
寸御案内可申入候也

三月八日

拝答

實愛

三九六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」三月二十四日

短略龜札進呈候御細答被下辱拝見益以御多祥慶喜之至
ニ存候然ハ今日朔妻以下參上之儀前代未聞御欣悦之旨被
示下何様実々即今大慶申ニ不及御互祖先ニも御満悦被下
候段怡悦無此上事ニ候扱拙子不參ニ付取々鮮味被頒下畏

入忝存候御世話之段ハ恐存候へ共於御芳志深重感戴仕候
猶早々拝味候半と奉厚謝候御池滴水尚他日拝見可仕候先
御礼耳如斯御座候以上

三月廿四日

實愛

和州様

尚々御端書之趣敬承仕候とかく和融專一御趣意誠ニ感
服候此上永々昌栄御互ニ幾久敷御贈答可申事大幸悦喜
仕候是偏御至誠貫通之事と畏入忝存候何レ他日參謝為
仕可申候先々万々御礼啓上仕候也

封

戸田様

内々御答

正三

三九七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」閏月九日

(封)

荒神口様

榎木

添一刀

一

追申今日之事態々速ニ御示諭安心仕候御返事延刻御断申上候也

先刻者御細翰何も拝見仕候愈御揃御安全恐賀候然ハ今日
御行向之先方模様被示下安心仕候宇都宮之事御歎願被成

置候由御都合と存候將又昨日御預り申置候御切紙之事ニ
付御別紙之趣共御尤ニ承候右之趣ニ引直し可申候今日ハ
殊之外来客有之漸唯今手透荒々御報迄寸楮差出候也敬白

壬月九日

尚々昨日ハ御来駕被下無存懸一統正拝領物仕実ニ恐入
存候併御懇情千喜万悦奉拝謝候毎度〳〵恩恵御余沢返々
感戴御礼啓上仕候早々乱書御仁免希入候也

三九八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月六日

(封)

戸田様

正三

荒神口様

石薬師

今日者先晴ニ相成候弥御揃御常勝奉賀候然ハ昨日ハ東作
一冊被為見下一見至極簡要之出来と相見申候先返上仕候

御入手被下度候且此程參上仕候時上置候尾州書付二紙申
降度存候且又昨日殿下へ參上仕候得共御腹汚殊之外御困
二而不得拜謁候間荒々申次へ申入置申候尚近日再參上可
仕と存候左様御承知被下度候浪華音信一向不承如何と心
配仕候何も当用耳余ハ申略聞筆候也

六月六日

尚々涼氣不順御用心專一奉存候

三九九 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(明治四年)七

月十四日

先刻御投書之處參 朝中御請延引恐入候先以御安全奉賀
候然ハ兼而之金之内式百兩被返下正令拝受候御念示恐入
存候右二付鮮魚料被下恐惶不少候得とも謹而拝受御札申
上候只今退出匆々拝復斗如此候敬白

七十四

今日ハ大納言辞退願之通被仰付難有大安心御札御風聴

申上候也

戸田様

嵯峨

四〇〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月一日

追申大乱書御高免希入候也

謹拝承候追々暑氣相催候処御一同御清健被為渡奉拝賀候
然者

百兩

被返下正二拝受仕候実ハ今般女縁組入用多分之上又一人
西京々東下致し候入用是又不少寔二小生手許大差支窮を
極メ当惑仕居候所二而旱天二甘雨を得候心得大二安心御
厚札申上候殘金五百兩之儀も承候御都合も兼而承居候義
申出兼候へ共大差支当惑之極二相成候ハ、可奉歎願候返々
今日之処大二難有奉存候段々御念示恐入拝承候不存寄御
菓子被下厚御札申上候来人有之取紛荒々貴報斗勿々頓首

六一

拝答

實愛

四〇二 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月十一日

朝夕頗凌能相成候益御安全奉大賀候昨日^者御苦勞相願候
処早速御取計被下大安心御厚礼申上候猶拝面万謝可申述
候へ共先御礼申上度寸楮拝呈仕候勿々敬白

七月十一日

四〇一 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月九日

拝承仕候如來教日々降雨扱々恐入候天象全昊天激怒と寒
心致さず候^而ハ不相濟事と心配仕候先以御揃御安全奉賀
候然ハ円物之儀御念示承存候決^而差急キ不申必御放念被
下度候段々御厚示痛入候扱乍前後少々御痔之由折角御保
愛奉祈候湿拂御藥被下忝拝受早々相用拂雨湿候事と拝謝
候仍先御報斗如斯御座候殿下も兎角未順快二不被為渡御
平臥之趣二^而何事も先壓り御座候模様分り候ハ、早々可
申上候此程之大場今一人上京甚切迫之次第ハ先以申次殿
下へ巨細申入置候不日二ハ拝謁も相叶可申左候ハ、委曲
直二可申入候左様御承知被下度候也

六九

封

荒神口様

石薬師

御返事

〔題簽〕
「岡谷文書 二十」

猶々序二任七差上置候別紙名前之者若々宮内省内舍人
辺二御用も被仰付候ハ、難有旨内々願出候間一寸希上
置候也

併御心配之筋二も候ハ、決^而御聞流し二願上候也

戸田宮内大丞様

実愛

必々不奉勞御答礼

四〇三 秋月種樹書翰「岡谷繁實宛」五月四日

(封)

(相田印章)

相州鎌倉郡片瀨

(ウ)

秋月種樹

東京豊多摩郡淀橋町百四十三番地

(オ) 岡谷繁實殿

親展

御紙上拝読候扱先日ハ遠路態々御光来恐縮候其上一向御
 構不申上本懐存候扱秋元家一条先日御持参之書類當日
 早速椿潜学方へ相廻し拙者附議論曰 候爵ナリ伯爵ナリ
 資格アル者ハズン／＼御許容アルカヨシ宮内省ニ於テ一
 文之御失費モ有之間敷候又爵位ヲ汚スモノアレバ候爵ナ
 リ伯爵ナリズン／＼剽奪スルガヨシ其方却而信賞必爵之
 御威稜相立可申ト申遣候早々返詞セヨト申遣候処今
 ニ返事不来来ラバ早々模様御報可申上ト存候所不申来ハ
 最前同人書面鋒頭トハ少々不似合故或ハ此度之戸田家
 申立ニハ別論アル欵ト存候是非返詞参ルベク又返事来ラ
 ザレハ近日拙生外用ニ而上京候間直接面会実況承リ早速
 可申上間左様御承知可被下候 児玉氏之御伝声難有存候
 宮内省へ納り候ハ、同人ら報知有之由申来候得共未タ返

事不来候故手続相済候ハ、先日之絹地へ拙画認メ模印差
 上申候

過日ハ御編集書御恵投被下難有百世玆襲候

右ニ付左ノ件伺候間一寸御報可被下候

藤堂高虎ノ処天海僧正カ 天子ヲ伊勢大宮司ニスルカ

ヨキト云処高虎諫言ニテ家康モ不同意ヲ唱候云々

(御編集ニモ右之
 処相見へ申候) 右ハ何之書ニ出候欵塩谷宕陰昭代記ニモ

右ノ事相見候得共原本出所ハ不相分候右ハ原書何ノ書ニ

見候欵御取調出来候ハ、早々被仰下度願上候

右モ妙ナ事ニテ藤堂家ニ於テ候爵昇格懇望之処是迄頓

ト運ヒ不申由依而右ノ廉申立度候得共故事出処不相分

故取調へ呉度同家旧臣ら依頼ヲ受ケ是刃星埜恒坏

へ尋候得共一向不相分候此度名将言行録一閱候処右ノ

事相見候間依而此段伺候也

又々申上候右言行録貴族院議員秋月新太郎是非頂戴仕

度申出候代価ヲ以テ御廻し被下候様願申候同氏住所ハ

(牛込若松町
 十二番地也)

右御返事申述候也

五月四日

秋月種樹拜

慶応四年

岡谷大先生 玉案下

二月

信甲両国

有志中

三〇一

(朱印)

四〇四 秋月種樹書翰「岡谷繁實宛」七月十四日

四時迄御待可申上処急々用向出来片瀬へ帰り申候御案内
申上候モ行違ニ相成候間別段書状差出不申候御無汰足掛
ケ候事重々恐縮候得共不得已次第御推恕可被下候也

七月十四日

秋月種樹拜

岡谷大兄

四〇六 高松保實書翰「宛先不明」(慶応四年)二

月八日

尚々弥来ル十五日大坂城立

行幸被為在候十九日御親征ニ臨

幸被為在候尤百人ノ堂上奉供候逆も只今帰京ハ間ニ合不申候由

ニ付其地ニおゐて手柄ヲ致し候方可然哉と中山内命ニ付早打差

立申候也尤急々式ケ条ノ義御内命御請ノ義ヲ差登セ可被申者也

極内密翰ヲ以從中山前大納言并同前中将阿公深キ御内命

ニ候此段篤と可被相心得候

一只今表向ハ御引戻シ嚴敷キ御沙汰ニ候得共内実ノ所ハ

此中山父子引抱能合点致し居候間引戻り候ハ古今無

比類手柄ヲ踰^{朱書「ハシカ」}ラレ候方身ノ為ニも可相成且天朝御為ニ

急度可相成ニ付此段申達候様中山方内命有之候

四〇五 議定總裁内命書「信甲有志宛」慶応四年二月

皇太后宮少進藤原朝臣實村今般信甲両国鎮撫真忠之軍功
不堪感佩猶以後一人有志共無離散一致尽力可顯精功候近々
繪旨錦御幡等可取計者也

右之趣議定總裁中山前大納言三條大納言内

命候

一 中山内命左之通

南風烈然タル夜南手^をして江戸ノ城ヲ焼討ノ手配り可致事

但シ只今ハ時刻少し早過候也当月末ニ至テ比合ヲ考合セ可手配事尤戦争ハ格別不致唯々火ヲ掛候^而火勢南風ヲ以苦勞なしニ焼亡シ可申候

一 当二月廿二日江戸表城中^を軍勢拾貳万余騎京都ヲ目差歎願ト申立テ差登セ押寄掛候由兼^テ差入有之候隱密人^を注進申來候由ニ付決^而此儀ハ他^江洩不申候様可致候此大將ハ会津ノ由ニ候此拾貳万騎ヲ箱根ヲ打越シ上京致し掛ケ候時ニ凡一日路二日路程も打越過し候比ニ忽ニ箱根ノ関所ヲ乗取テ関門ヲ東方^を戸ノ切跡ヘハ不被戻テ不通様ニ致し候手配り有之度候尤軍勢箱根ニも少々守ラセ置可申候左候上会津勢ノ先陣京近ク相成候比ハ官軍ト矢合セ合砲ヲ始メ掛ケ可申候也其時刻ヲ^者十分ト道筋ヘ凡探索人ヲ入会津勢ノ後陣ヲ打破リ二大炮ヲ以討掛可申候左候時ハ負走ハ必然也ト中山内命ヲ被下候もの也

二月八日辰半刻発之

四〇七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(文久三年)

戸田大和守殿

三條前大納言

「

十二日御認貴翰今十六日六ッ時拝見先以向暑候処御揃御安穩恐賀之至存候乍去少々御違和且又北堂君ニも御不例之由重疊御案申入候折角御看養所祈候扱八日八ッ時比御着府之旨先以無御滞御帰着安悦之至ニ候時勢も色々承及如何と御案申入居候処早々示給安心仕候將又例之騒キ先ツハ穩之由併真之靜謐ハ些と手間取可申旨段々巨細御示承存候上京人も可有之承候秋月可申談候精一郎急ニ御登し之由承候尚同人可申談候何かと御心配御察申候

一 御道中晴つ、き之由珍重御都合と存候

一 御詠拝見感吟忝存候色々拙生ニも日夜存出し甚以恋慕難止既去朔日一書差出候節愚詠進上候事ニ候御笑吟可被下候右書状もおそくとも十日迄ニハ着之心得之処延

着扱々いかゝと存候

一粒金丹早々御登し千万忝御礼厚申上候

一越前様御直裁天狗御排擯恐悦存候追々御成人頼母敷存候

一京地先同様之形勢二候へ共ツマリハ日々切迫と相見候

ニ付而も御再上のミ待くらし候

一去十一日 八幡 行幸一夜御通夜十二日 還御候大

樹臨期不參不被供奉候又々何か彼是と有之由ニ承候其

外一向何事も不承候

一攘夷とかく無覺束是のミ歎入候御地形勢後便可示給候

(後欠か)

四〇八 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月十六日

口章

誠ニ昨郵便ヲ以御懇達相届忝仕合ニ奉存候彼人被帰御示談被成下候由不日ニ何と欵御模様も相分候ハ、其上御光来可被成下旨何共深々忝得力申候右御吉左右のミ昼夜ニ

心ニ掛ケ居候事如何ニもして相調ひ候方ニ御運ひ願申度候不調ニ而者実ニ途方ヲ失ひ申候精々御心配被下置度候書外其内得拝面万々可申願候也

十二月十六日

追申外ニ深川ノ一条も宜願申度候此分ハ当地ノ抵当ニ御座候事

絨

岡谷繁實公

高松保實

御親披

四〇九 久我通久書翰「弁事宛」(明治二年)二月二

十八日

三條輔相公_ら之御書面一通正ニ令落手候也

二月廿八日

通久

弁事
御中

京_ら之

書面

宅

右為持差上候也

二月廿八日

弁事

実愛承候一封正落手致候

戸田老先生

池田章政

御直酬

四一〇 池田章政書翰「戸田忠至宛」五月九日

昨日^者華章被投候処留守中尤徳大寺江罷越夜二入帰邸仕雪手謹読仕候先以愈御清榮令大賀候然^者尊邸之義二付養父方御談申居猶下官着府之上御相談申候様二との事二申上候由依^而今日御退出方御来駕被下候段承知仕候今日ハ無拗差支有之何卒明日御来駕被下候ハ、別^而難有奉存候将亦何奇之美菓御惠投深々畏入候何も拝願万々可申述候也

五月九日

尚々呉々も今日^者無拗御断申上候可相成ハ明日御来駕可被下候以

上

四一一 高階丹後守書翰「戸田忠至宛」四月二十一日
(封)

勤仕之心懸薄き人の由

奉復

経支辨

華墨謹^而奉捧読候今日^者暴風騒敷候得共尊体 益御機嫌能被為在御座奉恐賀候然^者昨日^者 若様御来駕二被成難有其節手馬宮崎馬之義ハ大守様御乗領乍失敬御不案心付御用弁二相成義付可差上様被仰聞不少奉恐承候然ル処今日^者御叮嚀之御肴代拝領仕不少義重々奉拝謝候御辞退申上^而も返^而失敬難有頂戴仕候過刻^者近辺蔵用二罷出御請延引二相成奉恐入候将亦過日^者本願寺内願之義早々御申込二相成候段難有何分宜敷奉願上候陳^者伝奏ハ日野殿御老人速二御請之由感賞仕候先蒙人公家と被存候最早天然之時来ル哉と存歎息仕候□□乍併一時も御早く平穩二

相成 御前之御趣意御貫徹ニ相成候様祈居候何れ不日

參殿万々奉伺上候先^者右御札迄早々不一再拜

四月廿一日

高階丹後守拜

戸 大和守様

御座右

尚々昨日ハ留守中ニ^而御即答不申上御請延引ニ相成奉
恐縮候御高免可被下候書外拝顔万々可申上候以上

戸田老君

貴答

茲監

四一二 亀井茲監書翰「戸田忠至宛」五月十二日

(封)

戸田宮内大丞殿

御直覽

亀井茲監

四一三 東久世通禧書翰「岡谷繁實宛」(明治三十五

(封)

年)二月十四日

相州鎌倉宮

宮司

岡谷繁實殿

貴翰拝見仕候倍御安靜奉欣賀候然^者一昨日ハ御繁勤之中
御光采寛々拜顔仕千万忝併甚龜略失敬^{而已}奉恐縮候右御
札可申上候処態々御懇書ヲ以御挨拶被仰下殊ニ御入念之

御書中何共恐懼之至其上何寄之御品御惠投被下誠ニ難有
早速拝味仕候彼是御丁寧之段奉万謝候先^者貴答御札迄如

斯御座候草々頓首

五月十二日

(ウ)

封

二月十四日

相州逗子

東久世通禧

御安全珍重存候今十四日逗子へ出浮申候却說拙履歴口演
之義当節議會開会中ニ^而速記者隙無之候由閉会后迄猶豫

致呉候様との事ニ御座候長日暖和之時候ニ御頼可致候寺
師より宜御断申上呉候様との伝言御座候

先日画帖ニ^者春詞詩相認申候御社へ参拝致度存候何れ其
内御都合御打合ノ上参拝可仕候早々不備

二月十四日

東久世通禧

岡谷繁實殿

四一四 島田龍章書翰「戸田忠至宛」十二月二十七日

(封)

間瀬和三郎様

嶋田勘解由

御直披

間瀬和三郎様

龍章

侍史衆中

一 翰奉呈候先以御揃益御安泰奉恐賀候扱昨日ハ遠方御光
駕被成下難有付^而ハ 其御主君様^并ニ尊所様御配慮之
御次第等ハ帰洛次第具ニ 関白殿へ言上ニおよひ候ハ
、嘸々 御満悦之御事と奉恐察候付^而ハ品々拝領物難有

隨^而此八丈島五反小刀鞘一口右ハ聊御返報之印九牛
外^{ニ御列書ニ組等}之一毛迄御笑草ニ奉懸御目候御吃留可被下候且又粗袴地
沓外ニ御列書一組

右ハ大塚儀八郎様へ進上之仕度候乍恐御達し被下度奉願
候尚幾久敷御懇命御引立奉願上候乍憚 其御主君様へ
モ厚宜敷御礼之義被仰上御取成奉願上候尚追々可申上奉
存候明日午後発足大取込乍略書前書御礼申上度如斯御座
候恐々敬白

十二月廿七日

尚以大取込乱筆無正体御判読奉願候以上

四一五 渋沢栄一書翰「戸田忠至宛」(明治三年) 三

月九日

(對)

(ウ)絨

田島武平渡

(オ)

戸田宮内大丞様

渋澤大蔵少丞

梧下

拝啓一昨日御打合申上候人物之義取糺し候処全別紙之通
之原籍ニ候間御省於て養蚕世話方被仰付聊御差支ハ有之
間敷奉存候尤本来之手順ハ岩鼻県へ御達相成同県申付
其上にて取掛り可申筈にハ候得共差向候義ニ付直ニ御省
方当人へ御達相成追^而手順相運ひ候とも御不都合ハ有之
間敷哉幸ひ同県知參事も出京候間右等ハ可然被 仰合候
様仕度候

原種^并養蚕器具其外桑樹買入等之義^者最早至急ニ御決定
無之^而ハ手筈行違可申候間早々御指揮有之度候岩鼻県へ
御達相成候蚕婦之義も地方於て人撰出来いたし慥成もの
四人程明日頃着京之趣右人撰方同県より被命候ものにて
上州島村田島武平と申者昨夕小生方へ罷越申聞候同人ハ
上州随一之養蚕家にて至極之妙手ニ有之且人物も律義篤
実にて県方郷長被申付地方之事務ハ重立取計居候次第此
度之養蚕ハ実以難有次第と感激之余態々出京いたし且前
書婦人撰方にも大ニ尽力いたし候趣等昨夕逐一承及候旁
不取敢右武平尊邸へ差上候間何卒御逢被仰付御聞取被下
度候且壹度ハ御場処も拝見被仰付篤と同人之見込御聞了

有之候方可然奉存候乍去同人ハ居附候^而右之御世話申上
候事ハ出来間敷候間世話方ハ矢張荒木七郎にて可然哉ニ
奉存候其辺も前書武平に御問合相成候ハ、見込可申上義
ニ奉存候武平義ハ今朝拝謁之上当県之參事へ罷出同行に
て參 朝いたし人撰之もの差出方等申上候積之由候間
其節直ニ御場処拝見被仰付七郎義ハ今日中位ニ御決定改
^而御申付相成候方毎事整理可仕事ニ奉存候右之段愚考奉
得尊慮度勿々頓首拝白

三月九日

波澤栄一

戸田閣下

尚々委曲ハ武平其外へ申付さし出候間御逢之節御聞取可被下候

四一六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月十六日

^{(朱書)(前文欠)}

一繁左衛門母所勞ニ付六日立帰国候愈無人相談相手無之
事々件々聞々濛々途方ヲ失ひ申候何分御再上相待申候
吉精上京相待申候西野笠間儒等も来り不申候
一御詠忝く又

・ 旅路にて君か心の引れしハわか都よりひきし也けり
一明十七日立二て帰府之人有之由唯今承候早々御請旁一
書差進候実々御請斗且乱書御仁恕可被下候以上

四月十六日

戌半刻認

追申返々御両所共御大事ニ御用心早々御快復祈申候
当方一同無異御休慮可被下候勇記一郎右衛門へも宜
頼入候時氣御用心く奉折候也

封

四月十六日戌半認

戸田大和守様

三條前大納言

四一七 開墾入費借用願案

今般 勅諭謹而拜承仕実ニ難有御義諸民覚眠追々実セ
キ相立テ万国ト並立ン事ヲ心掛ケ候義必定之御義と恐悦
至極ニ奉存候尤万国ト並立ル基ハ所謂富国強兵ニ有之其
元者農商之両道広大ニ行れ度右之道開カント欲スルニハ

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

座食之遊民有之候而者自然其風習押移り中々以富国之道
難相立と心配仕候依而愚臣先年来心掛ケ野州何郡中村地
内帛川最寄桑植付又昨年来総州何郡何村原野地江茶植
付尚追々田畑開墾仕乍不及日夜尽力追而者諸税上納弥見
込通相整候上者多分之御国益も上納仕度ト懇願仕候今般
非役ニ相成候上者実ニ座食同様之身ニ而恐懼至極片時も
難堪次第二付何卒右座食之罪ヲアカナイ天恩之万分一も
奉報度志願ニ御座候依而元藩士之内壮健成もの召連右両
地之内へ出張開墾仕度然ルニ元来困窮ニ而右開墾入費差
支依而者国恩ニ奉報度志願も難相成哉と焦志心痛仕候依
之甚奉恐入候得共当節金五千兩拜借被仰付右ヲ以前段開
墾精々尽力仕度と奉存候尤上納之義ハ十分一秩禄之内六
十ヶ年割ニ直ニ大蔵省ニおゐて御引上ケ被下置候様仕度
只管奉懇願候誠恐誠惶謹言

四一八 成務陵盗品についての掛合書〔宛先不明〕

成務陵江先年賊忍入取出し候御品御取計方之義ニ付別紙

之通越中守殿^ら御達之処 成務陵何れ之辺^ら取出し候
哉且如何様之御品ニ御座候哉其次第二寄私勘弁之処越中
守殿^江御答申上候心得ニ御座候間右御吟味之節賊申立之
次第^江御手数御書拔被 仰下候様仕度候則越中守殿^ら之
来書^并其元様被 仰立之書面相添此段御掛合申候

四一九 移転願書についての書翰案（慶応元年）

願書差出候義^者於小生同意既ニ其義可申遣哉と存候位之
義ニ有之候乍去朝廷^ニ而^者厚御声掛リ^ニ而^者右之通ニ相成暫
之字永キ事ニ被 思召其御沙汰も蒙り京都 宮中諸藩^江
も響候処へ当人土佐守^ら移転手輕之願差出候^而者 朝
廷之思召と致相違当人^ら朝廷之 思召ヲ崩し候様ニ御汲
取且跡々御声掛りも当人引越之覚悟ニ候ト幕^ら被申候
節^者 朝之方ニも被成方有之間敷仍之當時差向候処^者過
日 殿下へ一橋^ら入御覽候間老兩名之書末文ニ周防守へ
も申聞可置土佐守へハ於江戸表為心得候様早々可申遣と
申所ヲ以江戸へ早々御沙汰被下候様ニと一橋へ迫り歎願

候^者忽チ江戸へ可申參右御沙汰ヲ土州請候上^ニ而^者追而移転
之節別紙之通手輕ニ仕度と 公辺^江も願立棚倉へも懇
談候方可然 天朝^并一橋^ら内々^ニ而^者も嚴然と御沙汰ヲ
蒙り夫ヲ乍存先願之通ニ書面差出し候^而者 天朝一橋ヲ
疑ひ候様ニも相当り又以後 天朝御声掛り之邪魔ニ可
相成と甚心配仕候願書差出候処^者至極同意ニ候へ共差向
候処土州^江之御沙汰第一ニ蒙り其上^ニ而^者手輕之願書差出
し候方可然哉と存候事

四二〇 兵隊差出し猶予願案（慶応四年）

五月朔日迄ニ兵隊差出候様御沙汰之趣敬承仕候然ルニ元
来無人之处当春 大総督官^并奥羽^{（同方）}西国鎮撫使^江御附添
之者差出其後本家宇都宮戰爭ニ付同所へも差遣し當時有
余之人員無之私日勤之供立切^ニ而^者甚心配仕候仍之右夫々
^江差出し置候もの共帰京迄之所兵隊差出し候義御猶豫被
成下候様奉願候以上

四二一 守戸人員の覚書

預り八十七人

四百三十五石老人五石ツ、

守戸三百九十九人

千百九十七石老人三石ツ、

メ千六百三十武石

此倭数

四斗入ニメ四千八十俵

御酒

右御例之通被 仰出候哉

但其時 白峰社遷御以前候今度御同地候哉或ハ後院

御地如何候哉

(朱書)

神祇官附紙

先此度之儀^者後院御庭ヲ被用可然存候御備^者此内之

通ニ而先可然候

一勅使^者諸陵頭ニ無之別段被仰出候方可然存候

六月廿七日

神祇官

四二二 諸陵頭代拝についての覚書(神祇官の附紙つ

き)

七月三日 垂仁帝千八百年聖忌

慶応三年四月十七日 後冷泉帝八百年聖忌

御引上同月七日於 白峯社御地諸陵頭御代拜勤仕候

御幣 金銀

鯛 二尾

餅

四二三 大樹公参内についての御沙汰書案(慶応元年)

(朱書)

「慶応元年壬五月廿二日大樹公参 内之節御沙汰之事」

山陵多年及荒蕪兼々恐懼之事ニ 思食候処去ル文久二

年於幕府遵奉御修補之義一切戸田越前守^江委任同人為代

同姓大和守家来共召連上京五畿内丹州 山陵巡拜候処

或者田畑ニ簋食又者宮杜堂宇民家等造立有之不尊不敬類破至極殆可及廢絶之處不失古制不謬真偽 神武天皇以後百有余所之山陵速ニ御修補盛大ニ成功既ニ

遣之上卒業之義達 叡聞候処当 御宇ニ至リ 天

祖以來連綿タル 皇統顯然尊奉數千年之荒廢一時御修補

御追孝莫大之 御懿德赫々相輝候段畢竟大樹篤

志誠忠^(朱書)「且者祖先優武以前之功業ニより」多年之御惱

襟一旦ニ御快然相成^(朱書)「と故爲問」 思食候仍之爲御

感賞何ニ宣下何品被下候也^(朱書)「先代之旧功をも被出思召前太政大臣秀忠

贈太政大臣家光等立神号 宜下御内意被仰下候事」

今度御用地ニ可相成哉之御取調被成候地所最寄ニ別紙之

通 山陵有之哉ニ^(朱書)御書付并 絵図被遣尤不分明之場所

も相見右者 山陵ニ相違無之儀ニ候者周廻何程相除候而

可然哉并旧跡等ニ候者其場所而已除置候而可然哉御問合之

趣致承知御書面絵図共篤と致一覽候処右場所^(朱書)御書面并

四二四 山陵地所についての案文

絵図之通山陵數ヶ所被為在古來々尊敬仕置候御場所故此節専ら取調中ニ御座候而殊ニ尤御龜末ニ不相成御場所と被存候且周廻之義ハ山城國ニ^(朱書)而山陵者何れも狹少ニ付大凡壹ヶ所二十五間四方程も御除ニ相成候へ^(朱書)可然と存候弥地所御引揚之節^(朱書)尚御談御座候様致度存候

四二五 戸田忠恕(越前守)寛典についての案文(慶

応元年)

常野浪徒追討戸田越前守へ幕命有之候処家来共不束之廉有之旨ヲ以同人江嚴重之咎申付家祿ニも及し候旨風聞有之然ル処越前守義山陵御用被 仰付候ニ付^(朱書)而者同姓大和守并家来共永々令上京格別ニ尽力多分之費用等いたし千歳荒廢ヲ起し數ヶ所御修補此節九分通余致出来 朝廷

御追孝相立幕府精忠之美名後世ニ伝へ候義家来共不束之筋有之候共右 朝廷幕府へ対し未曾有之精勤之廉も有之候へハ格外寛典之沙汰有之度殊ニ山陵御用相勤候者嚴科ニ被宛候^(朱書)而者御追孝難相立叡慮被惱不安思召候仍之領

知之義^者先々之通復古越前守^者慎被免候様被成度尤以後
罪之疑敷をゆるし功賞ヲ重じ候義則幕府繁栄之基本ヲ深
被 思召被 仰出候間此節柄譜代之家筋仁慈ヲ加へ無
過失様取計可申旨肥後守へ御沙汰之事
肥後守東行見込通幕吏転役之上取計可申事

(題簽)

岡谷文書 二十一

四二六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月二十日

(封)

戸田大和守殿

重徳

昨烏ハ御投書之處泉山參詣中不克即答失礼いたし候向寒
ニハ候へとも意外暖氣不順氣愈御当りも無之玆重存候然
ハ水一件御本家公ニも御周旋御尽力乍影氣張居申候能こ
そ為御知芳情厚辱存候早々御答も可申筈ながら秉燭帰宅
例之無人不得止失礼御免仰之通在京丈ハ無事ニ可有之姿
ニ候乍併聊ニても御為方と安心之事ニ候扱今日御本家公

岡谷文書一幕末・明治書翰類一(二)(原島・松尾)

方伺候処愈昨朝 宣下被為在候趣横植も免レ玆重々々御
互ニ一安心ニ候扱是ハ上でき恐悦也併貴藩之響ニハ頓ン
と不相成扱々御氣毒ニ存候て種々勘考候へとも愚案行届
不申心配いたし候然ルニ昨日之御示諭ニてハ先々御帰陣
之趣御安心御察し申候併無益之雜費と申人命と申実ニ不
便氣毒千万之事ニ候付てハ外人之跋扈も弥可甚御見込も
御尤く御同様憂苦ニたへぬ事ニ候扱又長之方御わひ申
出し候都合之よし夫故十八日責掛延日之事触示ニ相成候
趣安印一昨日語り申候左候へハ何と欽寛大之御所置ニ可
相成と存候事ニ候猶万々期接眉之時候早々不典

十一月廿日

二百今日ハ泉山御門御立柱之由參詣之砌承候定而御繁多なるへく
存候へとも昨日之御答迄申入候也追々恐悦此事ニ候

戸田賢兄

梧右昨日御答

大愚老

四二七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」(元治元年) 十

二月六日

口上

毎々御念答痛却候只今安印帰邸少々感冒惡寒ニ付書状差越し候本紙ハ三卿へ遣し写シ御目につけ申候此趣にてハ弥大合戦ニも不相成と存候併北陸道も幕命有之候ハ、又同様欬氣毒なる事ニ候扱示談之趣ハ一趣向にて可宜哉何も此書取斗にてハ十分ニも参りかたく明朝面語之上と存候御本家江も只今申入候猶万々明朝分り次第可申入候早々

臘月六日

二百写し御覽後明朝ニ面も可返給候為写上切候へハよろしく候へとも手間取深更ニなり候ても如何故御かへし願入候明朝にても

宜候

荒神口賢兄

大愚老

四二八 (差出し人不明書翰)「宛先不明」(慶応四

年) 九月十九日

追日冷氣相進候処弥御勇健被成御旅行珍重奉賀候昨今ニは東京へ御着と奉遙察候此表御静謐ニ御座候いよ、明日者 御出輦之由至極何之御障も不被為在 御機嫌克被為入奉恐悅候追々寒氣ニも趣候旁長之御道中時候御中水土之替ニ而御障不被為在候様只々奉案勞候

一供奉之御医被下物之義其後度々高階内分申聞坊城阿野中山殿江も重々申上結句中御門殿御取計難被成

御内義江内々相頼申候様之事移ニ付其旨高階江申述

表使江も私ども内々相咄置候処早速以 思召御内々

百金ツ、被成下候蘭医両人之処は坊城ヲ以 御内義

五百金ツ、被下候趣ニ御座候不案内之私忝人そん外御

用多近來は燈火ニ而退出之義多心配仕候不遠御帰京之

上万々可申上と文略今日ハ飛脚出之義承候間御伺申上

度如斯御座候以上

九月十九日

尚々私義無異日勤仕候条乍憚御放意可被成下候早々

以上

御直披

四月二日

香川敬三

并事御中

四二九 東久世通禧書翰「岡谷繁實宛」一月二十五日

岡谷繁實殿

東久世

一先帰宅致候再卅日比ニ来逗致候手鑑帖ハ御預り致候拙筆出来分幸便有之指上申候何れ不遠御宮へ參詣可申候早々
不

一月廿五日

東久世

岡谷殿

別封差上候御一覽被下候上可然御周旋奉願上候岩卿ニも一兩日所勞引籠之由德卿ニハ一兩日前当職辞表被差出候処被召留候趣其後出仕ニ御座候哉追々引入候人斗ニ而実ニ恐入候事ニ御座候於小生ハ引入候を高潔と致し候心底ニハ毛頭無之実ニ長々ニ相成恐入候情ニ出候事ニ御座候此段別而御汲取御取計被下度存候併賢考も被為有候ハ、御教示希入候也

四三〇 香川敬三書翰「并事宛」四月二日

拜啓仕候誠に御面倒ニ者被為入候御事ながら別封右大弁卿江御届被下度此段奉願候頓首

二白十四日夜ニ不快尤当分之事とハ存候へ共折悪敷儀ニ而段々出仕も可及延日其段何共恐入候ニ相願候且ハ此上又々長ク可相成哉も難計何分余程老年衰弱困入候ニ快復も及遅々歎々敷存候何も御憫察希入候也

四三二 釋玄猷書翰「岡谷繁實宛」明治二十五年五月

十四日

(封)

東京府下南豊島郡淀橋町

(オ) 岡谷繁實殿

貴酬

京都今熊野町

封

泉涌寺ニテ

(ウ) 五月十四日

釈 玄猷

└

岡谷繁實殿

御侍史中

四三三 杉孫七郎書翰「岡谷繁實宛」明治二十五年五

月三十日

(封)

四ツ谷淀橋

岡谷繁實殿

親展

杉 孫七郎

└

辰下薄暑相催候処兎角不順之氣節ニ候貴所愈御清榮奉大
賀候扱先般ハ戸田家建碑之際ハ色々御尽力色々御懇遇ヲ
蒙千万難有奉多謝候当方ヨリハ毎度欠敬ノミ平ニ御免被
下度候御帰東後早速御懇書ヲ被下難有奉拝謝候早速当方

ヨリ御札状可拝呈本意之却テ恐縮仕候猶早速御返札可申
上之処尔来法会続内外多忙ニ相紛不本意ニも遅延仕候不
惡御海容可被成下候先ハ乍延引御札ニ併貴答如是書外奉
期再伸候勿々頓首

五月十四日

釋 玄猷

御安泰奉拝賀候陳過日參堂御厚遇万謝仕候近日之内閑処
ニて一会相催度兎玉より多分御口合可仕候先ハ乍延引御
札申上候草々頓首

五月卅日

孫七郎

岡谷老台

研北

御取口日記別て難有奉存候

四三四 福羽美静書翰「岡谷繁実宛」九月十日

（對）

岡谷繁実賢兄

福羽美静

親展

（ウ）

拝呈近來ハ取紛候而御無音申訳無之候此程ハ大風雨如何
為差御障無之候へかしと存候扱沈澄池之水漏ること又非
也と新聞も人話も様々申候実地如何候哉御承知之辺伺度
候猶実否ハ或家之井水ハ穴蔵とか申候御一見之事有之候
哉同村内之事故一応実檢も致し置度考候貴慮伺度候御手
数ながら様子御示被下候ハ、千万可奉謝候右拝顔と存候
へとも一応以書中申上候略儀早々謹言

九月十日

美静

岡谷繁実君

梧下

四三五 福羽美静書翰「岡谷繁実宛」五月二十六日

（對）

岡谷様

福羽

山本復一書狀在中

近來御疎遠打過背本意候いつれ不日御閑話相願可申候此
一封山本復一より到來候御達申候御入手可被下候右迄勿々
謹言

五月廿六日

美静

岡谷様

四三六 瀧川元以（讚岐守）書翰「戸田忠至宛」二十

三日

（對）

戸 和州君

瀧川讚岐守

亦呈

尊答奉畏候私丈ニ御座候ハ、即罷出可申候へ共原と同座
にて被仰付候事故乍御苦勞明日橋公へ御出を願可申候市

之進ハ凡四ツ半頃ニ無御座候てハ罷出不申候其思召に而

御出張被遊可被下候此段尚又奉申上度迄早々頓首

廿三日

二月十七日

保實

彈正殿

四三七 高松保實書翰「岡谷繁實宛」(慶応四年)二

月十七日

(封)

斯波彈正殿

保實

内啓

尚々夫故鎮撫使先鋒と相成候上ハ不及帰京候事勿論ノ事ニ存候也

甲府戦争数合ノ後城中乗取候段早々申越し有之度事

此後早打大津ヲ早駕ヲ仕立梨木町辺寺町辺往反大評ヲ立サセ度

也

本文之次第不容易次第ニ付猶京地働キ之辺夫々付届方莫大ノ物入ニ付被差心得取計方も出来候ハ、精出登財方可被取計誠ニ生死ノ堺ハ今日ニ有之候也

四三八 高松保實書翰「宛先不明」(慶応四年)

尚々鎮撫使へ折々樽肴可相贈もの也但し遠方ならハ近寄候上ニテ宜候事

以急翰得貴意候然者先着兩人ヲ以一昨夜已来昨日中今日

二至迄既ニ決死之歎願 天朝江申立候所東山道鎮撫使

岩倉大夫同八千丸等江附属致し已来 朝廷鎮撫使之先

鋒と申ものニ被 仰出候事と漸只今解付相整候ニ付何

レ無程表立可被仰付候ニ付先艸々此旨及急達候依之只今

大垣表ニ宿陣候鎮撫使方江

岩倉家々司

北嶋仙太郎

大垣表ニテ
鎮撫使參謀

宇田栗園

右態々発向応接ニ相成候迄之運付申候尤先着兩人共大垣宿陣^五只今馳向居申候

一依之昨十五日未明ニ差立置候通り兩三日已前ノ御沙汰

ニテ^者鎮撫使^六護送ヲ致し急ニ帰京有之候様被^仰

出候旨鎮撫使へ被相達候事ニ候へ共今日限り右ノ御沙

汰ハ御止メニ相成候ニ付一改更ニ自今^{東山道鎮撫}

使先鋒被^仰付候間此段御内意早々申達候ニ付必々

心得違致し甲府表ヲ急ニ引払帰京ヲ相催し候ニハ今日

之次第二^而ハ不相及候事ニ相成行候故ニ艸々此段得御

意候明日大垣表^江先着之兩人発向尤岩倉家^六も家司北

嶋仙太郎大垣へ馳向候万事咄しハ大垣表ニ^而品能相成

候也

一内侍所も御局向も御引連ニ相成事

出立済

一御親征大総督

出立済

参謀

有栖川帥官

正親町少将

西四辻大夫

西郷吉之助

林^(政)求十郎

穂波 三位

川 大尉

平

平岡掃部権助

上田右兵衛尉

河野宮内大録

跡 八 人

出立済

改為東海道先鋒兼鎮撫使総督

橋本少将

覚

同

同副使

柳原侍從

一大坂表 行幸廿二日ノ所又廿八日ニ相成候事

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

同

改為東山道先鋒兼鎮撫使總督

岩倉大夫

来廿八日出立

海軍總督

聖護院宮

同

同副使

同 八千丸

同

同參謀

庭田大納言

同

同參謀

乾 退助

中山前中將

同

改為東山道先鋒兼鎮撫使總督

北陸^イ

宇田栗園

松田左馬允

同

同副使

高倉三位

右之通被 仰出候事

右以一紙右京大夫被申渡候由左京權大夫被演說候本番^ニ

同參謀

四條大夫

二月十四日

光有

小林三木吉

高松三位殿

津田山三郎

近々出立

奥羽鎮撫使

澤 三位

此度御取扱掛り役此兩人也御心得可被成候

同

同副使

醍醐少將

岩倉殿大垣本陣付

同參謀

黒田了助

三

宇田栗園

品川弥四郎

同 京都雜掌

北嶋仙太郎

四四〇 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月二十四日

口章

誠ニ過日ハ寒氣ノ折柄態々光来被下置兼々願置候彼佐州ノ一条都合不惡ノ御移り御洩シ被成下何共千万深々得力申候全ク貴官ノ御高声柄故ノ御運ヒと実々難有狩申候早々国人共へも其段申聞為難有狩申候右ニ付廿五日比迄ニ規則書等取調改正ヲ為仕新写持參ノ筈ニ御座候国人共其節御札參館ノ筈ニ御座候何レニ御苦配并人力車等ノ惣テ之御恩謝ハ皆成就ノ上ニ可奉謝と申居候事ニ御座候今日ハ誠ニ保實老身ノ赤心丈ケ貴官ノ御深情ヲ感謝迄ニ罷出申候事ニ御座候

一扱外ニ深川藏質ノ一条云々別紙ニ荒増貴館ニテ御硯ヲ拜借保實書取申候事ニ候此一条何卒相叶事ニ願度候遠方と違当地ノ訳合故ニ成就可仕哉と奉察候

有様ハ余程秋比ヨリノ延滞咄しケ様ニ押詰申候甚以

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二) (原島・松尾)

自由ケ間敷候へ共当暮ニ道ヲ付ケ遣し候ハねハ至テ不工合ノ事御座候御察し願度候假令金融ハ明春ニ相成候共此一条ハ相調ト云事ヲ一寸御聞し御手紙ニても願度候左候へハ都合ノ事御座候御働キ願申度候事旁以今日ハ態々參上致候事ニ御座候也

十二月廿四日

追申可相成ハ郵便ヲ以□□深川ノ一条ハ云々出来易キ訳合也ト御申越し願度候也

臧

岡谷繁実公閣下

保實

御親披

別紙副

四四一 大原重朝書翰「岡谷繁實宛」八月三十一日

大原重朝

(ツ)

豊多摩郡淀橋角筈

寒香園主

(オ) 岡谷繁実殿 至急件

三月十五日

岡谷繁實殿

小笠原長育

白下

御返事拝見候委曲分り申候然ルニ断然拒絶中ニ最初御相談御座候千円ハ最前御約束之通り我等へ御渡し被下候儀ヤ其処判然せされハ坂部へ聞しかね候間今一応御洩し被下度候此段艸々以上 八月三十一日 重朝

岡谷翁

折返し御答煩し度候

(封)

戸田大和守様

戸田越前守

閣下

平安

(封) 四四二 小笠原長育書翰「岡谷繁實宛」三月十五日

小笠原長育

(ウ) 岡谷繁實殿 貴下

春寒未去候処先以益御清穆奉大慶候□□小生病中者毎日御尋問ニ相預り千万辱次第奉鳴謝候此比漸快起ニ付右御報印迄二粗品拝呈仕候条不惠御叱留可被成降候先者右申演度書外拝芝相期候勿々頓首

度々御渾書御惠増被下難有謹読仕候如貴命薄暑之候御座候得共益御清健被成御座候段至雀躍奉欣賀候然者小生儀も無異消行仕候間乍憚御心易思召可被下候扱過月者道林寺帰府委曲貴地之御模様拝承仕候且又 山陵御普請も追々御成行ニ相成大和河内和泉摂津右四ヶ国之御分不殘皆出来既 勅使等迄定而今者相済候事と奉恐察候是迄御誠忠貫徹仕於私難有奉感歎候 伯舅君ニも夫々為御安内御越之由拝承仕何共御難渋之御儀と奉遠察候將又家

古復之儀肥後守殿より(朱書)謁談御座候条被仰下是又承知仕候

段々御厚德之次第以何可報哉徹身骨難有万々奉大謝候扱
松平上総介江被仰合候義右同人より小八郎江内談有之候
条具承知仕候且所替一条七右衛門必至と尽力致候乍去一
月位差延候儀殆六箇數御座候扱伊東長春院義も先月一度
相越申候脚氣之義も今年ハ未相発不申候若相萌候得者速
彼藥服用可仕候間御安心可被下候段々延引貴酬二相成至
怠慢恐縮仕候御仁恕之程奉伏望候右者御請迄申上候恐々
謹言

閏五月十日

越前守

和州君

二白時下折角御厭被成候様奉折捧候乍末筆其
御惣
君江も宜鶴声奉希候早々不宣

四四四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」七月八日

戸田和州君

實愛

殿下御書ハ御覽後御返し被下候

追申唯今帰宅早々大乱書御推覧被下度候也

御揃御安全恐賀候昨日御出拝面忝存候扱唯今殿下引取
申候今朝罷出拝謁相願候処一兩日暑邪御困之上昨夜之余
程御困逆も御面会ハ難被成由二付無撓以書取申入候昨日
御預り申置候御書付ヲ少々書改尚又小生書面二致し差上
候処別紙之通被答付候間此俟懸御目候書付問答故十分速
も不相弁荒々之事二而相尽兼申候此方ハ昨日之御書付
之趣二而申入置申候故明日欽明後日一橋罷出候ハ、御談
ハ可有之と存候一橋御談之御模様ハ猶相伺可申候此段參
上御談可申と存候処 親王御方被召候二付一応引取
装束ヲ改メ參上二付今日ハ不能參入以書中荒々右啓上仕
候尚又御心付之義も候ハ、可示給候先早々不具

七月八日

封

和州公

内々

正三

四四五 戸田忠行書翰「岡谷繁實宛」明治十五年八月

二十八日

(封)

神保町壱番地

戸田忠行

(ウ)

角筈新町百四十三番地

(オ)

岡谷繁實様

親展

昨烏^者態々以御使煩瑣管加之何奇之御品御投与被成下厚
奉万謝候其節^者折あしく客来にて御請も不仕候条御高免
可被下候緒て広告書出来二付昨日御使之者へ御渡申上候
就^{而者}甚御手数恐縮二^者御座候得とも御序之砌五条公へ可
然奉願度且大河内君之処^者如貴命折角出来ニも相成且ッ
仮令御死去相成候とも御名前ハ記載有之候^而妨無之と存
候間此段申上候迂生儀参館にて可申上之処少々差支有之
候間乍大略以書中御礼旁申上候早々叩頭

八月念八

尚々折角時下御自養專一二奉折候也

岡谷君 貴下

戸田拝

四四六 鈴木良三書翰「(宛先不明)」

第参局谷位君閣下

第源輝聲 頓首

昨日下午五點着熱海雪中超山路復一興也熱海温煖猶貴局
長前擁董竈後構煖鑪扣々昨夜一浴身体如春謹此報謝
厚惠

旅次 臨泉浴舎 鈴木良三

四四七 前田書翰「岡谷繁實宛」十一月十八日

過日御噂之満仲謠本一冊供 貴覽候御落掌可被下候也

十一月十八日

前田拝

岡谷君

前田

親展

四四八 賞典高書上

賞典高

一現米貳千五百石

内

現米千八百三拾石

九百拾五戸割

軒別貳石ツ、

同九拾老石貳斗六升

死傷之者分与

殘米五百七拾八石七斗四升

所分

内

金百円 招魂祠年中官祭ノ節寄附

(封) 四四九 秋元興朝書翰「岡谷繁實宛」十月四日

岡谷繁實殿

秋元興朝

「

先日申送候通り御間暇之節乍御足勞御責臨(朱書)被候間返
候二付御一□(欠損)可被成候右者御來臨之節御持參被下度候也

十月四日

秋元興朝

岡谷繁實殿

四五〇 瀧川元以(讃岐守)書翰「(宛先不明)」

御請

讃岐守

拝展委細被仰下候趣謹承何かと御迷惑と山々奉深察候就
而明日 君ハ築地へ御出張可被遊旨右者以之外之御事と
乍憚御止メ可申上候過日拝見仕候処なか／＼御むり二御
座候私儀御普請所へ出掛ケ一寸罷出候様可仕候凡四時頃
尊宅へ罷出委曲伺候様可仕候。昨日之御書御別紙とも榎
本原立も為見候上則返璧御落手可被下候何も右御請迄大
坂表より大急御用帖差越し候尤矢張私限り同役立も内々
探索もの申来只今目付方与力談中甚敷略御免可被下候万々
明日可申上候早々頓首

即刻

尚々小栗下総事関東村々取調御用被仰付今日坂地出立
仕候御勘定奉行ハ御目付筆頭小笠原摂津守於坂地被仰
付候乍序申上候也過日申上候□乍少々御子様方へ差上
申候也

日差掛り居申候段御困と察候へ共御入来是非御頼申候
此鑑節只二本二候へ共無毒ノ品ニ付進入申度候也
彈正殿 保實

四五二 高松保實書翰「岡谷繁實宛」四月十日

(書)

斯波彈正殿

保實

内啓

「

誠昨日^著苦勞ニ存候弥御壯健珍重候抑甚以差掛り至極御
頼申かね候へ共今日差掛り火急ニ御頼申度事出来候間今
昼飯前後ノ内光来待人申候於領掌^著忝存候此段御頼申遣
候也

四月十日

尚々御頼ノ子細柄ハ少々戸田侯へ御頼込被下度一儀ニ
候尤和州表^ら願筋有之 禁裏へ献油取締方一件ニ御
座候 和州表ニ当家猶子称念寺と申方^ら願立居申候今

九日

四五二 (差出し人不明書翰)「(宛先不明)」五月

昨^著尊翰拝誦仕候霖雨霽々之候愈御清安大賀之至然^著兼而
願置候踏ニ足御廻し慥ニ落手仕候一足は外^ら頼まれ居候
而御座候間承り候^著不用ニ相成候ハ、返上可仕候代料は
何程ニ御座候哉何度何卒御一筆希上候西宮一件尚参事へ
も^与得申間置候事ニ御座候間分り次第尚可申上候何も御
封中慥ニ拝承仕候頓首拝

五九

四五三 池田書翰「戸田忠至宛」五月十二日

以寸楮申上候霖雨連日霽々敷御座候処先以益御勇健被成

御勤奉恐賀候然^著其後^著御無音打過恐縮之至偏御仁恕奉
 希候扱過日中川氏より御咄申上候閑東一条先日岩倉殿口
 氣^二而^者不日に御免も被 仰出候御運ひ之御趣ニ御座候
 処今日迄何等之御沙汰も無御座若 尊君様ニハ何そ御
 聞込も被為在候哉奉伺度何分此間中川氏も発足ニ相成此
 上ハ 尊君様^而ニ相成何分御依頼申上候間宜奉願候
 何分 御免之義被 仰出候ハ、人氣も有之鳥渡なり共
 帰国仕候ハてハ迎も此先御奉公も六ッヶ敷甚心痛仕候其
 内拝顔万々相願候得共先以書中相願且何そ御聞込も被為
 在候哉と奉伺候草々頓首百拝

五月十二日

尚々時下御厭専一二奉存候此間中川氏方相伺少々御不快ニ
 被為在候由如何被為在候哉奉伺度一入不順季御厭被有
 候様奉折上候再拝

戸田様

池田拜

玉座下

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二) (原島・松尾)

(表紙)
 「岡谷文書 八止」

岡谷文書 卷三十二 目次

間瀬和三郎ヨリ

十二月

秋元但馬守ヨリ

戸田忠至へ

極月廿一日

戸田忠至ヨリ

宮内卿へ

松平慶永ヨリ

三月十五日

明治四年七月十四日

大原重徳ヨリ

戸田忠至へ

五月廿四日

全

全

三月四日

大原重徳ヨリ

戸田忠至へ

六月七日

日野資宗ヨリ

全

十月十八日

大原重徳ヨリ

全

仲冬中二日

全

全

十二月四日

全

全

十月十四日

柳原前光ヨリ

戸田忠^(綱カ)総へ

九月三日

嵯峨實愛ヨリ 戸田忠至へ 六廿八

岡谷文書 卷二十三 目次

三條實美ヨリ 戸田忠至へ 九月十一日前田利邨ヨリ 岡谷繁實へ 天長節秋元興朝ヨリ 全 十一月十日福羽美静ヨリ 全 五月十五日

全 九日

全 三月十三日

杉孫七郎ヨリ 全 十月廿三日

全 六月六日

戸田忠至ヨリ 正月戸田土佐守ヨリ 戸田忠至へ 六月十二日池田慶徳ヨリ 全 三五坊城俊政ヨリ

嵯峨實愛 戸田忠至へ 五月十五日

戸田土佐守 全 九月廿八日

嵯峨實愛 全 六十二

全

全 全 九月廿四日

戸田土佐守 全 正月廿五日

岡谷文書 卷二十四 目次

大原重徳ヨリ 戸田忠至へ 八月廿五日

松平慶永 全 七月十一日

全 全

全 議定へ 三月廿九日

高松保實ヨリ 岡谷繁實へ 除夜戸田從五位ヨリ 戸田忠至へ 十月九日土方久元ヨリ 岡谷繁實へ 六月廿四日土方久元ヨリ 岡谷繁實へ 七月六日

(以上の目次は半紙本に収載)

(題簽)

「岡谷文書 二十二」

四五四 戸田忠至本姓取立願(安政五年)十二月
私義養家と離縁後文政十三寅年中上之御人別二而御分米

代々々年拾六兩被下置福井宗藏外二中間老人御附被成下罷在候処其節間瀬家幼年二而私実姉并甥共難渋之躰難見捨仍而同家へ暫逗留仕居候処 乾光院様御在城之節日々又者隔日位二御機嫌伺罷出度々御咄し之節養家二而難渋仕候次第被及 御聴折節 御意二者其方者又々養子二参り候心得二候哉と御尋ニ付私御答申上候二者是迄養家二而種々艱難仕又者耻辱ヲも度々与へられ候間何卒今一度養子二被差遣被下候者 御当家様御名も顕し候程之精勤ヲ尽し次二者私義も耻辱ヲ与へられ候面目ヲも相雪キ度奉存候間何卒如何程下輩二而も宜敷御座候間今一度御直参之家ニ養子二被遣候様ニと申上且又 隆松院様二も毎々被仰聞候二者御同方様二も御病身二而 公義之御役二も不被相立候義恐入思召候間何卒輔私兄弟之内二而者公義之御役二も相立候様ニと常々被 仰聞候義も有之候間再び養子二被遣被下候様ニと願ひ候義ニ御座候其後間瀬家逗留追々永引私義難手放廿壹歳々廿五歳迄同居仕御在城之毎度折々御噂サ被遊候義も前同断之事ニ御座候其節之御重役戸田三左衛門殿二者格別懇意二而時々出

会夜話等之節被申候二者 御当家二も三百石以上大臣之列少ク且又身二入り候而御奉公相勤候もの茂人少二而常々心細ク被存候間幸ひ私義當時間瀬家へ逗留いたし老人子供其外扱ひ向深情之事二而候へ者右様之人当所ニ来り候杜幸ひ之義ニ付何卒御家臣ニ相下り候様左候ハハ御家之御為ニも相成 御先祖様江之孝道ニも可相成候間養子ニ参り候義ハ思ひ止り御家臣ニ相成候様ニと度々異見同様ニ被申聞私義も愚考仕候処追々年者相嵩ミ間瀬家之処も急ニ手放し候事ニも相成兼候間三左衛門殿被申候ニ随ひ又者 乾光院様度々 御意之御様子茂御家臣ニ被成度思召ニも可有之哉と奉恐察候間養子ニ再び参り候義者思ひ止り御家臣ニ可相成と奉存候へ共隆松院様者御遠行跡之義ニ付 堀興廉院様永井肥前守様奥方様者私幼年之砌々格段御愛憐も被下候事故御家臣ニ下り候義如何可致哉と御相談申上候処御家臣ニ相成候義暫見合候様被仰聞候間矢張 上之御人別二而罷在尤追々年者相嵩ミいつ迄も此姿二而罷在候而者身分之極りも不相付候ニ付如何様ニも御取極メ被下置候様申上候処天保四巳十二月御宛行

二百石被下置御取次上席御家来並被 仰付候段御達兄戸
 田輔御家臣二下り候節と同様之御達二御座候右二付難有
 奉答則 君家御同姓二^而幾久敷忠勤可仕と奉存候処天
 保十三寅年間瀬家相統人相絶候二付以 思召私義同家相
 統被 仰付誠二以奉驚入候次第元々他家相統仕候位之義
 二御座候へ^者何れ二か御直參二罷越度強^而相願陪臣二下
 り候義^者 隆松院様御在世中之御言葉二奉対候^而も御請
 難申上候処全ク 君公御同姓相名乗り候義則 君家御
 繁茂之次第二も御座候間 乾光院様思召二随ひ陪臣之
 身分二相成既二兄弟甥抔多分 御直參之人有之候へ共
 陪臣二下り候上^者表向同間も不相成位之義二^而右様之義
 も多端御座候へ共悉相忍ひ御家臣二相成候義^者 君家
 御同姓ヲ繁茂致し永ク忠勤ヲ可尽と奉存候念慮^ら御家臣
 二相成候事二御座候右二付其節同役中嶋董九郎ヲ以段々
 之趣意戸田三左衛門殿^江申上何卒間瀬家相統御免被成下
 候義^者出来間鋪哉と品々歎願仕候へ共一旦被 仰出候君
 命之義二付兎二角御請申上候様戸田家之義^者追^而 思
 召^(一)之等も有之候段被申聞候二付其節私義も篤^(寛)と愚悟仕世

之中之義万事望ミ相断死去仕候心得二^而只々御先祖様へ
 奉対為國家二生涯忠勤ヲ尽し相果候^ら外二余念無之其後
 河州御村替等之節八寒々抛身命覚悟仕取計ひ候義二御座
 候^而元^ら死去仕候心得二御座候へハ中々御賞誉等蒙
 仰候存念抔^者更二無之然ル処嘉永四亥年不存寄二百石御
 加増被下置難有仕合二奉存候其後御刀被下置尚又昨年中
 被 仰出二^者 靈珠院様御幼年^ら格段忠勤ヲ尽し尚又当
 君公御幼年二付御補佐申上候義心配之事と被 思召御加
 増ヲも可被下置候処御含之義有之候二付此度^者不被及其
 御沙汰御家老上席被 仰付候段被 仰出是又不存寄義二
^而難有奉存候然ル処私義間瀬家相統不被 仰付最初之通
 戸田家二罷在候得^者嘉永亥年被下置候御加増永久戸田家
 之知行二相成第一君家御枝葉之戸田姓繁茂仕永ク 御
 当家大臣之列二も加り可申左候へ^者私義陪臣二下り候^而
 も 君家之御枝葉繁茂仕候へ^者乍恐 御先祖様次二
^者 隆松院様へ奉対候^而も孝道も不相欠難有奉存候一
 牀間瀬家相統人追々死去仕候^者天命之致又^而誠二無
 拠次第と奉存候私本姓戸田家之義^者間瀬家相統人私^江被

仰付候為二大臣之列ニも不加罷在候義^者乍恐人心之致ス
所二^而奉^上 御先祖様又隆松院様へ候^而も誠ニ恐入候
次第二奉存候且又 当君公ニも御家之御枝葉繁茂致し
候様ニ御取計被遊候社乍恐御孝道之筋と奉存候尤間瀬家
之義も古今御由緒も御座候家筋之義ニ御座候得^者 彼是御
愛憐被成下候義ハ難有仕合ニ奉存候得共君家之御枝葉為
間瀬家ニ大臣之列ニも不入罷在候^而者 間瀬家代々亡盡も
恐入不快之義と奉存候又當時私義間瀬家相統仕候得^者 何
卒 君家之御枝葉盛栄ヲ日夜朝暮心掛ケ候義第一之義
ニ御座候然れハ本姓戸田家當時私忤ニ御座候得^者 父子之
間柄等ヲ以遠慮可仕筋ニも可有之奉存候得共左候^而者
君家之御為深ク存込候義薄ク却^而不忠之筋ニも相当り可
申元^ら身分之進退賞罰之義ニも御座候^而者 相扣可申義當
然之筋ニ御座候へ共私義間瀬家相統之義^者 縁談筋ニ^而最
初相統被 仰付候節当人存意も御尋無之俗ニ申アタマ下
し之御達ニ^而縁談筋之義^者 当人其外共熟談之上ニ^而ケ様之
訳故是へ参れ又本姓^者ケ様々々々其節上之思召篤と被仰
諭御懇命之上相統被仰付候^而宜敷筋と奉存候縁談之義當

人無沙汰ニ被仰付候義^者 余り承りおよび不申仍之無腹臆
申上候義ニ御座候^而歎願仕候義ニ御座候間何卒本姓戸田
家異姓之間瀬相統之為ニ衰微不仕最初戸田輔同様ニ被召
出候義ニ付大臣之列ニ被加候様仕度奉存候仍之嘉永亥年
被下置候二百石御加増戸田家間瀬家へ百石ッ、分知仕度
奉存候左候へ^者 私義陪臣ニ下り候^而も戸田家之処大臣之
列ニ加り譜代家来も被召仕候事ニ至り候へ^者 隆松院様
へ奉^上 御先祖様之枝葉大臣之列ニも御入被置候^者
おゐても 御孝道之一端ニも可相成乍恐 御本意之筋と奉存候外諸
侯方ニ^而ハ君家之枝葉家臣之列ニ被加候時^者 夫々附屬之
家来も御附ケ被成候哉ニ承知仕候然ル処私本姓大臣之列
ニも不入時^者 譜代家来も不被召仕家筋ニ相成候義私間
瀬家相統仕候故之義ニ^而呉々も日夜歎息仕候何卒前段之
通百石配分仕都合三百石ニ仕度又間瀬家之義も百石相分
千候へ^者 都合七百石ニ^而同家相統仕候勤功も相残り難有
仕合ニ奉存候昨辰年中御達ニ御加祿も可被下置処 思
召有之不被及御沙汰段被 仰出万一此後御加祿等之御沙

汰も有之候^{而者}実ニ奉忍入 君公ら御賞譽被下置候節々
本姓微少之義相考歎息仕候義ニ付幾重ニも奉辞度何卒亥
年頂戴之御加祿戸田間瀬両家へ分知仕度此段必至と歎願
仕候尤此義も当節奉願候筋ニ無之戸田鍾太郎追而同居引
分れ之節奉願候義ニ御座候乍去私義も五十歳ニ相成候間
万一死去仕候義も御座候^者何卒養子へ家督被 仰付候砌
別紙願置候通分知被 仰付被下置候様仕度奉存候此段兼
而各様迄御内意申上置候間 君公達 御聴被下置候^者
誠ニ安心仕弥忠勤ヲ尽し可申将又一鉢分知之義不容易御
法ニ候へ共外一ト通り之訳共違ひ戸田家之主人間瀬家相
続被 仰付夫か為ニ戸田家微祿ニ相成候^{而者}間瀬家ニお
ゐて義之不相濟事又 君家へ奉対候^{而者}間瀬家相続之
為ニ 君家之枝葉微祿ニ相成候^{而者}忠義ヲ失ひ候事ニ^而
奉忍入候仍之分知奉願候義^者間瀬家ニ^而ハ忠と義之為ニ
有之又私一己之處ニ^{而者}忠孝之為ニ奉願候事故願之通御
間届被下候^{而者}も外並之分知とハ違ひ候事故差障りも有之
間敷と奉存候分知被仰付候節ハ譜代家来被下米も被下候
様仕度奉願候私戸田姓ニ^而罷在亥年御加増被下置候^者則

其節ハ譜代家来被下米も頂戴仕候義故外三百石並之通被
下置候様仕度奉存候斯本姓戸田家之義申上候も自己之勝
手合之様ニも御汲取可有之候へ共聊左様之義ニ^者無之
君家之御為深ク心配仕候^{而者}申上候義ニ御座候其^者後
年 君家之御枝葉私如き身分之もの有之候節私之例ヲ以
同様之御取扱被成候^{而者}実ニ君家之御枝葉繁茂不仕御家
臣ニ下り候者も無之又異姓之御家来考候処も 君家枝
葉サへ右之通異姓相続被 仰付候へ^者異姓之臣下^者尚更
如何之御沙汰ヲ蒙り候哉も難計義と相心得忠勤ヲ励し候
もの有之間敷古人も其親ヲ不愛シテ他人ヲ愛スルヲ惡ミ
申候靈鳳院様御代迄^者都^{而者}御親族様御愛情并御家来御扱ひ
も御厚ク御座候処 大仙院様御代之頃ハ都^{而者}何事も御
龜末之事ニ至り候間何卒 靈鳳院様迄之御振合ニ御古復
被成候^者 君公御為宜敷義と奉存候私本姓之義殊ニ父子
之間ニ抱り甚申上惡き次第ニ候へ共心中ニ有之候義ヲ包
置候^{而者}却^{而者}不忠之筋ニも有之候間無腹臆申上候万一私之
為ニ申上候様思召候^者其段篤と御教諭被下候様仕度奉存
候只々本姓御取立之義偏ニ歎願仕候此段奉願候已上

四五五 棚倉への移転猶予願案（慶応元年）（一）「は朱書」

戸田土佐守先代越前守義水戸殿浪士追討之節家来共不「本案」「隠居」「壬午年中」「義二付」等之

束之旨ヲ以嚴重御咎被 仰付奉恐入候仍之追々棚倉表へ「重々」「御定法之如く」

移転可仕筈ニ御座候処宇都宮領藩地ニ兼々勝手向不如此

意之処近來臨時物入打続加之昨年中浪士追討ニ付只管攻

戰「御座候而」ニ尽力仕前後之勘弁無之散財仕候故莫大之入用相

掛り必至ト困窮ニおよび家来扶助も出来兼昨暮之模様等

遙ニ承り候へハ実ニ家中一統歎ケ敷発年も仕兼候次第全「歎敷」

ク攻戦之後患と奉存候右之処当春嚴重御咎メ被 仰付「場合」

重々奉恐入候右ニ付而ハ土佐守相続之物入有之引続日「諸雜費且」「引続」

光山 御神忌ニ付先格之通領内宿駅本陣其外手入等

仕此物入不少実ニ切迫之勝手向ニ相成家来渡物も不相渡「扶助渡難行困」

上下悲歎之有様ニ御座候而近々棚倉表へ引移り候義何分

難出来仍之江戸表其外於所々種々手段工夫ヲ凝シ候へ共

是迄手ヲ尽し借用仕詰候上之義殊ニ減知被 仰付候後金

主共々皆断ニ而借用方一切相整ひ不申此上何程ニ移転仕「義」

度心配仕候而も右之通引越手当難出来ニ付無拠今般家来「候」

兩人為差登大坂表金主共へ折入而頼談之義申越候然ル処「候得共」

先年来 山陵御用相勤候ニ付大坂表借用手ヲ尽し且昨

年来ハ右御用入用等本家と一切不差越無拠無理成借用も「中」

仕候上之義ニ付大坂金主も調金難出来とハ奉存候得共本

家右様切迫ニおよび候義難見捨私家来共と下坂之上幸ひ

此節戸田肥後守上坂罷在候ニ付同人相談之上金主共へ折

入而頼談為仕候処是迄数口之借用御座候上「供々」

用金調達仕候廉ヲ以当節借用方一切相整ひ不殆当惑仕

候右之通種々手ヲ尽し候へ共東西之金主共皆断之上者外

ニ致方無之乍去是非手段調金仕棚倉表へ為引越度奉存候

へ共何分只今急速調金者逆も難出来当冬收納ヲ以金主方

是迄之借用聊道ヲ付来早春ニ至り折入而頼談仕候者些少

之調達^者出来可致右ヲ早々江戸表へ差下し棚倉表へ為引

越候様可仕ニ付何卒来ル寅三月迄移転御猶豫被成下候様

仕度奉存候御用多之御中右之次第奉願候義奉恐入候得共

本末之間何分難忍無^{〔余儀〕}拗歎願仕候何卒以 御憐愍寅三月迄

御猶豫奉歎願候以上

月 日

御憐愍移転御猶豫之義願之通被 仰付可被下候尤土佐守

方先般御猶豫奉願候処難被及御沙汰旨被 仰渡候ニ付同

人方^者再願も仕兼私共方只管歎願仕候以上

月 日

四五六 家政改革箇条書案

一 公迎^江拘り重モ立候義^者可伺候事

一 上々様方御身分ニ拘り候義重モ立候分可伺事

但シ御縁組又^者御不快之筋他之医師ニ^而も御頼之節^者

申上候事

一 御家政筋御幼年^{中者}成丈ケ古格居置無^{〔余儀〕}拗新規之御法相

立テ候節^者可伺事

但シ公迎^江新規被仰出候義^者格別之事

一 江在御家中御宛行増減之節是又同断之事

一 御用人以上進退之節其意味申上可伺事

一 右之ケ条手輕之義^者御用人ヲ以相伺可申事

一 年始暑寒御用人以上御式台迄罷出候事

一 休役之もの隱居願差出候^者願之通可被仰付哉之事

一 御内輪風義之事

一 御後見様^江御在所御家老年始暑寒呈書出府之節ハ壹度

罷出江戸方出立之節も右同断之事

一 御在所勝手之義^{〔朱書〕}（以下欠文カ）

四五七 秋元禮朝（但馬守）書翰「戸田忠至宛」（慶

応四年）

拙者庶衆戸田土佐守義上京候趣ニ^而途中迄罷越候所不束

之次第^茂相聞候間直ニ途中^ら差戻し国許ニおゐて謹慎候様本末之間ヲ以拙者手切ニ申付候仍^{而者}最初上京之砌御陣前通行之義ニも御座候所今般更ニ御陣前通行致候間何卒無滞御通し可被下候

(封)

戸田大和守様

秋元但馬守

貴酬

四五八 戸田忠至書翰「宮内卿宛」十二月二十一日
(朱書)(折返シ)
宮内卿様 戸田大和守

一輪拝呈仕候嚴寒之節益御機元能被成御座奉恐賀候然^者過日^者早朝^ら拜參仕候処速ニ御目通毎々御懇命蒙り奉深謝候其節^者不願恐御六ツケ敷義奉願候処御叱りも無之御賢考も被下置候旨実ニ難有仕合心強ク山陵御普請御用相勤候義何共御礼難尽言意何分ニも此上共偏ニ御憐恕可被下奉願候將又此品粗麁至極ニ御座候得共御慰ミ

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

拜呈仕候御平用ニも被加候^者難有奉存候私義持參も可仕筈之処御用多之御中却^{而者}奉恐入候ニ付以略以使者申上候先^者前件之義尚歎願仕度時候伺旁呈寸楮候謹言

極月廿一日

二陳

嚴寒折角被為厭候様奉折候呉々も過日歎願之次第尊所様ニも御類焼諸事御配慮多之御中奉願候義無心様ニ^而実以參上も仕兼又書中ヲ呈し候も甚心苦敷候へ共当節外ニ歎ケキ候処も無之私義も必至と差迫り候故不得止勇氣ヲ出し御スガリ申上歎願仕候義ニ御座候偏ニ御憐恕之義奉願上候以上

四五九 松平慶永書翰「(宛先不明)」(慶応四年)三月十五日

月十五日

昨日^者於宮中拝晤大慶之至尔来御清安珍重存候陳^者浪華行幸之儀如何相成候哉弥加茂鳩嶺御拝詣後二候哉十日限り之御行在二候哉尚又被仰度昨夜来之景況相伺

度御申越奉希候扱又弥 行幸ニ就^{而者}官代ハ京都へ御
残シ相成候哉ニ岩倉右兵衛督殿内話有之候弥左様ニ候哉
御探索仰垂示候右之段為可申上早々不一

三月十五日

慶永

尚々昨夜少々又下痢今日不參仕候也乍序大原へも宜
御申伝希入候也

拝啓

永

四六〇 廃藩置県詔書写 明治四年七月十四日

朕惟フニ更始ノ時ニ際シ内以テ億兆ヲ保安シ外ヲ以テ万
国ト対峙セント欲セハ宜ク名実相副ヒ政令一ニ帰セシム
ヘシ朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聴納シ新ニ知藩事ヲ命シ
各其職ヲ奉セシム然ルニ數百年因襲ノ久シキ或ハ其名アリ
テ其實挙ラサル者アリ何ヲ以億兆ヲ保安シ万国ト対峙
スルヲ得ンヤ朕深ク之ヲ慨ス仍テ今更ニ藩ヲ廢シ県ト為
ス是務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ有名無実ノ弊ヲ除キ政令多岐

ノ憂無ラシメントス群臣其朕力意ヲ体セヨ

明治四年辛未七月十四日

四六一 大原重徳書翰「戸田忠至宛」五月二十四日

梅天之模様鬱陶敷候愈御安全珍重存候扱昨日ハ無御滞被
為濟候御儀恐悅^并貴兄ニも御安慮嚙々と御察し申候不取
敢右御歛申入候付てハ御卒業御届可被成由可有左存候付
てハ彼御引取筋之事ニ付何ケと御咄し申候儀ハ如何相成
有之候哉一兩日中ニ御申出しと申はこびニハ無之と存候
へとも此一条篤と御打合決極不定内ニ御引取之振合御申
出しにてハ何欵と可行違哉と案し申候其後正公へも參り
不申候故如何相成有之候哉一向不存候風と昨夜ねざめに
存出し不安心ニ有之右之段一寸申入候尤無御如才事とハ
存候へとも篤と御決極御治定手続等も御承知之上之御事
と存候何レ其内御面会も可申候半なから存し出し候儘ヲ
申入候早々不乙

五月廿四日

必々不及御答候

戸田賢兄

梧下差置

重徳

四六二 大原重徳書翰「戸田忠至宛」

芳翰拝誦候愈御安全珍重存候陳ハ又々御齒痛之由殊之外
強く御差起り之趣嚙々御困苦察候小子も何欵といたし
大御無沙汰故一向不存扱々不本意千万真平く御ゆるし
被下候扱齒痛と申ものハ難義千万之もの折角御保養專一
可被成祈申候其中二時勢御掛念御尤く御示之通り安
も三卿も殿下江御申上至極御欽込之趣此度ハ別段霍平
タル御返答も被為在候趣三卿も伺先夫ハ夫て暫よしかと
申候様之御儀巨細難書取候何分四五日之内ニハ老中可被
召寄御沙汰ニも可相成哉二候扱又長一件ハ一向々々朦朧
といたし扱々不案内之事二候総督方書取差出し候二付極
密三卿江為見給写取候間極々内々貴所之事故御目ニ掛申

岡谷文書一幕末・明治書翰類一（二）（原島・松尾）

候御一覽早々御かへし可被下候先右様之振合ニ相成来り
候上ハ最早寛仁之御沙汰希候外なく候尤寛仁之御所存
ハ勿論被為在候旨相違不被為在候へとも兎角出かね候処
乍不及心配いたし居候併罪人ケ程ニ伏罪いたし候上ハ又
ニハ及間敷と夫丈ハ安心欵ニ候併御裁許早ク不被出遅緩
いたし候へハ其内異変も起り候半欵と是以憂慮ノ一廉ニ
候先荒々申入候猶又分り候事も御座候ハ、可申入候扱又
玉子とをふと申物誠ニ始て扱くうまき物辱例之一酌最
早其時刻ニ相成相楽ミ申候何ソ御移ト存候へとも折節置
かね棚ヲさかし候ケ様之品御座候風味も不宜候へとも御
器塞ケ迄ニ入置候御笑味候ハ、辱存候柔ニ候故御齒二障
り候事も有之間敷哉猶御用心く早々不乙

乃刻

二百此袖ノ嵐痴氣ノ薬主と欵承り候袖びしをいたし候二付とり
のけ候故むさき事ハなく候御制薬之嵐ニ残し置候故幸便ニ上候
御一笑く

回鴻

新在家愚老

内々御一覽御火中

四六三 大原重徳書翰〔宛先不明〕三月四日

追而田舎はなし一冊御便二可被返下候也

御投書辱拜見候如命不揃之時氣愈御平康珍重存候扱従大和先月下旬御歸り之由一向不存候故過日御尋申入候処其由二付早速御悦篤と可申入存候へとも何欵と取紛レ候事とも御座候て怠慢何とも無申条次第二候段々巨細御示諭何も承候彼方ハ御皆出来二相成候趣扱々恐悦之御事嚙々御案意於小子御同様畏存候事二候中々小子之存タル事二てハ無之候へとも聊御咄し相手二相成候筋二候へハ格別二畏存候儀ハ御量察可被下候扱又不寄存御到来として彼地之名産被贈下何とも忝存候実ハ好物別而沢山数日可相樂と御礼難申尽候扱幸便二一寸申入候過日老中大恐入二て帰府下坂等之事又一昨二日被 仰出之件々誠難有御次第二候尤御承知とハ存候へとも写し進入候_{尤御返し二不及候}扱又御下向之日書写物数通返し被下正二落手いたし又其砌ハ東

海佳品數十枚日々相楽ミ不浅忝存候御帰京候ハ、早速御礼可申入と存候内如此大懈怠事二何とも無申条候御海恕可被下候仍早々御答如之候不乙

三月四日

二白何ぞ御礼と存候へとも折節不都合甚無礼之段御仁恕折入候也

四六四 大原重徳書翰「戸田忠至宛」六月七日

拝誦候大暑之砌御勇健御奉職珍重存候陳ハ過日ハ毎々乍御面勵先方懇願仕候故不得止申入候事二候御命之通り万卿も困り之趣左も可有と拝承仕候乍去御便宜之事二候へハ尚又宜願置候扱龜末之品暑中二進入候処結構之御当礼痛却千万候併只今例之一酌仕居候間速二拝味深々辱存候御礼申入候早々御答如之候也

六月七日

報

重徳

四六五 日野資宗書翰「戸田忠至宛」十月十八日

口述

過刻申落候昨日摂政殿御示候外異之模様已丑以来之処書付早々差出候様大樹公^江御申上可有之候仍申入候也

十月十八日

戸田大和守殿

資宗

四六六 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十一月十二日

新晴愉快候愈御安全珍重存候陳ハ只今因藩安達清一郎参り候談話ノ便貴家^江参上仕度旨申候是儀先達^而御咄し申何時^二ても御面会可被成旨御答と相覚居候故直様出頭候とも御頓着有之間敷と存候へとも一応申入候御差支無之候ハ、午後可致出頭旨申居候御差支否御尋申入候乍御面勤御答承度候不乙

仲冬中二日

(朱書)(旨カ)

二白御差支無之被示候ハ、從小子其旨可申遣候心得二候也

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

戸田大和守殿

重徳

四六七 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十二月四日

御書拝観候向寒之砌愈御揃御無異珍重存候昨夜色々御咄しとも承り辱候併一人ヲ闕キ御咄しも煮へ不申残念ニ存候扱今日ハ彼人も民部大輔見立ニ参り候故午後ハ可来御約申候通り参り候ハ、可申入と待居候処参り不申候故只今方催促ニ遣し候処本國寺へ参り今ニ不還来との返事ニ候右故無是非貴兄^江書中可上哉御待可被成と筆とりかけ候処御投書ニ候右之次第^二てハ迎も今日ハ来ル間敷哉ニ存候併只今ニも可来も難計候へハ若参り候ハ、先同人差出し迹^カ可令出頭欽とも存候一御勘考も有之候ハ、甚頼母敷存候其上ハ上策ニ候ハ、私へ御咄しニも不及直ニ三条公へ御申上すこしても早方專要ニも存候扱又丸藥早速為持被下辱存候早服用可為致芳意厚々辱御礼難申尽候早々御答如此候也

十二月四日

二白御端書御丁寧却て痛入存候

皆御定り此一条にて御見合ニ相成何とも恐怖候何レ明日
可及御答候早々御報如此候不乙

十月十四日

回鴻

大愚老

回鴻

大原

四六八 大原重徳書翰「戸田忠至宛」十月十四日

御書拝見候向寒之節愈御平康珍重存候然ハ御移り之御挨拶御丁寧何とも恐縮候扱又御国方又々御到来ニ付五尾被贈下扱々芳意辱存候先日之も見事ニ候へとも此度之ハ別

而大クケ様之年魚見たる事無驚候程之事風味も格別と相楽ミ申候此茶味ひ如何ニ候へとも御器塞ニ入置候扱一件も実ニつまらぬ事ニなり何ともく申条もなく残念從小子も意外御無沙汰御免く何レ其内ニ出頭万々可申述候中村之一件御念示承り候彼者之事ハ是非ならぬことと申事ニ定り候哉然レハ彼者忤有之候故ニ夫ヲ替りニ可相用欤然レハ名前ヲ何と欤可申入候猶明日從是可申入候外ニ

四六九 柳原前光書翰「戸田忠綱宛」九月三日

(封)

戸田忠綱殿

柳原前光

拝復

書冊添

炎暑之所益高安慶賀候岡谷繁實事件御内問之趣承知候同人事蹟調査候処勲勞有之候へ共諸方衆人ヨリ如是希望者輻湊ニ付公平無私ノ精選ニナクテハ難叶不平均アリテハ不当ニ付所詮容易ニ廟議難運今日之处ニテハ成否未タ定ラス何共確答難致候此段及内答候拝復頓首

九月三日

柳原前光

戸田忠綱殿

副啓別紙三冊以序及返呈候也

四七〇 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月二十八日

（封）

荒神口様

石薬師

拜承仕候然ハ只今広方明日御賞可被 仰出ニ付御所意

御尋被申候由驚入申候昨日一昨日等も広卿面談文通等も

度々有之候へ共一切無音ニ御座候如何之心得哉相分り不

申候へ共何分ニも先日越州公慎中故御賞ハ難被行事ハ広

も承知ニ候もはや失念歟とかく條理相立兼候事実ニ驚歎

仕候右様暗々タル所へ申遣し候_而も逆も難相分却_而不審

ヲ懷キ可申哉とも存候間尊公方広へ御申入可給候小生方

ハ直様殿下へ向ケ所存申上何分条理相立候様可致周旋候

就_而ハ御書中之趣相心得殿下へ可申入候本根枝末賞罰之

道暗キ盲徒ニハ実ニあされ切申候如此之事ハ朝政大儀故

篇と一同衆議之上可被行事柄と存候処一向御無沙汰_{小生}

ハ何も存知不申候段不都合千万ニ候何分早々殿下へ可申

入候條理当否勸弁無之事実ニ困果申候何分御直ニ広へ御

申入可給候_{小生}申遣し候へハ少々角立可申と存候且右

様之所へハ逆も條理立タル論ハ難申遣候左様御承知可給

候余り甚敷取計と存候御一包返上候也

六廿八

（題簽）
岡谷文書 二十三

四七一 三条實美書翰「戸田忠至宛」九月十一日

（封）

戸田宮内承殿

實美

先達頼之事甚延引候段氣毒存候間相廻し候宜希入候

九月十一日

戸田宮内承殿

實美

四七二 免職に際しての勅語及び御沙汰書「戸田忠至宛」

勅語

積年勤勞朕感悦ス猶益尽力致スベシ

御沙汰口達

積年王事ニ勤勞大政復古之業ヲ賛ケ奉リ遂今日ノ成功ニ被為至候事 叡感不斜思召候今度被慰其功勞劇職ヲ被免候猶又前途尤不容易御苦慮被遊候益盡力有之候様御沙汰之事

四七三 前田利徳書翰「岡谷繁實宛」九月二十二日

(封)

岡谷繁實殿

前田利徳

貴酬一函添

朶雲拝読如貴諭追々寒冷ニ赴候処愈御壯康御奉務奉賀候然ハ小生事比程中引籠罷在候ニ付懇々之御尋訪殊ニ結構之御茶御惠贈御厚情之至徒然之節早速賞味可仕と深辱奉

拝謝候^{小生}所勞も一時者余程難義仕候得共唯今ニ^{而者}逐日全快明後日ハ出勤仕候心得ニ御座候間乍憚御省念可被下候隨^而此品輕些之至候得共御札之印迄ニ呈晋仕候御笑留希入候右乍延引昨日之貴答迄草々如是何も出勤之上拝眉ニ可奉謝候稽首

天長節當賀

利徳

岡谷大雅君

四七四 秋元興朝書翰「岡谷繁實宛」十一月十日

(封)

岡谷繁實殿

秋元興朝

親展

昨日新田參り候間自分見込も話置候ニ付何共乍御足勞御退省ヨリ精工社エ御出先方見込御聞又先生ヨリも委細事情御話被下度候又其模様ニヨリ御帰宅掛当邸^江御立寄被下度候

十一月十日

秋元興朝

岡谷繁實殿

四七七 福羽美静書翰「岡谷繁實宛」三月十三日

四七五 福羽美静書翰「岡谷繁實宛」五月十五日

此間ハ手扣御返却正入手仕候先般之書籍とも一同之御証書即返呈候御落手可被下候猶先日之書物又御入用時ニ御示候ハ、差上可申候早々謹言

乍略義啓上候史談会名誉会員之事素より小生も尊ぶ事業

三月十三日

美静

ニ付異議無之候併何之尽し方も届き申ましくと恥入居候其辺無差支候ハ、異議無之候間此事御申通可被下候右迄

岡谷様

勿々謹言

五月十五日

美静

岡谷君

四七八 杉孫七郎書翰「岡谷繁實宛」十月二十三日

(對)
一(谷)

岡野繁實殿

親展急

杉 孫七郎

四七六 福羽美静口上「岡谷繁實宛」九日

口上

拝啓御閑暇之節拙宅へ御立寄被成下度奉存候頓首

十月廿三日

杉 孫七郎

過日申上候文久三年手扣入用候間一応御返被下候様奉存

岡谷繁實殿

候右伺度早々謹言

九日

福羽

岡谷様

四七九 杉孫七郎書翰「岡谷繁實宛」明治二十五年六

月六日

(封)

四ッ谷淀橋

(オ)

岡谷繁実殿

親披

(ウ)

杉 孫七郎

其後益後清適奉大賀候陳来ル七日之事兒玉氏より申上候
処御承諾被下候由三四時頃迄二兒玉方へ御出掛相願候小
生同所にて御談可仕候草々頓首

六月六日

孫七郎

岡谷老台

梧下

四八〇 戸田忠至建言書(明治二年)正月

一皇居御決定之義速ニ有之候而大政官御造立ニ相成候上

ニ而万機之御規則被為建候方ト奉存候

一昨春以来戦功御賞且元来勤 王有志之者篤と御取調
之上御沙汰有之度候事

一草莽脱籍之者元藩々脱し候節之可否篤と御調之上御取
扱振被 仰出候方ト奉存候品ニ寄 藩々支之筋も可有
之と奉存候

一柳原其外両名洋行修業之義 皇学修行出来之上ハ可

然哉ニ奉存候へ共無其義彼ノ国へ修行ニ被越彼ガ 皇

国之義ヲ問候節 御答ニも差支可申兼而彼国之人申候

ニも日本人之義ヲ能ク知り候上伝受可致と申候噂サも

有之候へハ篤と勘考有り度者と奉存候尤朝廷御目鑑ヲ

以被遣候義ハ可然是者

朝廷之思召次第第二而人物限

り有之事ニ候当人願ニよつて勝手次第被 免候様ニ而者

追々願人相増大ニ御不為可生も難計仍而洋行願之義ハ

不被 免人物御精撰之上 朝廷ガ被 仰付候義ハ可

然哉ニ奉存候事

一壮年之諸侯近習被仰付候義可然候へ共中ニハ三十以上
ニ而も都而之情実且志之篤キモ有之可申ニ付能々御人

撰御爲二可相成人物^者壯年二不限近習被仰付候^而可然
奉存候

一御侍読之義人物御精撰早々被 仰付度事

一天主教^者何卒御廢止二相成候様仕度候へ共追々増加可
致勢ひ二付容易二廢絶難仕然れハ彼教二不染内皇学之
者多ク出来候様御世話有之候へハ自然増加も薄く可有
之と奉存候事

正月

忠至

四八一 戸田忠友書翰「戸田忠至宛」(慶応二年) 六

月十二日

一翰呈上仕候甚暑之節御座候得共倍御揃御壮榮之御事奉
欣喜候次二拙宅一同不異消光仕候間乍憚御休之思召可被
下候陳^者御東下御延引二付不取敢左近御下し御丁寧二品々
御患投被下御厚志之程奉万謝候乍併御念入候御儀痛入候
御上洛御座候ハ、御暇御願立益前後二^者御東下之由
奉待候処防長追々六ヶ敷相成此分二^而還御之御見留も無

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

之恐入心配仕候種々下評^而已二^而実事更二不相分候右二^而
御東下も如何相成候哉御噂申上候江府も先達市中数軒
打こわし有之騒敷相成候得共先ッ此節^者穩二相見へ申候
川越辺相州辺八王子辺二悪党共多人数相集所々民家乱暴
致候由諸家届等も有之兎角世上不穩行末如何と被案候御
地^者先ッ御静謐之趣無此上大慶奉存候右^者暑中御左右伺
度□上二龜品呈上仕候御笑納可被下候書余後便可申上候
恐々頓首

六月十二日認

土佐守

大和守様

尚以時下折角々々御厭專一奉祈候乍末筆御惣容様江も
宜御鶴声奉希候以上

四八二 池田慶徳書翰「戸田忠至宛」三月五日

(封)

戸田老侯

慶徳

貴答

昨^者貴翰辱奉拝読候他行中不能即報御海恕可被下候然^者
一昨夕^者參上不計御馳走何共恐縮尔来御清光被為渡恐悦
扱御屋しきの義委細備州家来迄平坂新八郎を以被仰聞候
旨就^而は無腹藏申上候様被仰下則先方へ申通し置候圖面
二御廻し落握仕候且又触印之義^者今日^者必御申談被下候
旨是又拝承仕候也

三五

慶徳

拜首

捧復

俊政

置も不調法今更何共致方無候差掛り候処大困り御示之通
入京御差止之者之陣屋江御一泊ハ大不都合不得止淀^{（ふち）}
大坂へ直ニ被為成候方と存候乍去御不審も弥晴候ハ、御
小休旁御立寄ニ相成候ハ、宜數今日申付候内上之間之疊
替為致置候ハ、如何可有之哉模様本國へ移り混乱等出来
候而ハ又々如何

戸田老侯閣下

四八三 坊城俊政書翰「(宛先不明)」

皆々差止而者其刃も心痛候勤王之筋合尤卜申義有之二付御不審被

晴候上ハ御休息可有先今日申付分ハ可見合申聞候ハ、如何哉

宜御勘考可給候仍早々如此候也

拜見候御安全令賀候然^者只今佐太陣屋ヨリ別紙之趣被

仰出候旨申來候旨以外之事左様之義二も候ハ、前以沙汰も被致候ハ、宜候処全三職之不都合扱々困入候乍併不尋

四八四 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」五月十五日
（封）
一和州様 實愛

一(封)和州様

實愛」

御細書之趣具二拝承仕候_ト々向暑二相成_レ処弥御揃御安
泰恐慶存候然ハ野印_江被遣物御廻_レ被下尚縷々被仰下候
趣共一々承存候御趣意之所厚相談可申尚又_{小生}見込之所
等も篤と熟話仕可申候

一山階宮之事も承候今日彼宮へ参入候間猶又相合居可申候

右等御請斗一筆啓上仕候委細御答可申上之処来人有之取
紛居御請耳如斯御座候謹言

五月十五日

封

内々

實愛

四八五 戸田忠友書翰「戸田忠至宛」(慶応二年) 九

月二十八日

(封)

戸 大和守様

戸田土佐守

平安

以寸楮拝啓逐日冷氣相募候処先以益御万祥奉賀寿候陳此
程^者御榮擢若年寄ニも被 仰蒙候義先日申上候通重畳奉
欣賀候尊父御一身方國家安危ニも關係仕候職掌ニ被為入
仰之通 官武之御間御不都合不相成様との御勤向故甚
御心痛被遊候御事実ニ尤^者ニ被為入候へ共諸事一新之御
時節柄別^而 貴父^ニ_者為國官海之風波御迷惑無之候御

議論御十分ニ御奮勵御尽力御妙齡幾久敷御忠勤之程偏奉
願上候右様之事を短才不学之某か申上候^{而者}甚恐懼之至
りニ御座候へ共心附候事を不申上候^{而者}却^而恐入候次第故
心附候儘を申上候間不惡御聞取御海恕之程伏^而奉希上候
御所御用御引受御勤候ニ付^者 靈鳳院様所司代御勤之
節之通御取扱之由嚙々靈鳳院様おもても御満悦之御事と
奉推察候全尊父前々之御忠勤是ニ顯候故右様之御取扱ニ
^者相成候事於野生^茂難有仕合奉存候且兼^而申上候通野生^茂
是度不存寄結構被仰付候へ共御存事之通元方世間不知之
某故不容易時勢右様之重キ御役相勤候^{而者}若為私ニ 公
刃御不都合之事出来致し候^{而者}恐入候迄ニ^而相濟不申事ニ
^茂相成候哉と日夜心配罷在候へ共一旦被仰付候事故御辞
退も難申上御請^茂申上候次第ニ御座候間仰之通自己之儀
^者次ニ致し為國 公刃之御為ニ着眼第一ニ仕惣^而中庸と
申儀も心掛乍不及微力可尽と奉存候且若年之時^者勢ニ乘
し仕損出来候儀も有之又家来も野生之御役威方過失出来
候事有之候故能々心附居候様との御配慮誠ニ思召之通ニ
御座候間厚相心得可申候前条段々之御配慮ニ預り寸時^茂

忘却不仕実ニ難有仕合奉存候此上共御心附等者無御腹藏御教授被下候様偏奉願上候將又屋敷之義も先日巨細ニ申上候処早速坂倉氏方御咄し有之候故哉速ニ今度駿河台歩兵屯居屋鋪拝領被仰付殊ニ便利宜敷場所ニ一藩之歛不過之候事皆尊父之御周旋御配慮故都合宜場所拝領仕候事御高札難尽筆上難有仕合奉存候今般之役成之御歎して何寄之両種拝戴被仰付此又難有奉存候

一喜太郎江被仰合候在所ニ罷在候閉居人之事者当節柄右様之者有之候而却而悪く候間仏參新類対面位者御免ニ相成候而宜敷候段御箇条書ニ而被仰下候ニ付早速家老共と相談仕候処如仰只今ニ至り候而者先ッ後悔仕候間先の罪者相消可申と存候ニ付新類対面仏參之處可宜カルと存候間一応者彼力為ニ御父上様御譴責被為蒙候ニ付思召茂可被為在存候間此度喜太郎罷帰尊公様御箇条書ヲ以閉居人之義ニ付而者当節柄右様之者有之候而却而御不為ニも相成且彼か罪者高復古致し候上者罪毛相消候事故新類面会仏參位者御免ニ相成候而も可然と私共も勘弁仕候間思召之處者如何被為入候哉と七

右衛門方相窺候処御父上様ニ者今于御譴責之處思召被為入候哉色々当節柄之處を申上候而茂御解不被遊且其ニ付御父上様江御直書ヲ以尊公様迄可被仰遣内意御答ニ而先ッ者右之箇条者今暫相止候様との御答御座候間強而申上候而者宜カル間敷と存候間其儘ニ致し置退き申候由同人方申聞候ニ付野生退而愚考勘弁仕候処者彼先ッ後悔之上者相免し且重き役茂相勤候者ニ而新類対面仏參之處者赦免致し候様仕度奉存候尊公様方御父上様迄当今之事勢之處ヲ以前条位者御赦免ニ相成様との御直書ニ而も被仰上被下候様仕度左様ニ相成候ハ、於私茂在所ニ有之閉居人茂無之上者心茂広く相成候事故何共申上兼候へ共右之處御勘考被遊候而如様ニも相成候様偏奉願上候先ッ者此程拜領屋敷之義ニ付而者彼是御配慮御周旋被下且色々御心附之廉ど被仰下誠以難有仕合奉存候右之御高札之印迄ニ龜品備貴覽候若御取葉ニも相成候ハ、本懷之至奉存候外ニ品々申上度事者有之候へ共御存事之通愚筆ニ御座候間思ひ候事者十が一難尽候間御察之程偏奉願上候余者後便可申上

候艸々恐々頓首再拝

九月廿八日

土佐守

御父上様

二仲時季折角御保養被遊候様專要奉存候乍末毫 御惣君様へ

も宜敷御鳳声被下候様偏奉希候現当御役義^者出火之節^者 出馬等

致し候事度々可有之ニ付用心致し怪我等不致様との御心附程難

有兼々叙操院ニおゐても右之處心配仕居候を御酌取被遊候^而前条

御心附被下候程実ニ難有仕合奉存候故御心附之廉々御札答迄乱

筆染申上候 以上

四八六 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」六月十二日

一(封)

回雁

實愛

」

捧誦候益御安全恐賀候昨夕ハ光駕早々御事失礼共恐入存
候扱御頂戴之御肴被頒下御札千万申上候御芳情奉拝謝候
扱又今日小森方へ千美を遣し候処幸在宅面談ニ^而是迄の
厚謝申述猶又下坂之上主人^并野左初へも倚頼之趣篤と為

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二)(原島・松尾)

申談一寸書取も遣し置申候其節小森の談ニハ所替之事ハ

最早延引ニハ決定の趣ニ申居候由ニ候明朝寓居へ可来由

故尚又相頼可申又容子も可承申候先ハ御請御札荒々不具

六十二

封

貴答

實愛

四八七 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」四月十九日

一(封)

戸田様

内啓

正三

尚々返々御用心奉折候早々大乱書御推覧被下度候也

今日^者殊之外大雨ニ相成候処愈御揃御安全奉賀候然ハ御
邪熱氣弥御発散最早御清快ニ被為到候哉何も承度存候不
順之上雨湿等重畳御保養專捧仕候扱明後廿一日愚息着袴
内祝相催度存候時節柄実ニ其由斗ニ候得共一寸祝酒一献
相催度存候却^而御苦勞恐入候得とも未刻比被扨御駕被下

三九

候様願存候自然御出被下候ハ、祝着大慶仕候一向何も設も不仕唯々祝酒斗之事ニ御座候此段希入候別ニ来客と申人も無之冷泉大夫夫婦入来斗ニ御座候

一別紙薩々武伝へ一昨日比差出候由昨日武伝披露有之候間御合ニ備御覽候少々入用候間御一覽後今日午刻迄ニ御返却被下度此段願入候

一時勢之事ニ付御承知之事も御座候ハ、御内洩被下度候何分長之儀六ツケ敷事ニ相聞候備中浪士之事も如何相成候哉其後不承候

先ハ早々如斯御座候恐惶謹言

四月十九日

三白薩之書付ハ先々御内々ニ願入候也

荒神口様

内密

樁木拝

四八八 嵯峨實愛書翰「戸田忠至宛」(慶応四年) 九

月二十四日

(封)

御覽後御火中

戸

和州明公

御内披

実愛

九月十二日夜御書当廿二日到着謹拝聞仕候追々秋寒相催候処 皇上益御機嫌能二十日御出輩以後追々御勇敷

御旅行被遊候趣恐悦大賀之至奉存候貴官御清安御奉職御道中御用御励精段々御東進御苦勞存候何欵御心配恐察仕候御道筋も色々御多端之趣定而御手数と存候併御尽力夫々御都合之趣感佩仕候猶此上御精勤所仰候道中筋人氣合委細御示半ハ安心半ハ案勞存候併徳川氏ニハ尊奉相尽し候趣意之旨感心仕候事ニ御座候

一字都宮養子一条先便啓上仕候通り大ニ六ツケ敷相成殆当惑仕候趣啓上之始末御承知被成下候段被示下安心仕候 御出輩以前段々輔相卿へ及示談置候事ニ御座候其上御出輩当朝 御出輩後輔相卿被残居猶又右之事件同卿らも被示候上猶小生らも申談置候間着府之上委細可

被申談と存候篇と御承知可被下候右事件者余程六ツケ

敷と存候此上ハ唯々成行ニ御任せ置可然存候素ら於尊

官ハ御私情無之一端被 仰出候 勅命貫通候様ヲのミ

御申立之事ニ候へ共行違候ハ却而如何可相成哉何分ニ

も御沙汰次第御任せ置可然存候異々も右之趣厚ク御汲

取奉仰候返々此上ハ御周旋無之方只束手御待チ可然存

候此段分而啓上仕候

一賢息御供奉依御所勞御辞退之事も更ニ御申願ハ先不

可然と存候二十日三十日も相立候上ハとも角も先々御

猶豫之方と存候

右等御請旁陳啓仕候委曲拝答之処荆妻所勞追々差重リ

差引も御座候内昨今大二差重甚心痛公私共只々苦慮焦

思之内相認別而大乱書書損等重々御断申入候御宥免可

給候先勿々如斯御座候恐々謹首

九月廿四日戌半刻相認

追申先々当地ハ靜穩ニ御座候へ共御留守中之義夜

向不安心罷在候其内御帰洛万々可申承候尚々折角

御用心御保愛而已奉折候返々大乱書御推覧且御断

申上候以上

四八九 戸田忠友書翰「戸田忠至宛」正月二十五日

一封

戸田大和守様

戸田越前守

急用

一翰呈上仕候春寒之節御座候処尊堂被為揃益御勇健被成

御座候奉賀候次第弊屋無異消光仕候乍憚御消念可被下然者

今夜御用番和泉守殿宅江被召呼候ニ付則御先手近藤登之

助為名代相越候処重キ御咎メ被仰付誠以奉恐入候畢竟弱

冠之私ゆへ右様始未出来候段伯舅様ニ対候而も至赫面奉

恐縮候尚委細之儀者家老共より申上呉候様申付置将又家

政向之義ニ付御相談仕度義御座候間 山凌(屋) 御卒業

之上者早々御東下被下候様奉伏望候右者此段為可申上如

斯御座候恐々謹言

正月廿五日

越前守

和州君

二白時下折角御厭被成候様奉祈候不具

用耳不典

八月廿五日

二白いつとても早々乱筆御免御一覽火中可被下候

(題簽)

〔岡谷文書 二十四〕

四九〇 大原重徳書翰「戸田忠至宛」八月二十五日

(封)

戸田大和守殿

重徳

御落手可給必不及御答候

四九一 松平慶永書翰「戸田忠至宛」七月十一日

(封)

戸田大和守様

松平大蔵大輔

内用

秋陰鬱陶敷候愈御佳勝珍喜万福候陳者毎々御邪魔いたし

候処御懇情何とも痛却之至二不堪辱存候昨日ハ御丁寧之

御使折節外出中御本家江参り候御答二も不及失礼無申条候扱其砌

と申文也御返し之砌と申色々御心入御札難申尽候御幅紗

返上いたし候便此くわし進入候於御笑味本懐候扱又御本

家御咄し色く有之候併書中二ハ難申入猶又接眉之時ヲ

期候併一向かうはしき事ハ一事も無之むちやくいたし

候事共二困り申候扱又彼夷人江説得之一事ハ逆もく存

候事ノ上余り長座二なり候故御咄し不致しまい候早々要

昨日者於

処 上様益御機嫌能被為人奉恐悦候尚御手前様愈御清

安被成御勤務珍重存候扱者昨日御暇願一条 御勘考之

上被 仰出候由二候得共何分十三日御登 営夫迄二

も御登 営之事二候ハ、折角御尽力被下度候笑々数千又

万金之入費殆閉口仕候尚御様子分り候ハ、御内示被下度

候且又奉書一件之儀も分り候ハ、御申越奉希候先者右御

内頼旁如斯二御座候頓首拜

七月十一日

二白御自愛專一存候已上

戸田大和守様

内用

松平大藏大輔

四九三 松平慶永書翰「議定宛」(明治二年)三月二

十九日

(對)

慶永

三月廿九日

從越前

四九二 松平慶永書翰「戸田忠至宛」

昨日者從其 君公御投翰拝読仕候先以大暑之候二候処

君公弥御清安御奉職令恐賀候扱^者時季御見舞として

結構之御一簣預御惠投深忝存候何レ脱服之上趨門下厚謝
可申述候得共夫迄之処御札之儀宜被仰上可給候御投翰之
貴報^者態と不出候間執事宜御呈達希入候也

慶永

宮内大丞戸田君

御侍臣中

尚々僕不幸にして先月廿三日老母養生不叶物故仕候尚今居喪中
ゆへ本文之通り二御さ候此段も御申上可給候也

(オ) 東京

平穩

議定

御中

松平中納言

聖上益

御機嫌能被為渡御路次無御滯昨廿八日東京

御着聲可被為在と重疊奉恐悦候尚右之恐悦且 御着

輩後之天氣奉伺度如此二御座候 御奏聞宜願入候也恐

惶謹言

三月廿九日

慶永

東京

議定

御中

四九四 高松保實書翰「岡谷繁實宛」十二月三十一日

歳暮新年共御祝詞一時ニ申入度候數寒威御揃御安寧御迎齡致祝着候誠ニ旧冬^著月迫御多繁之御中御繰合セ被成下品能柴田大官御誘引何事モ程能キ御運ヒニ被成下千万深致大慶候実ニ国人共も難有狩申候何れも御礼ニ罷出候様申付置候何卒々々此上ノ所ハ柴田氏ノ御吉左右ヲ待受候事ニ御座候何卒一月十日比迄ニ^著御案内も被下候由深宜願申度候月迫無余暇仕合万事難行届新陽万々御礼も申上候事ニ付深川ヘノ御往反毎々遠路実ニ御察し申上候駿河台辺迄も彼是余程御座候事是以御察し申上候右ニ付調不調ヲ不論御車料為相勤候運ヒニ申付居事ニ御座候何卒御尽力御調談ニ願度神折罷在申候也

貴家ノ梅花ノ満開ノ比三条西^井南ノ三井同伴之約束出
来御座候也

除夜

保實拝

從六位

岡谷繁実公閣下

四九五 戸田忠友書翰「戸田忠至宛」十月九日

瑤章拝読仕候処寒冷之候愈御勇健被成御奉職欣拜之至奉存候小子も意外御疎濶打過候段恐懼之至御海容奉希候然^著戸田大參事鹿兒島行申付候ニ付同人忤輯治儀為修行同行仕度願書差出候ニ付御思慮被成候処父子之情且修行中之儀ニも有之旁以御聞届被成候段縷々被仰下委細承知仕異存無御座候且又修行開濟之義も過日藩邸^江相達置候間左様御承知可被下候右^著御報迄乍延引申上候余^著讓後音候恐惶頓首

十月九日

戸田從五位

戸 宮内大丞様

玉机下

再陳時下折角御加養奉專侍候且御端書ニ迄輯治鹿兒島行御聞届之儀御心配被仰下御丁寧之儀奉存候乍前後

御満堂諸君へも宜御伝声奉希候戸田大參事^著之書翰

^著返却仕候再拜

四九六 実歴抜粹

実歴抜粹

元治元年甲子

十月三日 同四日世子

十一月六日 奇兵 御楯 膺懲 遊撃 八幡 其外同志

中

奥番頭 榎本隼人

町奉行 周布藤内兵衛
祖式壯助

十一日二三太夫并

屠腹 中村九郎
穴戸左馬之助
左久間左兵衛

十四日夜半奇兵隊ヨリ密書諸隊討伐ノ命下ル

香川駅 浦鞆負不在

政事堂ニ行 湯田ニテ面会 入夜四時過乗切ニテ着

十六日早朝出馬七時比厚狭駅ニ着ス

十七日未明出馬日出比吉田駅着朝飯ヲ為ス七時過長府功

山寺ニ着ス

廿六日長府清末兩藩主出萩

十二月一日筑前使者小智小平太真藤登北岡勇平来ル御渡

海ノ談

四日月形洗蔵伊丹真一郎早川養敬巳二五卿ヲ渡ス事ハ長

藩ヨリ御請ヲ為タリト云

十三日高杉暴発

十八日三条西四糸吉田駅着

十九日伊佐駅

二十七日長府工帰ル

慶応元年

一日伊佐駅ニ行 諸隊追討之兵萩ヨリ繰リ出タル故諸隊

決戦ノ心算

二日山口ニ行

五日乗切リ長府へ帰ル

十四日長府発筑前ニ渡海

一防長ニケ国削土無之様 ○解兵ノ事

一皇朝御反正周旋ノ事

一萩表混雜取鎮周旋ノ事

一長州侯父子異條無之様周旋ノ事

十八日赤間着

二十八日五卿ヲ五ヶ所ニ別居之義有リ激論ス

二十九日西郷吉之助来リ加藤司書等ヲ説破関門ヲ徹シ自

由ヲ得ル

三十日博多ニ行大久保吉井税所汽船ニテ来リ上京ニ付面

会ス大久保税所^(ハカ)ニテ上京

二月三日赤間ニ帰ル

五日吉井来ル福岡俗論稍鎮定中岡同行上京

八日白石正一郎方ニテ三好内藏之助直目付井上少輔原田

順次^{報國隊長}大庭伝七奇兵隊長赤根武人長太郎^{三州}

二月
十三日京都薩邸ニ入ル

三月十一日西郷京都着

浦上信濃郡左近久野一学退職五卿太宰府ニ同居稍安心

ナリ

四月二十二日西郷小松大山彦八帰国

二十四日出発西帰

五月〇

閏五月二日田ノ浦ニ着泊

三日馬関白石正一郎方興繕五六郎馬ニテ仰来ル<sup>長府本
陣二宿福岡</sup>

和勝三好内藏之助熊野清左衛門大庭伝七

〇
四日夕帰関

五日坂本龍馬黒岩直方来面会

六日桂小五郎来り面会

九日出発太宰府ニ行 野村靖太田市之進福田良助等

十二日太宰府着 其後西郷不来

六月十一日福岡行

十七日帰宰正俗紛々

廿一日建部武彦落合茂山斎藤五六郎矢野相摸黒田播磨加

藤司書有志家四十八名ヲ罪ス

七月十三日用人斎藤藏人使者ト為テ弁解国論不変ト言ウ

十七日伊藤井上来ル西洋談有リ長崎ニ行 楠木文吉郎同

行薩人ニ頼ム 肥后直次郎俗論田中来リ 俗論家老松

坂丈右衛門首級并罪状書ヲ添正義家老板倉八右衛門方

ニ自訴四人ナリ外二十人自訴ス

慶応二年二月末小笠原圖書頭芸州ニ来リ長藩家老六戸備

後助楫取素彦卜面会ノ筈 父子蟄居相統之者撰十万石

削土云々奏聞

三月三十日幕目付小林二日市ニ来リ拝謁願出 不聞届

(付紙)
二十二日大山格之助初三十五人大砲三門ヲ曳着 川端伊

右衛門三雲為一郎黒田嘉右衛門幕吏ニ面会ス

南奇兵隊百五十余倉敷代官十二三人斗リ討取ル四月四

日也

五月九日山本割腹

十五日毛利興丸二家督ノ達有リ増田初三家永断絶

二十一日幕吏博多ニ移ル

二十六日宍戸小田村捕縛セラル

六月六日小笠原壱岐守大目付木下大内記目付平山謙次郎

徒目付兩人小倉ニ着ス

六月十七日長兵小倉ヲ襲ウ

七月初芸州口石州口小倉口共長兵勝利 警衛大ニ緩ム

宍戸小田村帰国 松平伯州宗秀一断 紀州総督大ニ怒

二十七日小倉諸藩兵潰走攻メ小笠原閣老船ニテ長崎ニ走

ル

八月十七日小林甚六郎拝謁御帰洛之周旋云々申ス 條公

答一身之為ニテ下向ニ非ス寸効無ク帰ルハ不面目ナリ

京師謹慎之諸卿早ク赦免御登用ノ事尽力ス可ト 是ニ

テ引取ル

將軍薨去跡目困難之由ナリ

芸州阿州備前之周旋ニテ止戦

九月六日幕目付去ル

同廿四日佐々木伯初五人来ル

十一月十日測上謙三郎切腹赤根等云々

十二月七日江藤新平牟田口通照来ル

慶応三年一月九日 天皇崩御之事ヲ拝承ス

三月六日薩土岡老公上京之事西郷土佐ニ行決ス

三月廿一日木戸来ル慷慨談有リ廿三日帰長

九月廿一日大山格之助来京師ヨリ大久保ト共ニ長州ニ立

寄久光公使命ヲ以来長芸土兵力ヲ以断行ト決スト

十月六日中村矢之助来ル長ヨリ九月廿九日ニ毛利筑前男

某芸藩人ト共ニ上坂ノ筈 又山縣狂助総督ニテ近日千

人ニ二上坂ノ筈大山格之助モ一大隊ノ兵ヲ率イ三田

尻ニ立寄り長兵ト共ニ上坂ノ筈ナリ

十月十五日將軍職ヲ辭ス

廿一日出帆

廿五日ニ尾崎三良長崎ヨリ土佐ニ行坂本岡内中嶋信行小

廿二日下関着長府世子来迎

銃二千挺ヲ買取り渡ス

廿五日大阪着 迎兵

二十二日小松西郷山口ニ行 薩芸土宇和島ハ別而速ニ上

廿六日淀舟 伏見一泊ス

京云々 十万石以上ノ大名ヲ召ス 小松ハ直ニ土佐ニ

廿七日入浴參 内翌早朝御陵拜

行西郷ハ帰国七日ヲ不出薩公上京ノ筈

十一月二日夜半出足三田尻ニ行兩藩打合云々 木戸広沢

(付録2)
十月生野ニ事アリ

其外面会山口ニモ行

十月大島ヲ為立 松山源藏原道太

十七日薩侯津和野藩主も来大混雜ナリ

同月山本兼馬ト四国行大洲領土居町ニ泊ス 玉川壯助

土佐ヨリモ使者早崎鶴馬来リ居レリ

井出正章 三条山口 四卿氷上

二十日出足入夜白兼行
(朱書)(マ、)

元治元年三月廿六日五卿下ノ関ニ行米仏英蘭軍艦将来ノ

二十二日宰府着

風説有故ナリ錦小路吐血小郡駅泊リ

二十四日東久世徵行長崎ニ行

廿七日下午ノ関着

十二月三日報有リ坂本中岡遭難ヲ聞
(十一月十五日)

廿八日砲台ヲ見ル

十一日東久帰ル供ハ伊藤一人

四月三日四卿山口ニ帰ル 自分正使測上幾太郎副使

十四日小西郷大山来リ復位帰洛ヲ被達

長州ヨリ山縣林五日着船

去八日大会議九日発ス長父子復位復官

十五日ニ帰山口

十九日発足箱崎泊リ

十七日筑前使名左久間左兵衛野村靖当藩混乱ニ付テ也

中村円太投獄十余人獄吏ヲ殺シ(朱書) (マ、)

十九日馬関ヲ発三十余人随行

廿一日博多着泊ス夜半月形早川伊丹真一郎来ル

廿二日客館へ行重役ニ会ス

廿三日同断

廿四日家老矢野外三人来リ鶏鳴ニ至リ帰

廿五日登城藩主ニ謁ス

廿六日客館ニ行前日同断

廿七日黒田家別荘友線亭ニ行家老用人等数人饗応有リ

廿九日返書有リ

五月一日発博多太宰府ニ泊ス左久間ハ対州ニ行

三日馬関着去廿五日錦小路死ス

五日益田廣嶋猶崎左瀬婆多野

六日出棺

七日小郡

八日葬赤妻山

十九日弥兵力ヲ以上京ニ決

六月五日宮部鼎蔵等三条小橋旅亭ニテ死者七人傷四人廿

三人捕縛ノ報達

十日三人上京差止ム毛利登使者翌日側番頭上山縫殿榎本

隼人

十一日山口ニ行三人穴戸備前根来下総国司信濃清水清太

郎二面ス 侯ニ謁ス 真木ハ上京ニ決ス

十二日早朝宮市ニ行来島又兵衛久坂義助入江九一中村九

郎野唯人

十六日真木初福原も発

七月十一日山口館ニテ別盃有リ

十三日親發

二十一日多度津ニ着敗報有リ

二十六日防州上ノ関ニ着ス

廿八日三田尻ニ着ス

廿九日藩主父子重役共評議有リ

八月二日四ヶ国軍艦来ノ報有リ

三日山口ニ移ル

五日砲声聞ユ

六日山口エ使者

七日小郡駅工早馬使者 小沢伊織其外面会

八日三條東久世四條小郡工急行

九日三條壬生山口館二行

十日執政等湯田ニ来ル

同十一日政事堂ニ行和議ニ決ス

九月一日村田次郎三郎来り忠勇隊之取締ヲ乞

二日自分三田尻二行 山縣^井時山直八ニ面シ云々

十一日俗論起ルヲ聞

十月六日因州志士川上等ト申者来老卿ノ脱走ヲ乞之ヲ却

ク

十一月四日諸隊常栄寺ニ屯ス

長野主膳 島田左右衛門 目明文吉

池内大學 鶴飼吉左衛門 同 幸吉

梅田源二郎 頼三木三郎

近衛老女村岡 丹羽豊前守 同 出雲守

森寺出羽守 伊丹内蔵人 山田勘解由

吉田松陰

香川半助 櫻井波門 江木清之進

木戸光允^(老)ニ随行セシハ

三好軍太郎 品川弥太郎^(三) 福田良助

(付紙¹)

(四月カ)

(付紙²)

〔錯簡ナランカ十月以下ハ此書ノ首ニアルベキカ〕

四九七 土方久元書翰「岡谷繁實外宛」六月二十四日

(封)

封

小石川林町

土方久元

(ウ)

豊多摩郡淀橋町一四三

(オ)

岡谷繁成殿^(実)

親展

「

各位愈御安康敬賀候陳^者去十九日御來車被下候由御氣之
毒ニ存候同日ハ例年去ル甲子殉難士之祭典ヲ二時ヨリ執
行致候事故電話ニテ直ニ及御斷置候処何欤間違候事ト拜
察仕候御廻之筆記一覽之上致加筆置候是ハ次ニ御出之節
返上可仕候廿九日ニ正二時迄ニ御出被下候ハ、差支無御
座候若シ御差支御座候ハ、御申越被下度候更ニ日ヲトシ
可申上候先ハ右迄勿々頓首

六月廿四日

久元

岡谷殿

寺師殿

拜誦弥御安康敬賀御示之云々夫々敬承仕候
楠木正成殉難伝出來仕候ヲ以御送可被下趣辱拜謝仕候届
候ハ、熱覽相楽ミ可申候貴酬迄勿々頓首

七月六日

久元

岡谷賢台

四九八 土方久元書翰「岡谷繁實宛」七月六日

(封)

霞ヶ関離宮内

岡谷繁実殿

(木)

史談会事務所

(ウ) 封

小石川林町

土方久元

岡谷文書―幕末・明治書翰類―(二) (原島・松尾)

乃美 宣 (宣忠、織江)

66, 67, 70, 72, 76

野村左兵衛 13, 47,

東久世通禱

206, 216, 220, 413, 429

樋口静康 196, 244

土方久元 35, 162, 497, 498

一橋慶喜 385

日野資宗 187, 465

平松時厚 290

広澤真臣 4

福羽美静 434, 435, 475-477

坊城俊政 166, 209, 381, 483

前田利邨 473

前田 447

待井次郎兵衛 65, 68

松浦 詮 21, 22, 205

松平慶永 (春嶽)

1, 6-8, 48, 138-141,
143-149, 155, 170, 191,
192, 215, 255, 351, 459,
491-493

松本 凝 280

万小路博房 202

柳原前光 469

柳原光愛 198

山縣有朋 (狂介) 20

山内豊信 142, 160

横井小楠 (平四郎) 12, 29

吉村利謙 34

若松県 51, 52

近衛忠房(一峯) 26	406, 408, 437, 438, 440,
近衛通熙 195	451, 494
嵯峨實愛(正親町三条實愛)	瀧川元以(讃岐守) 436, 450
19, 150, 168, 182, 185,	田口文蔵(文之) 16, 53, 57
186, 199, 201, 213, 224,	竹屋光有 439
225, 227-239, 257, 258,	谷口樵志 64
297-300, 312-318, 382	茅根伊豫之介 42
-384, 386-391, 393-	長 茨(三州) 254
402, 407, 416, 444, 470,	土屋相模守 242
484, 486-488	寺島宗則 40
左金吾 369	東山道鎮撫総督府 55, 274
櫻 任蔵 31	徳大寺實則 54
三條實美 10, 56, 200, 471	外島機兵衛(義直) 18
塩谷宕陰(世弘) 39	戸田忠至(間瀬和三郎、大和守)
渋沢栄一 415	59, 63, 77-93, 95-137,
島田左近(龍章) 32, 414	188, 189, 221, 222, 278,
釋 玄猷 432	286, 303, 308-311, 335
章蔵 279	-339, 341-346, 454,
杉 孫七郎 23, 24, 50, 184, 433,	458, 480
478, 479	戸田忠恕(越前守)
杉田成卿(信) 5	173, 174, 425, 443
鈴木良三 446	戸田忠友 171, 172, 481, 485, 489,
高木大蔵 274	495
高階丹後守 411	戸田忠行 445
高島喜平(秋帆) 46	長井雅楽 33
高野保建 179	永井尚志(主水正) 190
高松家 324, 325, 334	長岡護美 245
高松實村 175, 219, 266	中川久昭(修理大夫) 214, 284, 291
高松保實 203, 204, 212, 217, 248,	長谷信篤 262
249, 259, 260, 264, 265,	中御門経之 159
267-273, 275-277, 319	鍋島直正 161
-323, 326, 328, 330-	二條齊敬 158, 226
333, 352, 353, 365, 380,	野宮定功 165

【参考三】

発信人別書翰類番号一覧

「岡谷文書」は、書翰類を横に貼り継ぎ、二十四巻に仕立てた卷子本である。翻刻は卷子本の配列に従ったため、同一発信人の書翰が分散している。そこで、利用の便を考え、前号の分と合わせて、発信人ごとの書翰類の一覧を作成した。数字は編者が付した整理番号である。前号に収載した「岡谷繁実・戸田忠至宛書翰発信人一覧」(【参考二】)に加えて、新たに家や機関名を追加した。但し、発信人不明の書翰や饗餐書の類は除いた。

青山延光 2, 3, 37	大原重徳 27, 71, 240, 241, 247, 250-253, 296, 354-364, 366, 368, 370-373, 375 -378, 392, 426, 427, 461-464, 466-468, 490
縣 勇記(信絹) 49	大原重朝 218, 441
秋月種樹 207, 403, 404	大村益次郎(永敏) 17, 43
秋月悌次郎(胤永) 18	小笠原長育 164, 442
秋元興朝 246, 449, 474	香川敬三(広安) 430
秋元禮朝(但馬守) 176, 197, 263, 457	門村富之 177
有馬道純(遠江守) 152-154	金子與三郎(清邦) 15, 38
安藤信正(対馬守) 157	亀井茲監 163, 211, 412
池田章政 410	川村正平 289
池田茂政 208, 374	北小路随光 256
池田慶徳 169, 178, 194, 210, 367, 482	木戸孝允 30
池田 453	久世通熙 167
板倉勝静(伊賀守) 156	国重徳次郎(正文) 74
井上 馨 151, 183	國松幹太郎 73
岩倉具綱 223	栗原信充 14
岩崎吉十郎 28	黒田清綱(嘉右衛門) 58
巖谷 修 193	黒田山城 60-62, 69
鵜飼吉左衛門 41	高坂源太 274
宇都宮信齋 11	久我通久 409
浦上信濃 60, 61, 69	後藤象二郎 9, 36
江尻莊三郎 25, 44, 45	
大羽循之進 293	

